

アルク英語教育実態レポート Vol.15

# J-SHINE × アルク協同調査レポート

[2019年12月]



J-SHINE 資格取得者の就業・指導実態  
—J-SHINE 資格取得者を取り巻く現状と展望—

特定非営利活動法人 小学校英語指導者認定協議会（J-SHINE）  
株式会社アルク アルク教育総合研究所



# はじめに

---

2002年度に「総合的な学習の時間」が新設され、全国の小学校で英語教育が可能になって以来、小学校での英語教育は着々とその歩みを進めてきました。2011年度には、小学校5、6年生で「外国語活動が必修化」され、2020年度からは、いよいよ「外国語（英語）が教科化」されます。時を同じくして、3、4年生での外国語活動も始まります。

この間、小学校英語についてさまざまな問題が提起されてきました。その一つが、指導者の問題です。現在の小学校教員は、外国語活動が必修化される以前に教員免許を取得した人が多く、また、現在でも、小学校教員養成課程において、英語の教科指導法を教えている大学は一握りと思われれます。そうした実情を踏まえると、「英語を教えることを想定していなかった」「大学で英語を教える準備をしてきていない」人が小学校教員になっているケースが多く、「適切な指導ができるのか」という懸案が教育関係者を中心に提示されてきました。また、当の小学校の先生方からも、「英語を教えることへの不安」の声や、メディアや学会等を通じ多く聞かれました。

そのような指導者の問題を解決すべく、小学校における英語指導者の資格認定を行うNPOとして設立されたのが、特定非営利活動法人 小学校英語指導者認定協議会（以下、J-SHINE）です。2003年の設立以来16年間で、のべ50,000人以上の資格者を認定し、2019年9月時点の有資格者は40,662人です。その資格認定者の一部が、「地域人材」として全国の小学校で指導を行うことで小学校英語教育を支えています。

では、J-SHINE資格取得者のうち何割が、小学校でどのように指導し、どのような効果を生み出しているのでしょうか。これまでJ-SHINEでは、多くの資格取得者を送り出すことで現場の指導者不足を解消することと同時に、全国各地の自治体や教育委員会などにJ-SHINE資格取得者の活用を働きかけてきましたが、その後の実態を本格的に調査する機会がありませんでした。しかしながら、2020年度の教科化を前に、今一度指導者の現状や課題を的確に把握することの重要性が増し、今回の調査実施に至りました。調査は、J-SHINE基幹会員である株式会社アルクが、以前にJ-SHINE資格取得者についての独自調査を実施していた経緯から、J-SHINEとアルクが協同で企画・実施しました。具体的には、調査票を協同で作成した後、J-SHINEから資格取得者にアンケートへの協力を呼びかけ、集まったアンケート結果（個人情報を含まない）をアルクが集計・分析し、J-SHINEの分析・考察も加味して本レポートとして公表致します。

「地域人材」の活用は、小学校教員の英語指導を支える有力な切り札として期待される一方、J-SHINE資格取得者においては、地域人材としての登用そのものがまだ限定的であり、地域人材のうち3割弱の方は無償ボランティアとして教えているという実情が今回の調査で判明しました。しかし、J-SHINE設立当初は地域人材の小学校での登用は極めて限定的であったと思われ、さらに、有償で教えているケースはほとんど聞かれなかったことを鑑みると、小学校英語指導者としての地域人材のニーズは少しずつ高まっており、戦力として認められてきていると言えそうです。一方で、実際に地域人材として教えている人が直面する課題があることも本レポートを通じて見えてきました。教育関係者の皆様には、「地域人材が小学校などの現場でより活躍できる体制づくり」のご参考にしていただければ幸いです。

## ◆本レポートの概要◆

---

### 1. J-SHINE 資格取得者のうち、現在、小学校で地域人材として教えている人は 7.1%。地域人材と回答した人の 77.0%が有償（月給制または時給制）で教えている

小学校で地域人材として教えている J-SHINE 資格取得者の数は多くはないが、有償で雇用されている割合が高く、小学校英語指導者として一定の戦力となっていることが窺える。

現役の小学校教員など、地域人材以外として教えている人と、過去に小学校で教えた経験がある人を含めると、J-SHINE 資格取得者の 15.9%がこれまでに小学校で英語を教えた経験がある。なお、小学校以外の場所も含め、何らかの形で小学生以下の子どもに英語指導を行った経験がある J-SHINE 資格取得者は 68.9%であった。

※本レポート内の「地域人材」は、教員や ALT を除く小学校の外国語教育に携わる外部専門家、外部ボランティア、外部関係者を指す。

### 2. 現在、小学校以外の場所で子どもに英語を教えている J-SHINE 資格取得者のうち、36.9%は雇用条件が希望に合えば小学校で教えたいと考えている

現在、小学校以外の場所で子どもに英語を教えている J-SHINE 資格取得者のうち、36.9%（回答者全体の 13.7%）は「勤務地・勤務時間・指導内容等の条件が希望に合う」、または「十分な収入が得られる」のであれば小学校で教えたいと考えている。J-SHINE 資格取得者の中には、すでに小学生以下の子どもへの指導経験を積んでおり、かつ小学校で教えてみたいと考えているが、小学校では教えていない人材が一定数いると言える。そのほか、現在子どもに英語を教えていない資格取得者の中にも小学校で教えてみたいと考えている人がいると推察される。英語教科化により地域人材のニーズがさらに増えた場合にも、即戦力となり得る人材はある程度いると言えそうだ。

### 3. 現在、地域人材として小学校で教えている人の 50.0%は、待遇に不満を感じている

現在、地域人材として小学校で教えている人が持つ悩みや不満は、「給与が低い（または無償）」（50.0%）、「T1（T2）との打ち合わせ時間が取れない」（50.0%）、「雇用が不安定である」（47.0%）が多い。給与に関して、時給制で教えている人は、授業準備など指導時間以外に行う業務に対する報酬が時給に含まれているケースが多いことも判明した。採用時点で、指導時間以外でも担当すべき業務があることや、それに対する報酬、担任との業務分担など、詳しい雇用条件が明確化されていないことが不満につながっている可能性が考えられる。

### 4. 継続的に優れた人材を確保するためには、資格取得者が必要に応じてスキルを磨き、自治体や学校が地域人材を受け入れる体制をさらに整え、J-SHINE や登録団体が両者に適切に働きかけることが必要

今後、小学校英語指導者としての地域人材のニーズが増えた場合に即戦力となり得る人材は一定数いる。しかし、雇用条件や待遇が希望に合わないので教えていない、もしくは教えているが不満があるという人も多いことから、小学校で継続的に優れた地域人材を雇用するためには、自治体や学校も地域人材の雇用条件を明確化する、雇用条件に見合った待遇を整備する、学級担任と

地域人材が協力して英語授業を進めていける仕組みづくりをするなど、これまでに進めてきた受け入れ体制をさらに拡充する必要がある。また、J-SHINE事務局や登録団体も、J-SHINE資格取得者をさらに小学校英語指導に貢献できる人材に育成することを目指し、資格の認知度向上や、資格取得者のスキルアップ、雇用促進に努める必要がある。

## ◆目次◆

---

はじめに .....	1
本レポートの概要 .....	2
1 調査概要 .....	5
1.1 調査目的 .....	5
1.2 調査対象・方法・期間・回答件数 .....	5
1.3 調査項目 .....	6
2 調査結果 .....	7
2.1 回答者属性（回答者全体） .....	7
2.2 J-SHINE 資格取得者の何割が小学校で指導しているか .....	12
2.3 指導者に転じる可能性がある人材はどのくらいいるのか .....	14
2.4 現在小学校で地域人材として教えている人の実態と課題 .....	19
2.5 まとめ .....	33
3 付録 .....	34
3.1 小学校で有償／無償で教えている人の比較 .....	34
3.2 小学校で T1／T2 として教えている人の比較 .....	48
3.3 J-SHINE 事務局に対する意見・要望 .....	55
3.4 今後の J-SHINE 資格取得者へのアドバイス .....	58
3.5 調査票 .....	61
おわりに .....	73

# 1 調査概要

---

## 1.1 調査目的

2020年度からの小学校5、6年生における「外国語の教科化」や3、4年生での「外国語活動実施開始」を背景に、小学校の学級担任が単独で英語を教える場合の負担増大への配慮や英語専科教員の不足などの影響により、ALT（Assistant Language Teacher）や地域人材（小学校の外国語教育に携わる外部専門家、外部ボランティアなどのALTを除く外部関係者）といった外部人材の活用が進む可能性がある。

地域人材の有力候補となり得る「小学校英語指導者資格」（以下、J-SHINE 資格）の認定を受けた人（以下、J-SHINE 資格取得者）は2019年9月時点で40,000人を超える。では、その何割が実際に小学校で指導しているのだろうか。また、今後地域人材の需要が増大した場合に指導可能な人材はどの程度いるのだろうか。人材がいたとしても、小学校での指導機会を得る上で、または指導において課題があるとすれば、実際に小学校で活躍する人材の確保は難しくなるが、その点はどう解決すべきなのだろうか。

今回のJ-SHINE・アルク協同調査では、上記の疑問に答えるため、J-SHINE 資格取得者の指導状況を定量的に把握することを目指した。今後の小学校英語教育にJ-SHINE 資格取得者をどのように活用すべきなのか、また、J-SHINE 資格取得者が直面する課題はどのようなものなのかについても知り、活躍の場を広げるには課題をどのように解決していく必要があるのかを検討する材料として本調査を活用したい。

## 1.2 調査対象・方法・期間・回答件数

### 1. 調査対象

J-SHINE 事務局が保有する「現資格保持者（2019年5月末時点で資格を失効していない人）」のうち、メールアドレスの登録がある人から、3分の1にあたる12,840人を無作為に抽出。

### 2. 調査方法

アンケートはインターネット上にて実施。J-SHINE 事務局より、上記の調査対象者に回答を依頼するメールを一斉配信し、アンケートフォームのURLに誘導した。アンケート実施ツールの回収可能件数や、記述式設問の分析にかかる工数を考慮し、資格取得者全員を対象とせず、一部を抽出して調査対象とした。

### 3. 調査期間・回答人数

回答受付期間は2019年6月19日（水）～6月30日（日）で、1,980人から回答を得た（回答率15.4%）。

## 1.3 調査項目

調査項目は以下の通り。

### ■属性

性別／年代／居住地の都道府県／J-SHINE 資格の取得年／J-SHINE 資格の種類／CEFR B2 以上の英語力を保持しているか／最新の TOEIC® L&R Test スコア／J-SHINE 資格以外の指導者資格・免許・コースの修了経験の有無／海外に滞在した経験

### ■J-SHINE 資格取得者後の状況

現在小学生以下の子どもに英語を教えているか否か、その場所

### ■（小学校で）英語を指導していない理由

小学校以外で教えている人に対して、どのような条件が揃えば小学校で教えてみたいと思うか／以前は子どもに英語を教えていたが、現在は教えていない人に対して、以前の指導場所と現在教えていない理由／これまで子どもに英語を教えたことがない人に対して、教えたことがない理由と今後指導したい場所

### ■小学校で地域人材として英語を指導している人の状況について

小学校でどのような立場で英語を教えているか／以前指導していた場所／これまでに教えた校数・期間／小学校での職をどのように得たか／採用されるにあたり評価されたと思うポイント／クラスでどのような役割を務めているか／何年生の指導を担当しているか／週あたりの指導時間／小学校での活動は有償か無償か／有償で指導している人の雇用形態／指導以外の業務に対する給与／指導するにあたって重要だと思う能力・経験／自分が磨くべきと感じている能力・経験／地域人材として働く上での悩みや不満

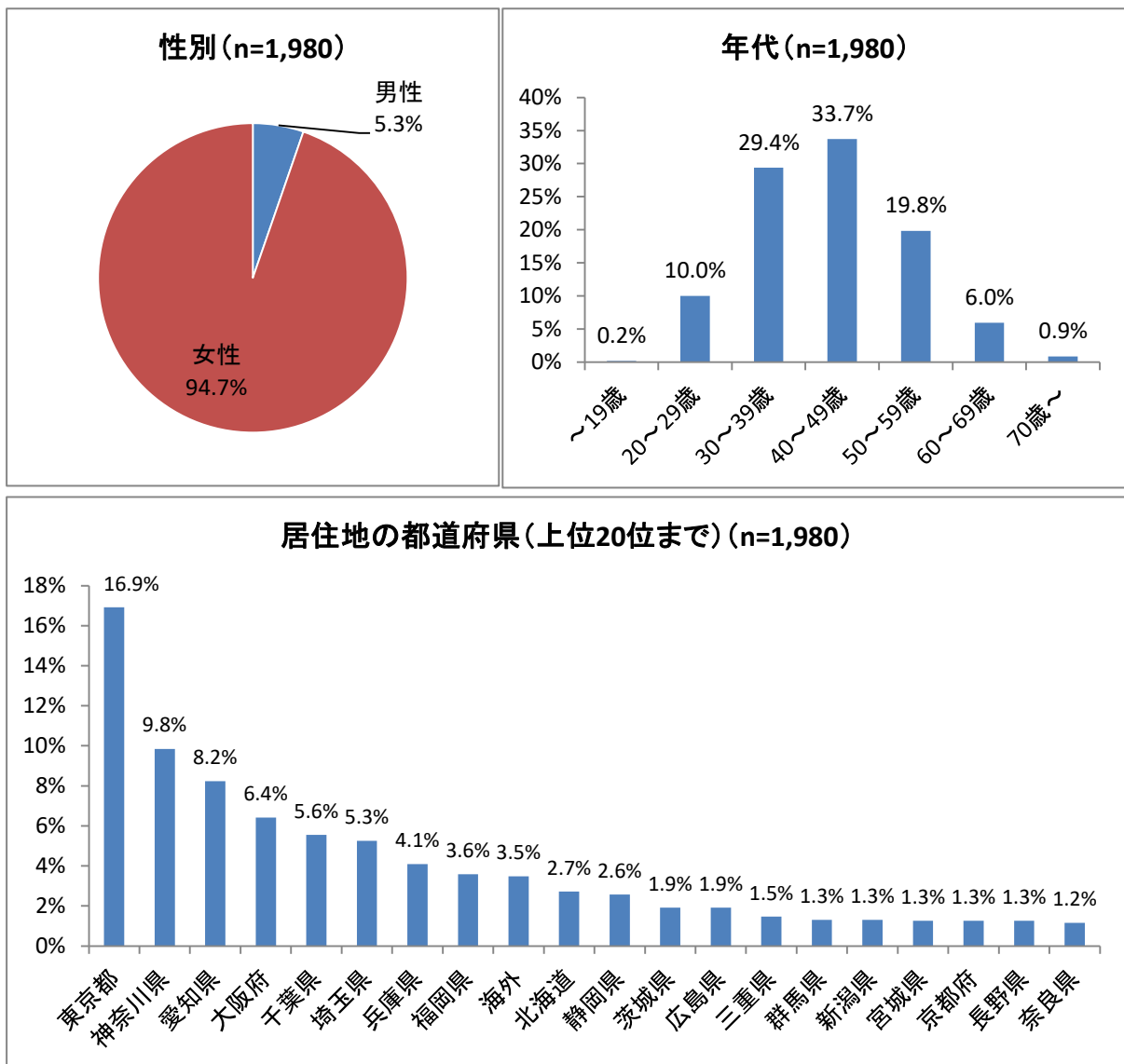
### ■自由記述

J-SHINE 事務局に対する意見・要望／今後の J-SHINE 資格取得者へのアドバイス

## 2 調査結果

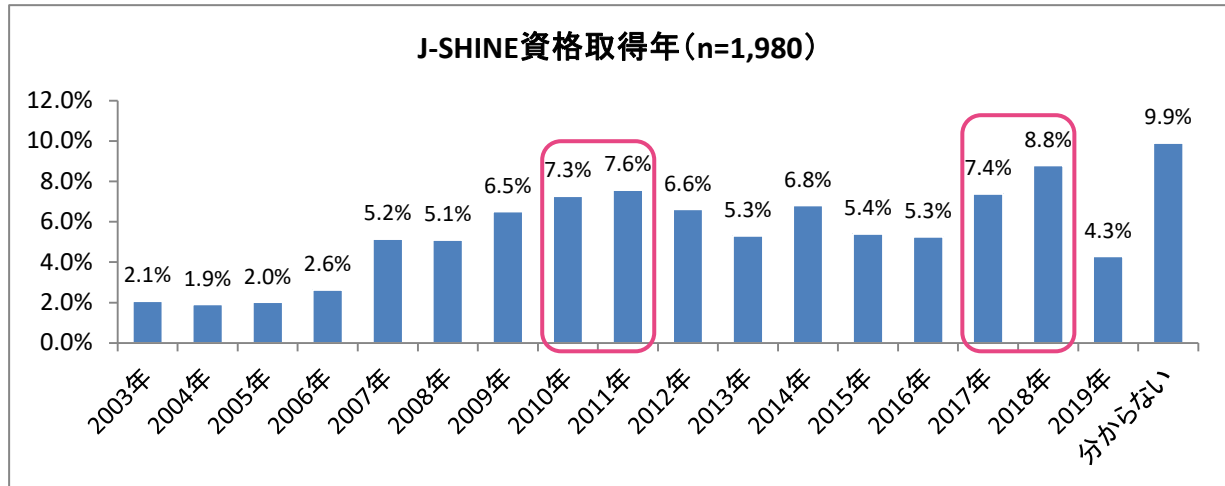
### 2.1 回答者属性（回答者全体）

調査の回答者 1,980 人の属性は以下の通り。性別は「女性」が 94.7%と圧倒的多数を占め、男性は 5.3%であった。年代は「40～49 歳」が 33.7%で最多、「30～39 歳」が 29.4%でそれに続いた。「29 歳以下」は 10.2%、「50～59 歳」は 19.8%、「60 歳以上」は 6.9%であった。居住地の都道府県は「東京都」（16.9%）、「神奈川県」（9.8%）、「愛知県」（8.2%）の順で、大都市圏が多い。海外在住者も 3.5%いる。

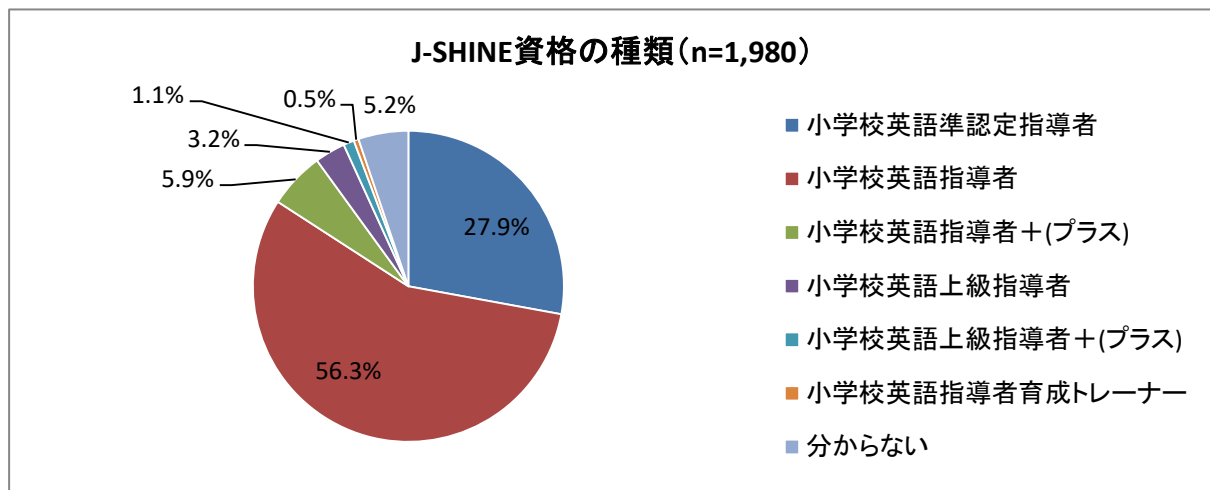




J-SHINE 資格の取得年は、小学校 5、6 年生での外国語活動が必修化された前後にあたる 2010 年（7.3%）、2011 年（7.6%）と、直近 2 年の 2017 年（7.4%）、2018 年（8.8%）が他の年度より数ポイント高かった。これらは小学校英語に関して大きな動きがあった年度であり、資格認定件数自体が増加したため、それが回答者数にも反映されていると思われる。



J-SHINE 資格の種類は、「小学校英語指導者」が最多で 56.3%。「小学校英語準認定指導者」が次いで多く 27.9%。「+（プラス）資格」、「上級指導者資格」は近年新設された資格で、2018 年 4 月から切り替え可能となったため、基準を満たしていてもまだ資格の切り替えをしていない人もいると考えられる。



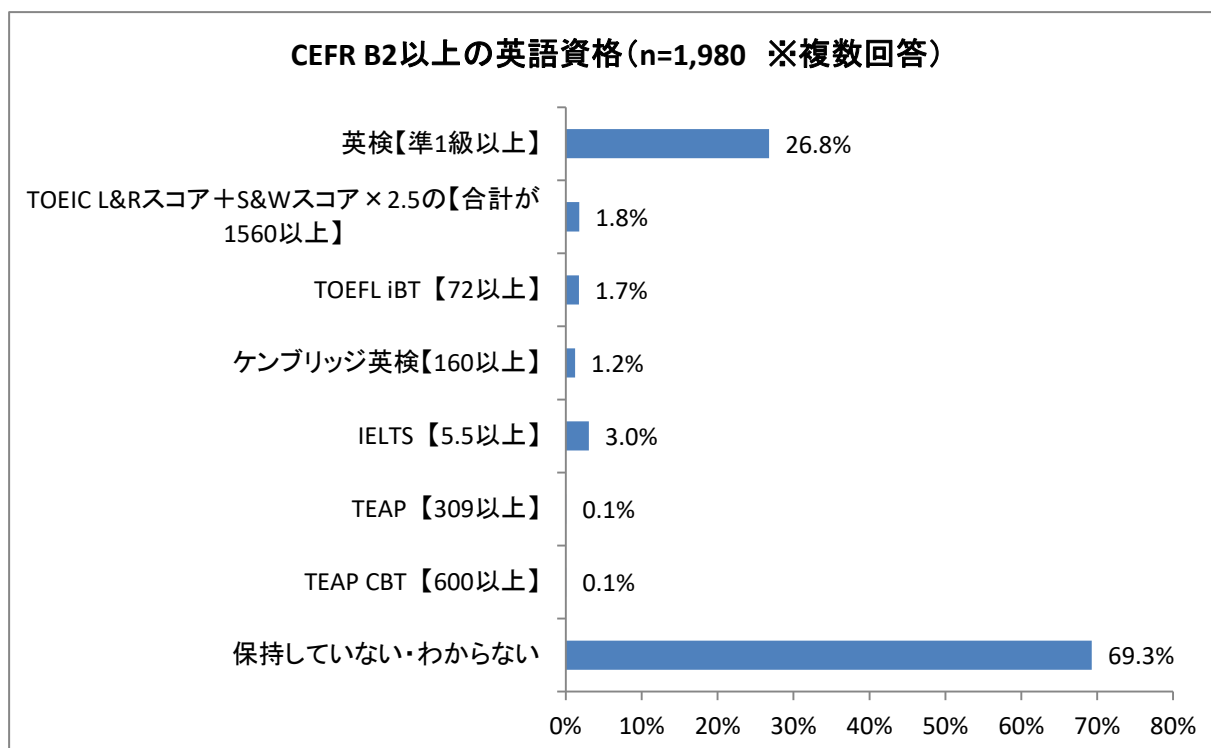
各資格の認定要件は以下の通り（詳しくは J-SHINE Web サイト <http://www.j-shine.org/> の情報を参照）。

資格名	指導経験	CEFR B2 以上の証明	校長または教育委員会からの認定
小学校英語準認定指導者	問わない	不要	不要
小学校英語指導者	50 時間以上	不要	不要
小学校英語指導者+(プラス)	50 時間以上	要	不要
小学校英語上級指導者	200 時間以上	不要	要
小学校英語上級指導者+(プラス)	200 時間以上	要	要
小学校英語指導者育成トレーナー(※)	400 時間以上	要	不要

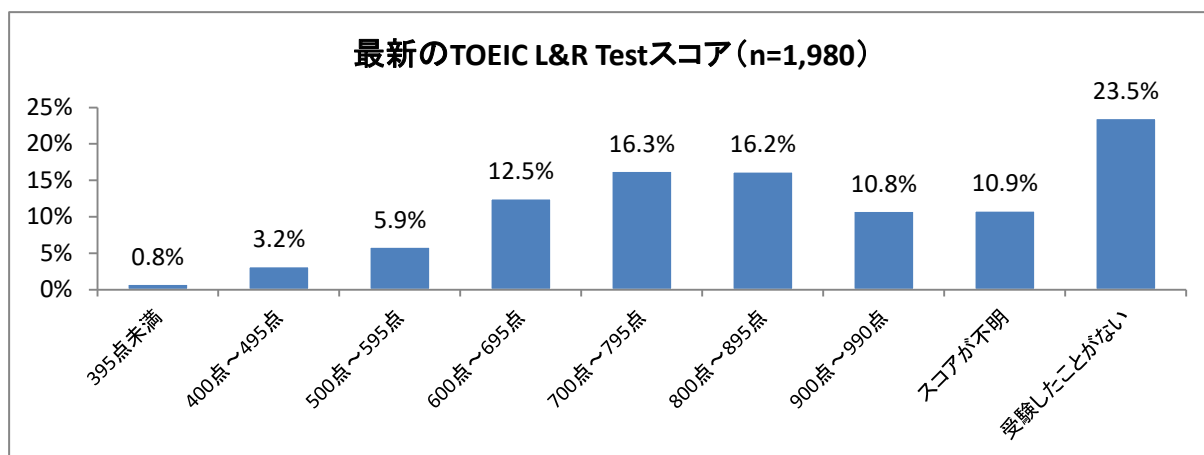
※「小学校英語指導者育成トレーナー」資格取得には、上記の条件に加えて J-SHINE 事務局が年 1 回実施するトレーナー検定試験に合格することが必要。

J-SHINE 事務局では、以下の図に記載した 7 つの英語資格・スコアを「CEFR B2 以上の英語力を証明するもの」と見なしている（参照：<http://www.j-shine.org/card.html>）。

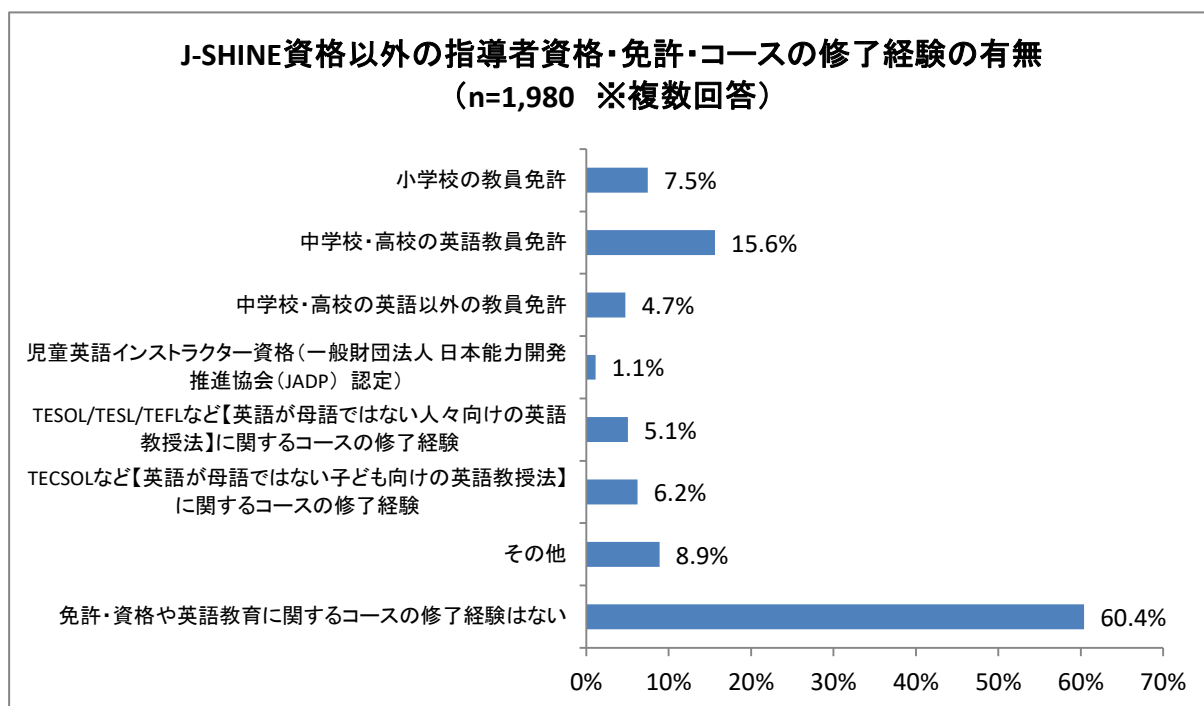
その基準に準じて問うた「CFER B2 以上の英語資格を保持しているか」という設問に対する回答は、「英検準 1 級以上」が最多で 26.8%。「保持していない・わからない」への回答を除くと、30.7%が CEFR B2 以上の英語資格を保持している。



最新の TOEIC® L&R Test スコアは、「受験したことがない」(23.5%)を除くと、「700点～795点」が最多で16.3%。「800点～895点」が僅差で2番目に多く16.2%、3番目に「600点～695点」が12.5%で続く。受験したことがある人の中では、600点以上が85.1%を占める。



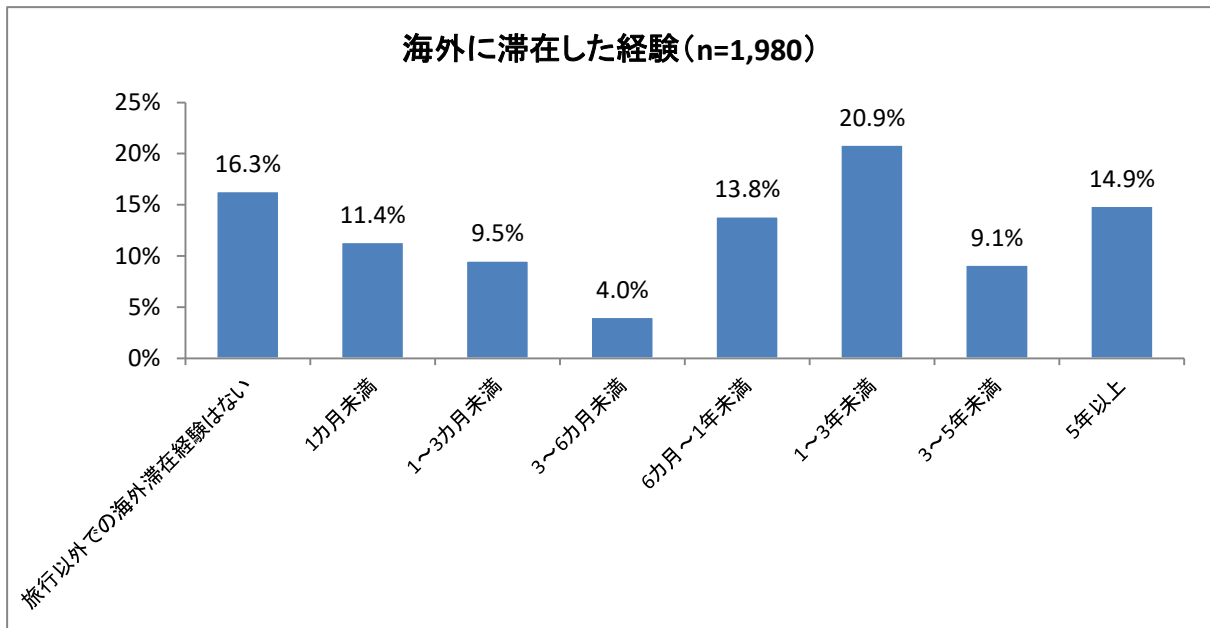
「J-SHINE 資格以外の指導者資格・免許・コースの修了経験の有無」は、「免許・資格や英語教育に関するコースの修了経験はない」が最多で60.4%。そのほかの39.6%は何らかのJ-SHINE 資格以外の指導者資格・免許・コースの修了経験がある。保持している中では「中学校・高校の英語教員免許」が最多で15.6%。2番目に「小学校の教員免許」が7.5%で続く。



<「その他」の記述(2件以上の回答があったものを表示。類似の回答はまとめて( )内に件数を示した)>

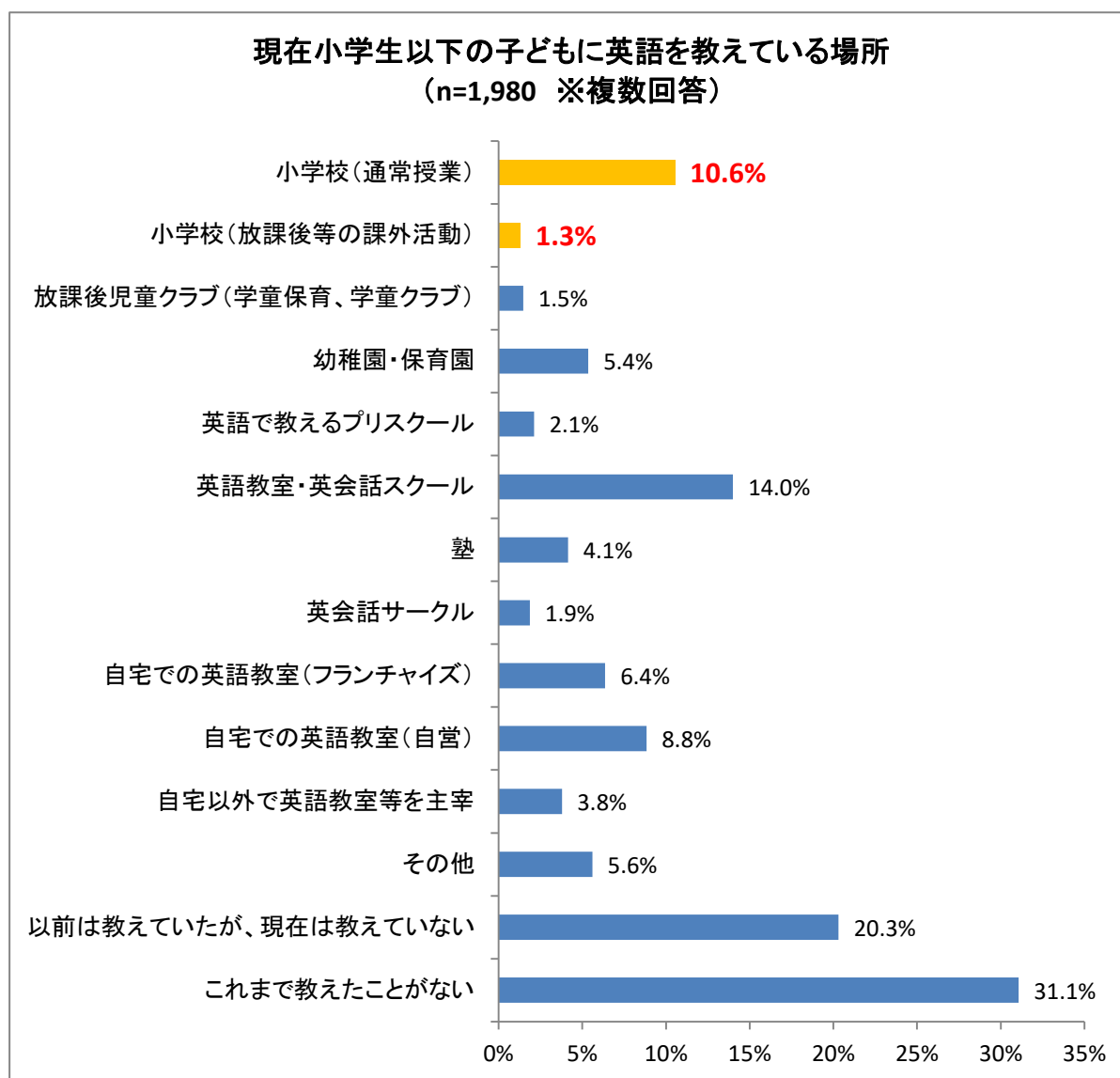
保育士(22) / 幼稚園教諭(21) / アルク児童英語教師養成コース修了(12) / mpi 英語指導者資格(9) / 日本語教師(9) / 全国通訳案内士(6) / 海外の幼児教育資格(6) / 英検2級(5) / Teyl(5) / IIEEC トレーニング修了(4) / 大学で児童英語教育コースを履修(3) / 中学校英語教員免許取得見込み(3) / 保育英検(3) / TECSOL(2) / 英語学習アドバイザー(2) / フォニックス教育資格(2) / アルク Kiddy CAT 児童英語教師(2) / 子ども英語インストラクター(JETTA)(2) / ボランティア通訳(2) / OPI(2) / 教員免許取得見込(2) / ECC ジュニア教室講師(2) / 英検面接員資格(2)

海外に滞在した経験は、「1～3年未満」が最多で20.9%。1年以上の滞在経験があると回答した人は合計で44.9%。ある程度の期間海外で生活し、異文化体験をしたことがある人が一定数いることが判明した。



## 2.2 J-SHINE 資格取得者の何割が小学校で指導しているか

現在、小学生以下の子どもに英語を教えている場所を複数回答で問うたところ、「小学校（通常授業）」で教えている人は 10.6%、「小学校（放課後等の課外活動）」で教えている人は 1.3%であった。重複を除くと、回答者の 11.4%が現在小学校で英語を指導している。「小学校英語指導者資格」ではあるが、実際に現在小学校で指導している人は回答者全体の 1 割程度であった。一方、小学校以外の場所で教えている人と、以前は教えていたが現在は教えていない人も含めると、J-SHINE 資格取得者の 68.9%がこれまでに小学生以下の子どもに英語を教えた経験がある。



<「その他」の記述（中高生～大人対象を除く。類似の回答はまとめて（ ）内に件数を示した）>

生徒の自宅 (14) / 地域の講座、イベント (12) / 小学校 (7) / 英語圏の国の小学校・幼稚園・保育園 (5) / 英検面接委員 (5) / オンライン (5) / ボランティア (4) / 学童 (4) / 英会話スクール (3) / インターナショナルスクール (3) / プライベート英会話レッスン (2) / 英語でベビーシッター (2) / NPO 活動 (2) / 公文式 (2) / 英語絵本の読み聞かせ (2) / 児童館 (2) / 自宅 (2) / 小中連携授業 / 小学校特別支援員としてアメリカからの転校生の授業のサポート / 小学生向けの講座 / 親子教室 / 育児サークル / 教会 / 市からの依頼によって会場に出向く / 算国英 (フランチャイズ) / 保育園 / 夏休みのサマースクール / レンタル学習室 / チャイルドケア / トワイライトルームの講座 / 友人の子供に / 自分の子どもに

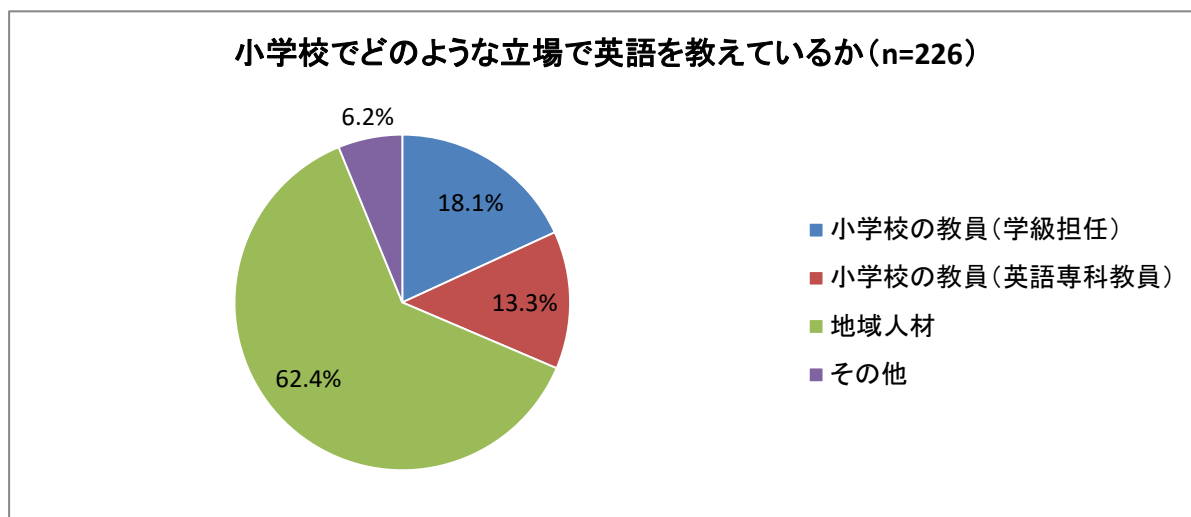
現在小学校で英語を教えている人に、「小学校でどのような立場で英語を教えているか（※）」を問うたところ、「地域人材」が62.4%で最多。J-SHINE 資格取得者のうち、地域人材として教えている人は回答者全体の7.1%であることが判明した。なお、現在小学校教員として教えている人など地域人材以外の人と、以前は小学校で教えていたが現在は教えていない人を含めると、回答者全体の15.9%がこれまでに小学校で英語を教えた経験がある。

※該当の設問で「その他」を選択した人については、J-SHINE 事務局でその記載内容を精査したところ、そのほとんどが「地域人材」に当たるものであったため、それらは「地域人材」としてカウントした。「地域人材」か否かの判断基準は以下の通り。

(1) 「地域人材」は、小学校の外国語教育に携わる外部専門家、外部ボランティア、外部関係者（ALTは除く）を指すと考え、教員、市などの職員、ALTは除外した。

(2) 以下の文部科学省の Web サイトの情報を元に、非常勤講師や講師については「地域人材」に含めた。

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/hpba200501/001/002/0402.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpba200501/001/002/0402.htm)



< 「その他」の記述（類似の回答はまとめて（ ）内に件数を示した） >

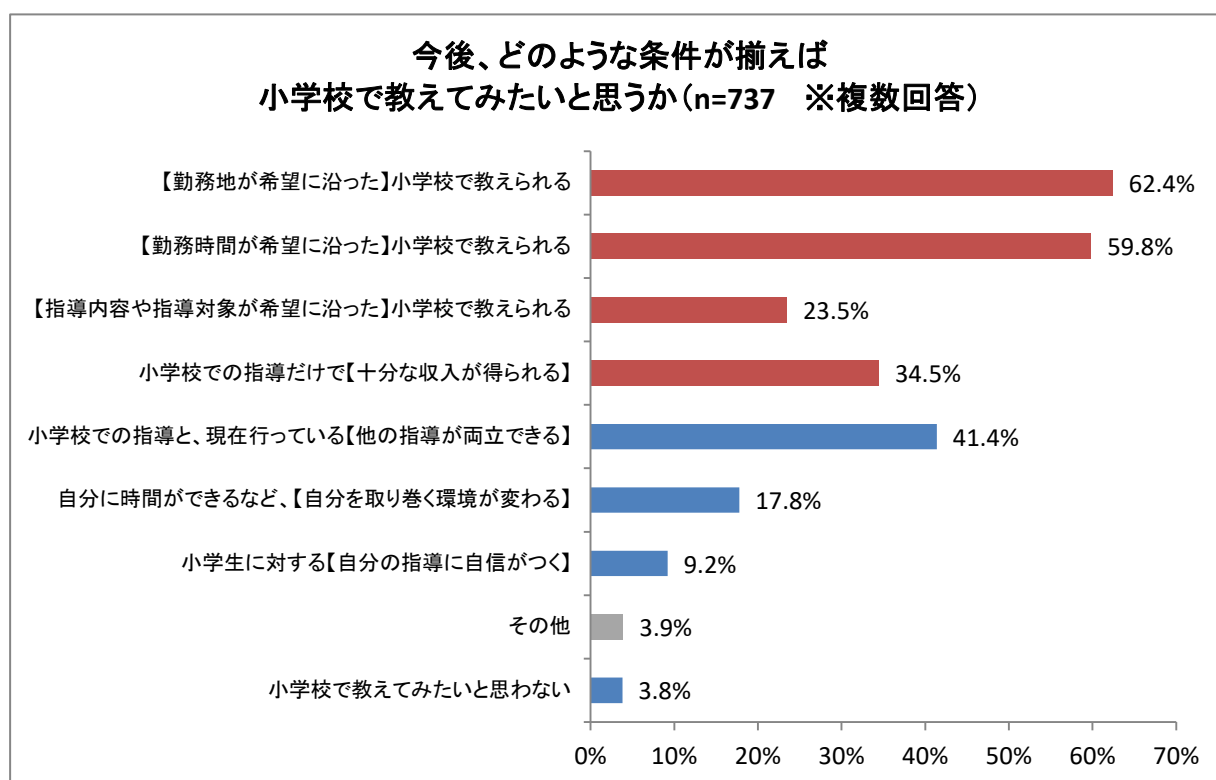
ALT (4) / 教頭 / 小中兼務教員 / 教科担任 / 担任ではない / 音楽専科(外国語推進委員) / 町立教育センター所属英語科教育支援スタッフ / 市教育委員会の採用 / 市役所職員 / 嘱託社員 / 英語教育アドバイザー

## 2.3 指導者に転じる可能性がある人材はどのくらいいるのか

前節で、J-SHINE 資格を保持しており、現在小学校で地域人材として教えている人は回答者全体の 7.1%であることが判明した。ここからは、「現在小学校で教えていない人たちが、なぜ教えていないのか」を「現在小学校以外の場所で子どもに英語を教えている（が小学校では教えていない）人（737人）」「以前は子どもに英語を教えていたが、現在は教えていない人（402人）」「これまで子どもに英語を教えたことがない人（615人）」の3グループに分けて回答を見ていく。その結果から、2020年度の小学校5、6年生での「外国語教科化」および3、4年生での「外国語活動必修化」に伴い地域人材の需要が増加した場合に指導可能な人材はどのくらいいるそうなのか、そして、どのような状況が揃えばそうした人材が実際に指導者として活躍できそうなのかを探る。

### ■小学校以外の場所で子どもに英語を教えている人

まず、「現在小学校以外の場所で子どもに英語を教えている人」に「今後、どのような条件が揃えば小学校で教えてみたいと思うか」を問うた設問の回答を以下のグラフに示す。回答を分類し、「雇用条件（収入を含む）が希望に合えば教えてみたい」に該当するものを**赤の棒グラフ**、「自身の状況により教えられない、または教えたくない」に該当するものを**青の棒グラフ**に示す（「その他」は両方が混在しているため、灰色の棒グラフで示す）。

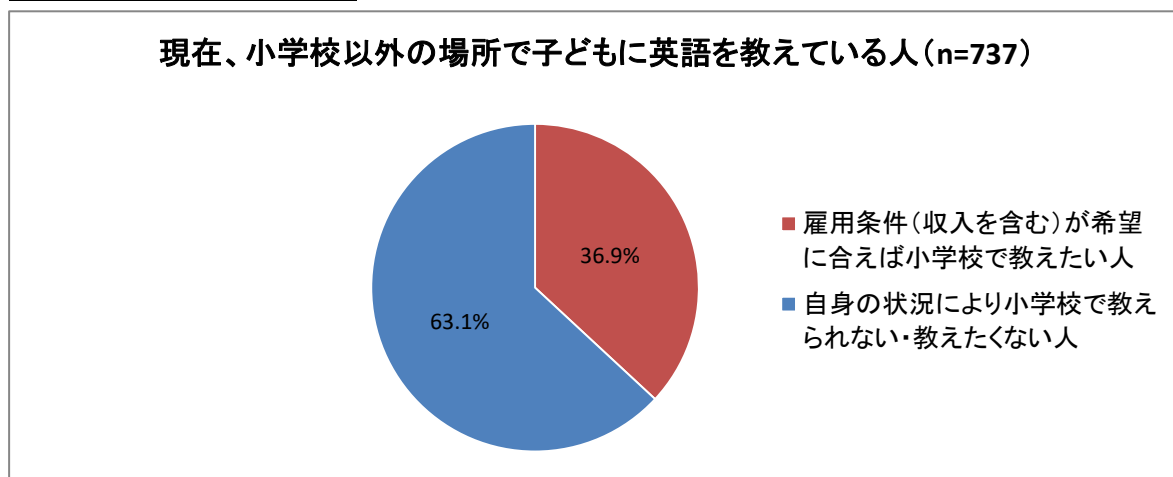


< 「その他」の記述（類似の回答はまとめて（ ）内に件数を示した） >

オファーがある (6) / 教員免許がなくても教えられる (3) / 副業が認められる (2) / 現在の仕事と両立できる (2) / 日本に帰国する (2) / 子供を保育園に預けられる (2) / 十分な給与が得られる (2) / マニュアルや教本がある / 退職後に / 短時間の求人がある / 教えがい、やりがいのあるカリキュラム、指導体制である / 小学校にいった場合、教諭として教えることになる / 担任が英語を教える時代なので、この資格が全く役に立たない / 近くの勤務先がある / 教材の準備で学校と連携が取れるようになる / 生徒の人数、態度によっては補助教員が必ずつく

現在、小学校以外の場所で英語を教えている人は、「勤務地」(62.4%)、「勤務時間」(59.8%)、が希望に合えば小学校で教えたいと考えている。また、「現在行っている他の指導と両立できる」(41.4%)、「小学校での指導だけで十分な収入が得られる」(34.5%)と回答した人も多い。

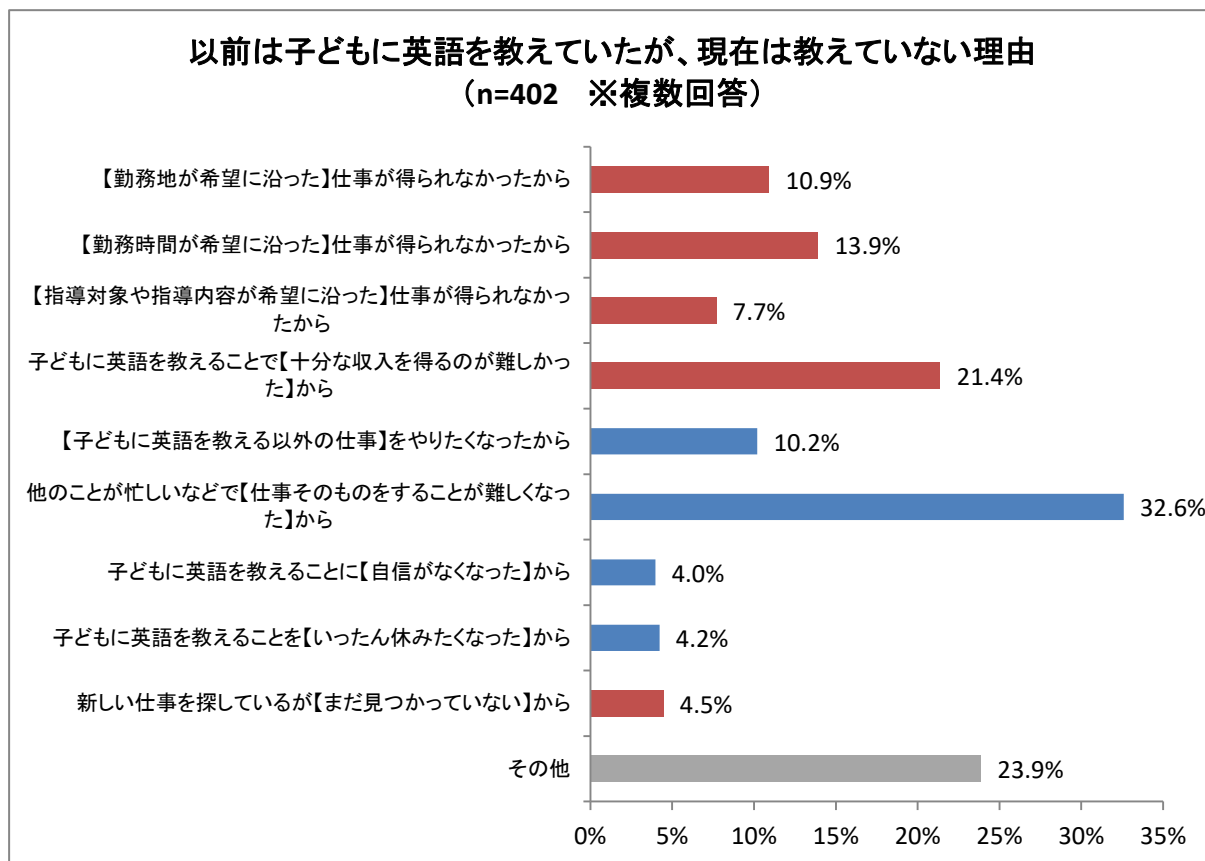
現在、小学校以外の場所で英語を教えている人について、その理由により「雇用条件(収入を含む)が希望に合えば小学校で教えたい人(=指導者に転じる可能性がある人材)」と「自身の状況により小学校で教えられない・教えたくない人」に分類(複数回答のため、同時に選択している人は「自身の状況により小学校で教えられない・教えたくない人」に分類)した結果を以下のグラフに示す。現在小学校以外の場所で子どもに英語を教えている J-SHINE 資格取得者のうち、36.9%(回答者全体の13.7%)は「勤務地・勤務時間・指導内容等の条件が希望に合う」、または「十分な収入が得られる」のであれば小学校で教えてみたいと考えている。この人たちは、求人内容が希望に合えば、将来的に小学校での指導者に転じる可能性があり、また、現在すでに子どもに英語を指導していることから、即戦力となり得ると思われる。





## ■子どもに英語を教えた経験があるが、現在は教えていない人

次に、「以前は子どもに英語を教えていたが、現在は教えていない人」にその理由を問うた設問の回答を以下のグラフに示す。「雇用条件（収入を含む）が希望に合わず教えていない」に該当するものを赤の棒グラフ、「自身の状況により教えられない、または教えたくない」に該当するものを青の棒グラフに示す（「その他」は両方が混在しているため、灰色の棒グラフで示す）。



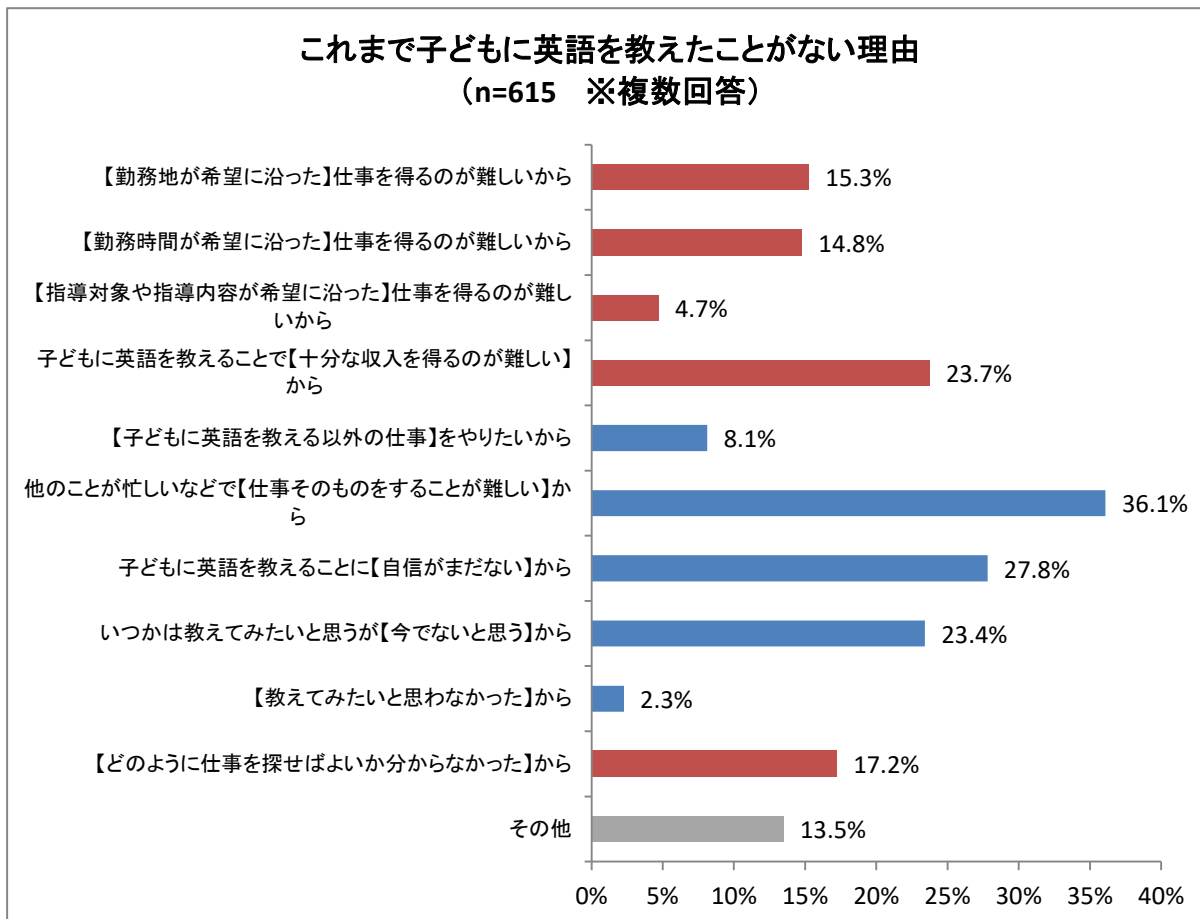
< 「その他」の記述（2件以上の回答があったものを表示。類似の回答はまとめて（ ）内に件数を示した）>

他の仕事をしているため（22）／妊娠中・育児中のため（15）／現在は中学生・高校生・大人に教えているため（15）／海外在住のため（10）／転勤・転居のため（7）／機会がなくなったため（7）／職場の異動のため（5）／学校で必要とされなくなった（担任・ALTが教えることになった）ため（3）／親の介護のため（2）／まだ学生のため（2）／もともと小学校教員であるため（2）／自分自身の能力を高めたいから（2）／子供が小学校を卒業したため（2）／子育てしながらできるパート勤務の採用がないから（2）

以前は子どもに英語を教えていたが現在は教えていない理由は、「他のことが忙しいなどで仕事そのものをするのが難しくなったから」が32.6%で最多。「子どもに英語を教えることで十分な収入を得るのが難しかったから」が2番目に多く21.4%。23.9%を占める「その他」の記載内容には、転居や育児など、ライフスタイルやライフステージの変化のために退職したというものも見られた。本調査でこの人たちに「小学校で教えてみたいかどうか」は問うていないが、時間や費用をかけてJ-SHINE資格を取得したという事実を考慮すると、条件が合えば小学校での指導者に転じる人材が一定数いる可能性は高い。

## ■子どもに英語を教えた経験がない人

最後に、「これまで子どもに英語を教えたことがない人」にその理由を問うた設問の回答を以下のグラフに示す。「雇用条件（収入を含む）が希望に合わず教えていない」に該当するものを赤の棒グラフ、「自身の状況により教えられない、または教えたくない」に該当するものを青の棒グラフに示す（「その他」は両方が混在しているため、灰色の棒グラフで示す）。



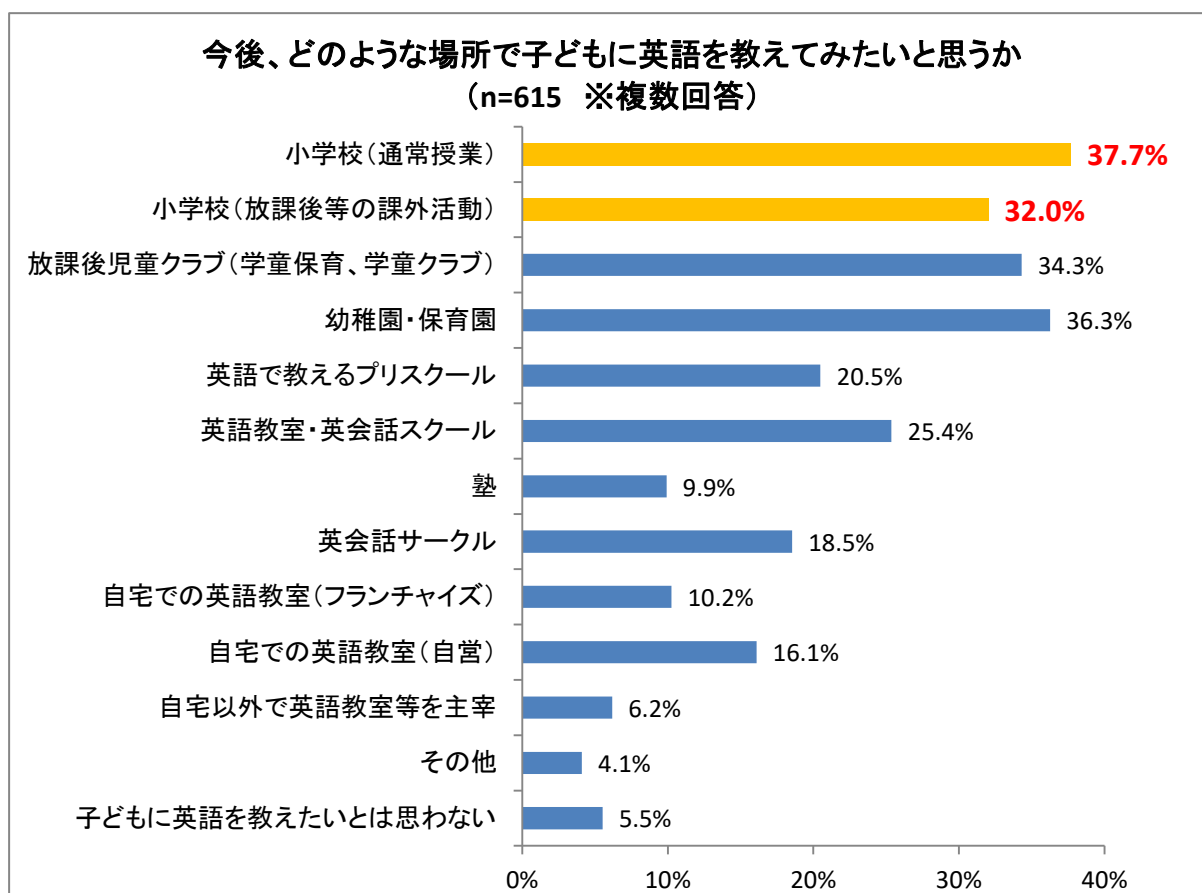
<「その他」の記述（2件以上の回答があったものを表示。類似の回答はまとめて（ ）内に件数を示した）。>

他の仕事をしているため（25）／海外在住のため（13）／中学・高校で英語を教えているため（11）／スキルが足りないから（5）／妊娠中・育児中のため（5）／まだ学生のため（5）／希望に合う求人がないため（4）

これまで子どもに英語を教えたことがない理由は、「他のことが忙しいなどで仕事そのものをするのが難しいから」が36.1%で最多。「子どもに英語を教えることに自信がまだないから」が2番目に多く27.8%。次いで「子どもに英語を教えることで十分な収入を得るのが難しいから」（23.7%）、「いつかは教えてみたいと思うが今でないと思うから」（23.4%）が多い。

これまで子どもに英語を教えたことがない人に「今後どのような場所で子どもに英語を教えてみたいか」を複数回答で問うた結果を次のページに示す。「小学校（通常授業）」と回答した人が37.7%、「小学校（放課後等の課外活動）」と回答した人が32.0%いた。これまで子どもに英語を教えたことがない人の中にも、条件が合えば教えたいと考える人がおり、教える場所として小学校を希望している

人が一定割合いることから、子どもに教えた経験のない人の中にも指導者に転じる可能性がある人材がいる。2020年度以降、地域人材への需要がどの程度増加するかは不透明であるが、J-SHINE資格取得者を効果的に活用できれば、地域人材のニーズをある程度カバーできる見通しは立てられそうだ。



<「その他」の記述(類似の回答はまとめて( )内に件数を示した)>

中学校(2) / 自分子どもに(2) / 育児中で今は考えられない(2) / 営業目的でないところで関わりたい / 小学生高学年ならよい / 仕事以外で個人的に / 自宅で読み聞かせ / 地域のフリースペース / イベントなどでボランティア / 自分の授業の中の会話で / 行政の助成するボランティア団体 / 小学校でのスクールサポート / 近所子どもたちにボランティアで / 海外で / 今の会社の定年後、情報を得て探したい / 教えたいと思うが実力が伴わない / 自信がないので、英検準1級を取得できたら考えたい / どういった場で教えるのが自分に適しているかわからない / 現在ある資格だけで教えるのは不十分

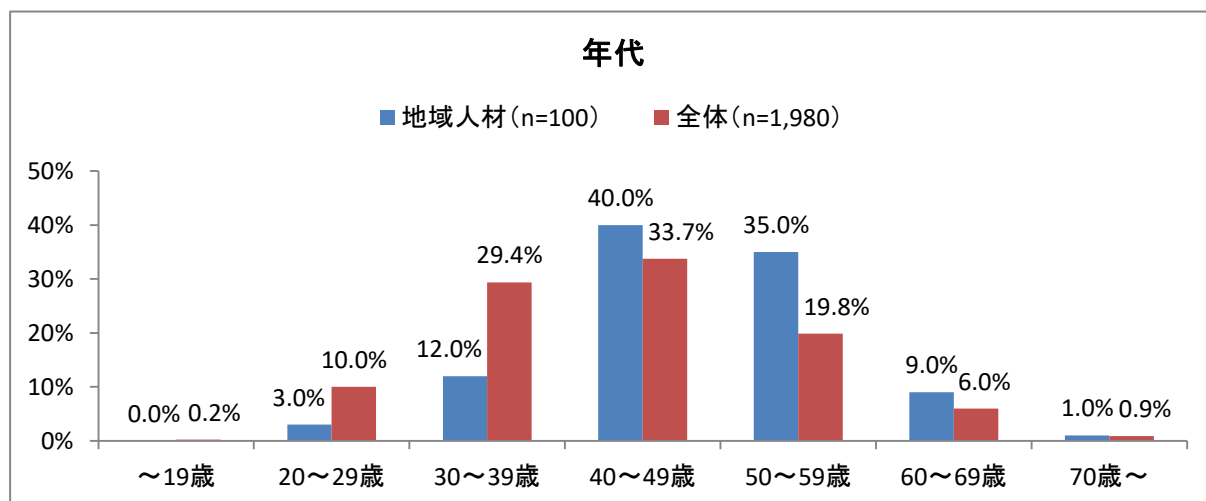
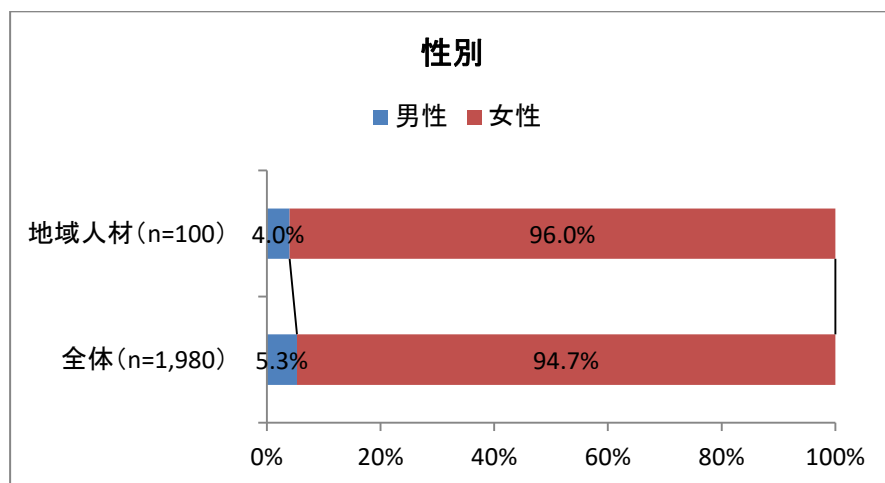
なお、ここまで「雇用条件(収入を含む)が希望に合わず教えていない」人に注目して見てきたが、子どもに英語を教えた経験者・未経験者ともに多かった「仕事そのものをするのが難しい」人は、ライフスタイル、ライフステージの変化により、仕事ができるようになる可能性がある。また、未経験者に多かった「自信がまだない」、「今ではないと思う」人も、英語力・指導力向上の機会や意識が変わるきっかけがあれば、指導者に転じる可能性もある。J-SHINE事務局や登録団体が、資格者のスキルアップ向上の機会を提供することに加えて、いったん現場を離れた人が現場に戻れるきっかけを用意したり、その間に資格を更新し続けるモチベーションを提供したりすることも、指導可能な人材を確保するために重要である。

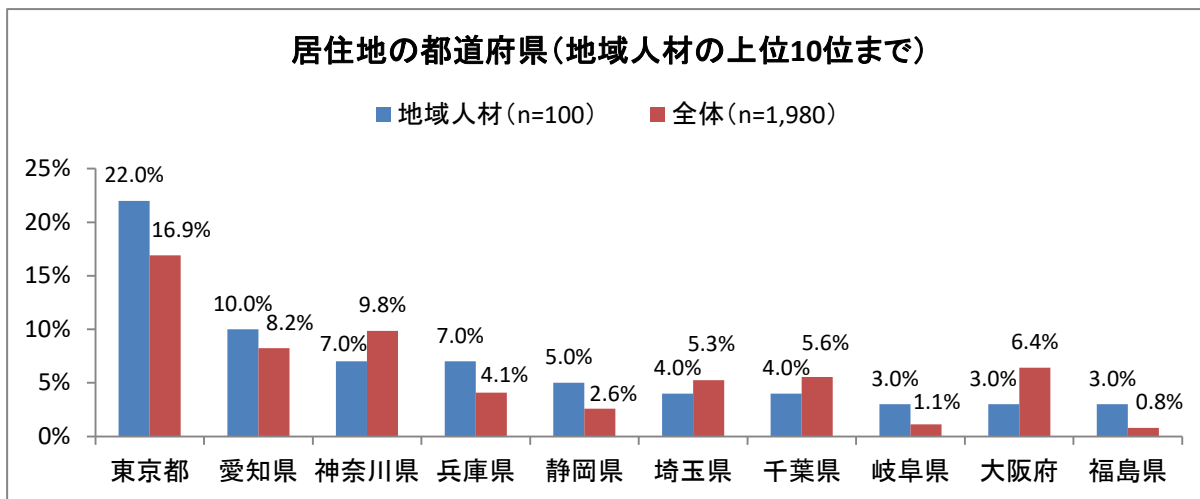
## 2.4 現在小学校で地域人材として教えている人の実態と課題

ここからは、実際に小学校で地域人材として教えている人（以下、地域人材）の活動実態について、属性、どのように職を得て、どのように活躍しているのか、教える上で課題があるとすればそれは何かという観点から見ていく。分析対象は、現在小学校で英語を教えている人を対象に問うた「小学校でどのような立場で英語を教えているか」という設問に「地域人材」と回答した100人。該当の設問で「その他」を選択し、J-SHINE事務局でその記載内容を精査した上で「地域人材」としてカウントした41人は、活動実態に関する設問に回答していないため分析対象から除外した。

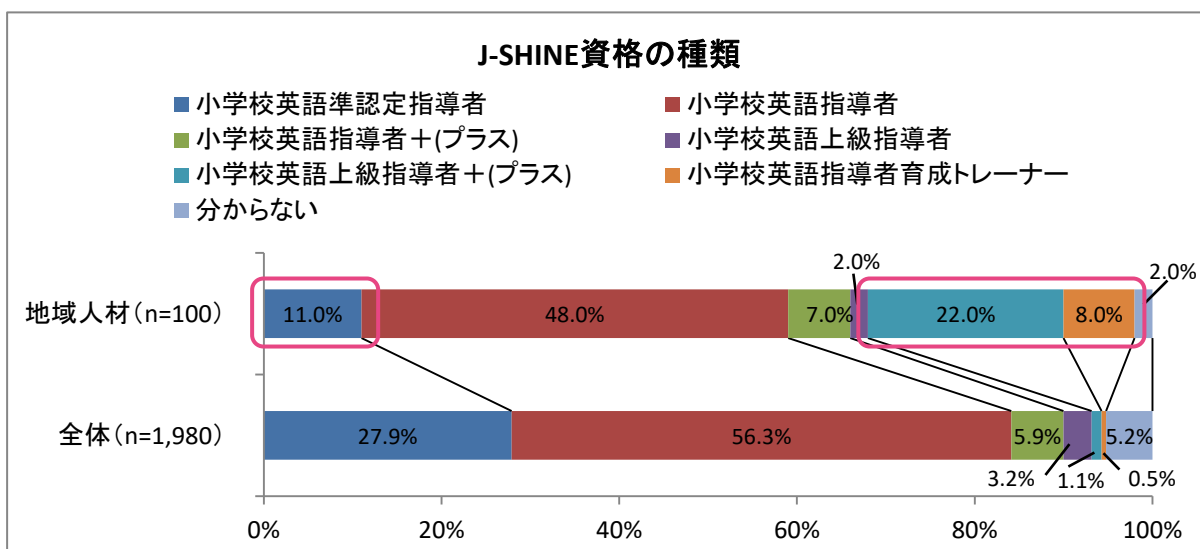
### ■回答者属性

回答者全体と比べると、性別に大きな差はなかった。年代は「30～39歳」の割合が17.4ポイント低く、「40～49歳」が6.3ポイント、「50～59歳」が15.2ポイント高かった。J-SHINE資格取得者の中でも小学校で教えている人は年代が高め、という傾向がある。居住地の都道府県は、1位の東京都は回答者全体と同じであったが、2位以降には差が見られた。

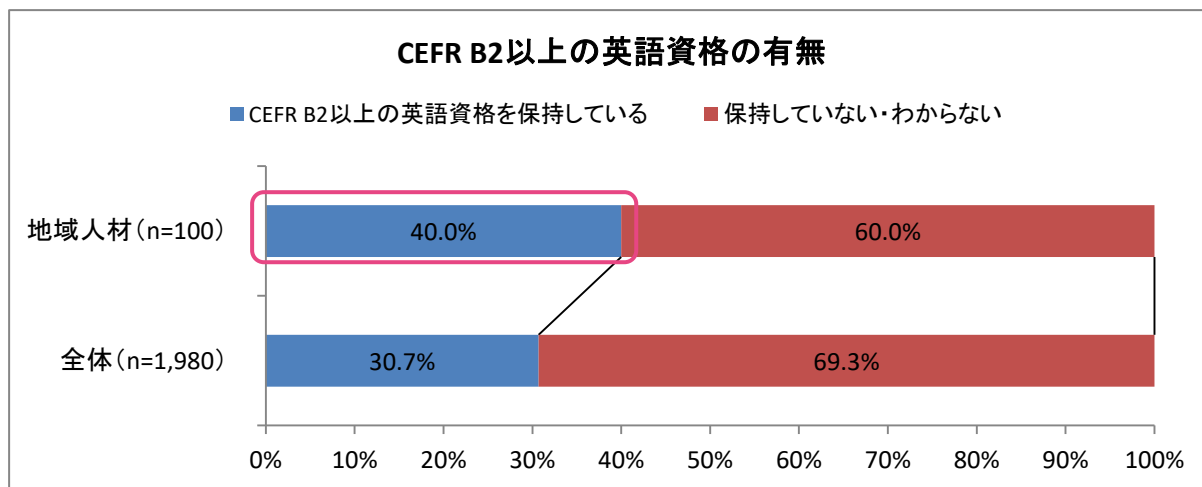




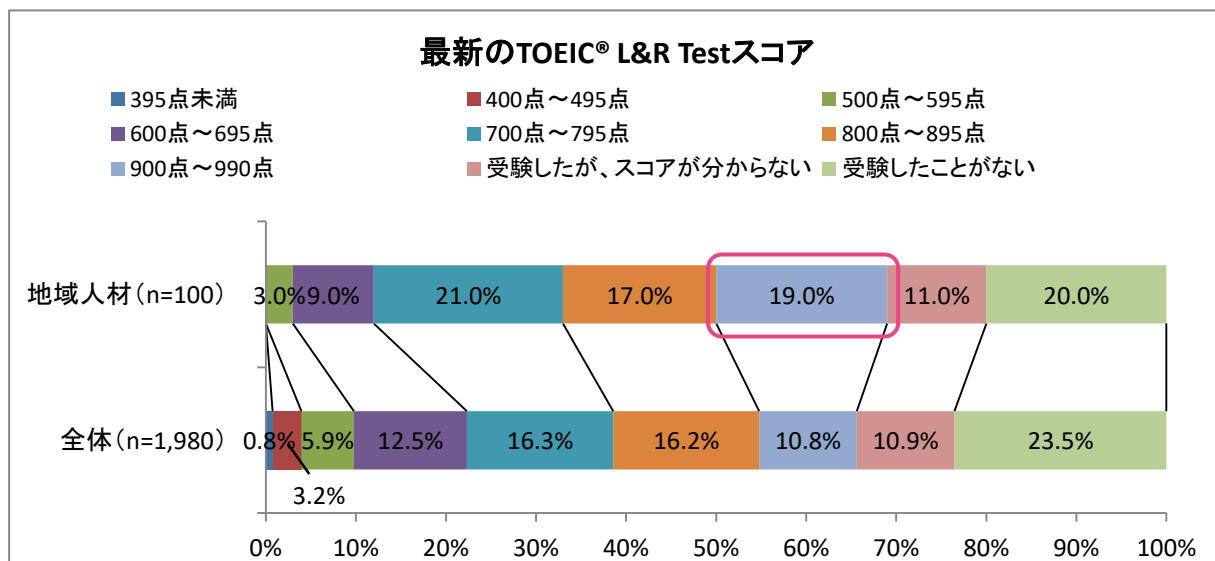
地域人材の J-SHINE 資格の保持種類は以下の通り。回答者全体と比べると、「小学校英語準認定指導者」の割合が 16.9 ポイント低く、「小学校英語上級指導者+」が 20.9 ポイント、「小学校英語指導者育成トレーナー」が 7.5 ポイント高い。上位資格を保持しているほど指導機会が得やすい、または指導機会が多いため指導時間等の要件を満たしやすく、上位資格を取得しやすいといった関係性があるのかもしれない。



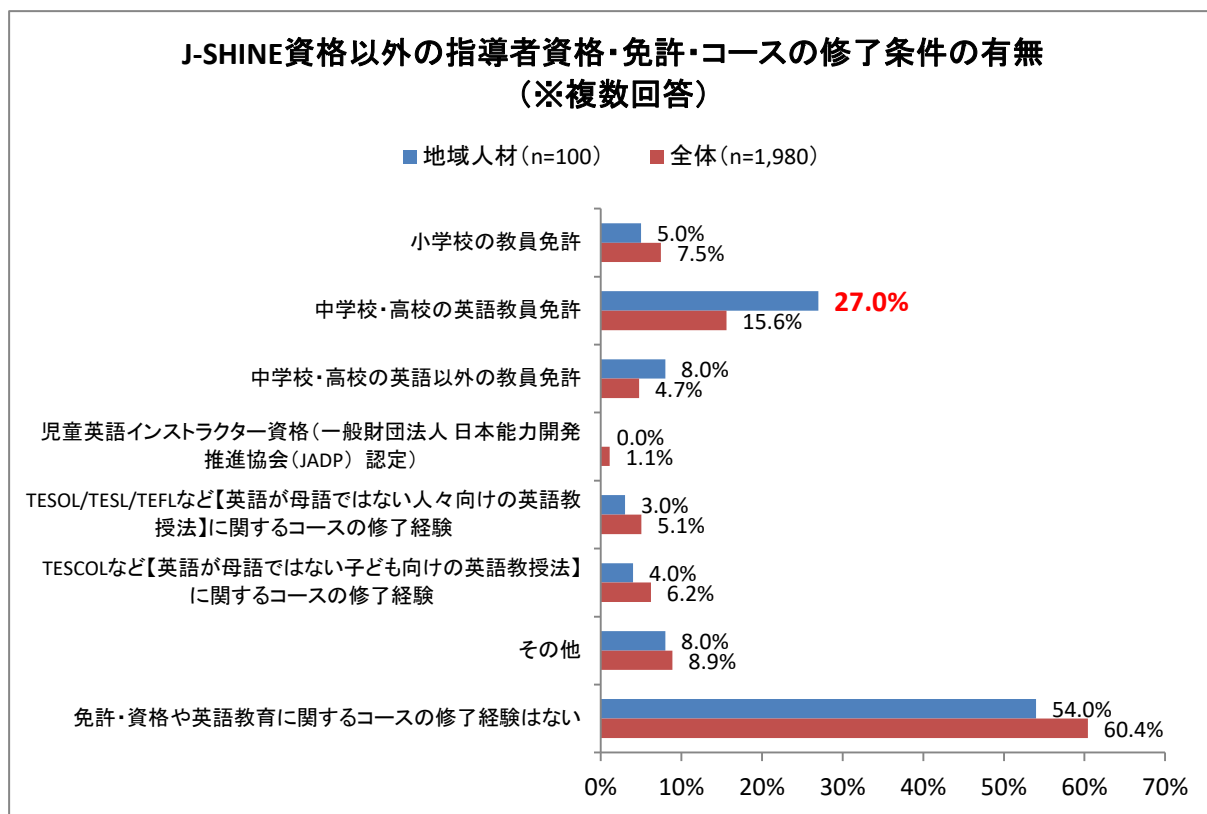
地域人材のうち、CEFR B2以上の英語資格を保持している人の割合は以下の通り。回答者全体と比べて9.3ポイント高い。



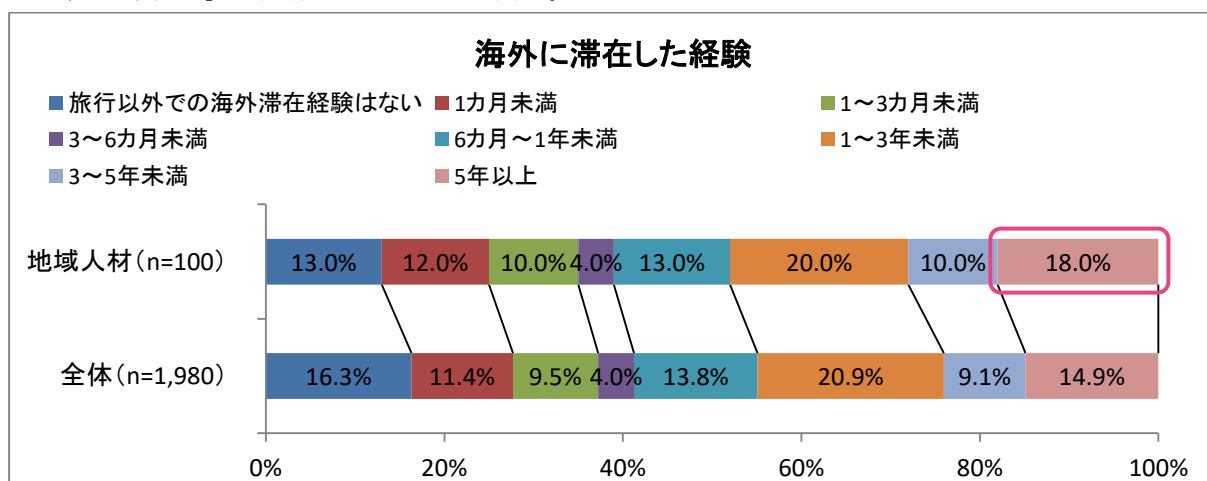
地域人材の最新の TOEIC® L&R Test スコアは以下の通り。回答者全体と比べると、700点以上のスコア保持者の割合が13.7ポイント高く、中でも「900点～990点」の割合が8.2ポイント高い。上記のCEFR B2以上の英語資格の有無に対する回答と合わせて、J-SHINE 資格者の中でも地域人材として小学校で教えている人の英語力は高いと言える。



地域人材の J-SHINE 資格以外の指導者資格・免許・コースの修了条件の有無は以下の通り。回答者全体と比べると、「中学校・高校の英語教員免許」を保持している人の割合が 11.4 ポイント高い。中学校・高校の英語教員免許を持っていることで、小学校での採用につながりやすくなる可能性がある。



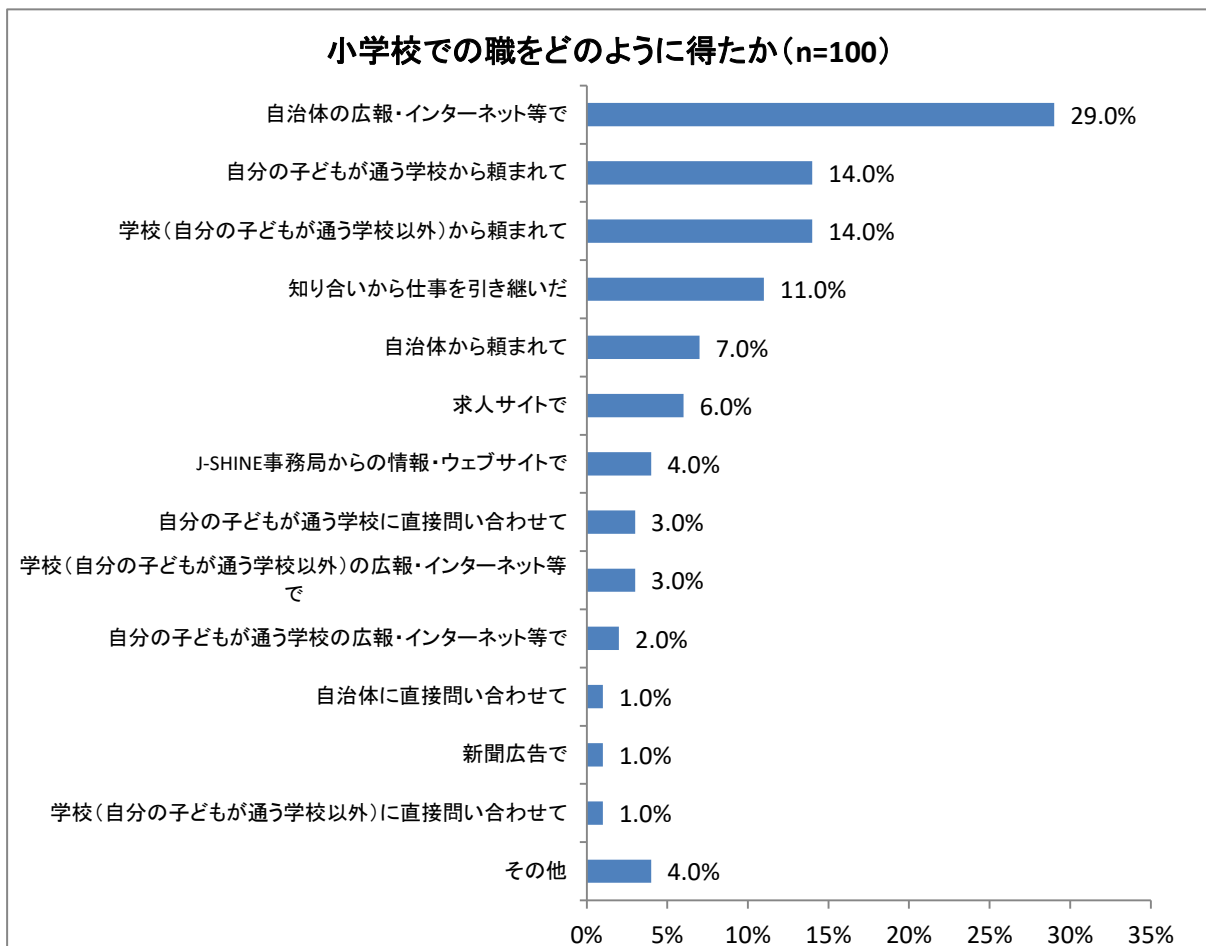
地域人材の海外に滞在した経験は以下の通り。回答者全体と比べるとそれほど顕著な差は見られないが、「5年以上」の割合が 3.1 ポイント高い。



地域人材は、J-SHINE 資格取得者全体に比べて、長期の海外滞在経験、高い英語力や指導者資格を持つ人の割合が高いが、その差は必ずしも大きくなく、持っていない人も指導している人もいて、持っていない人も指導していない人もいてとみられる。逆に考えれば、現在小学校で地域人材として教えていない人の中にも、高い英語力や資格、免許等を有する人が一定数いることになる。

## ■小学校での職をどのように得たか

最も多かった回答は、「自治体の広報・インターネット等で」の29.0%。「求人サイト」(6.0%)、「J-SHINE事務局からの情報・ウェブサイトで」(4.0%)、「学校(自分の子どもが通う学校以外)の広報・インターネット等で」(3.0%)、「自分の子どもが通う学校の広報・インターネット等で」(2.0%)、「新聞広告で」(1.0%)と合算すると、45.0%が公開されている求人情報を見ての応募ということになる。一方、公開情報とは別の、「自分の子どもが通う学校から頼まれて」(14.0%)、「学校(自分の子どもが通う学校以外)から頼まれて」(14.0%)も多い。「自治体から頼まれて」(7.0%)と合算すると、35.0%が自治体や学校から頼まれて職を得ている。また、「知り合いから仕事を引き継いだ」人も11.0%いた。「自分の子どもが通う学校に直接問い合わせ」は3.0%で、「自治体に直接問い合わせ」(1.0%)、「学校(自分の子どもが通う学校以外)に直接問い合わせ」(1.0%)と合算すると、自分から募集状況を問い合わせた人は5.0%であった。小学校で英語を教えるには、日頃からインターネット等で公開されている情報を確認しておくのはもちろん、募集が出た際には指導者になり得る人材として推薦、声掛けしてもらえるように、学校の先生や保護者、地域の人と人脈づくりをしておくことも重要と言えそうである。また、自治体や学校に問い合わせして仕事を得ている人がいることから、募集が出るのを待つだけではなく、自ら多方面に働きかけることも有益と言えそうである。



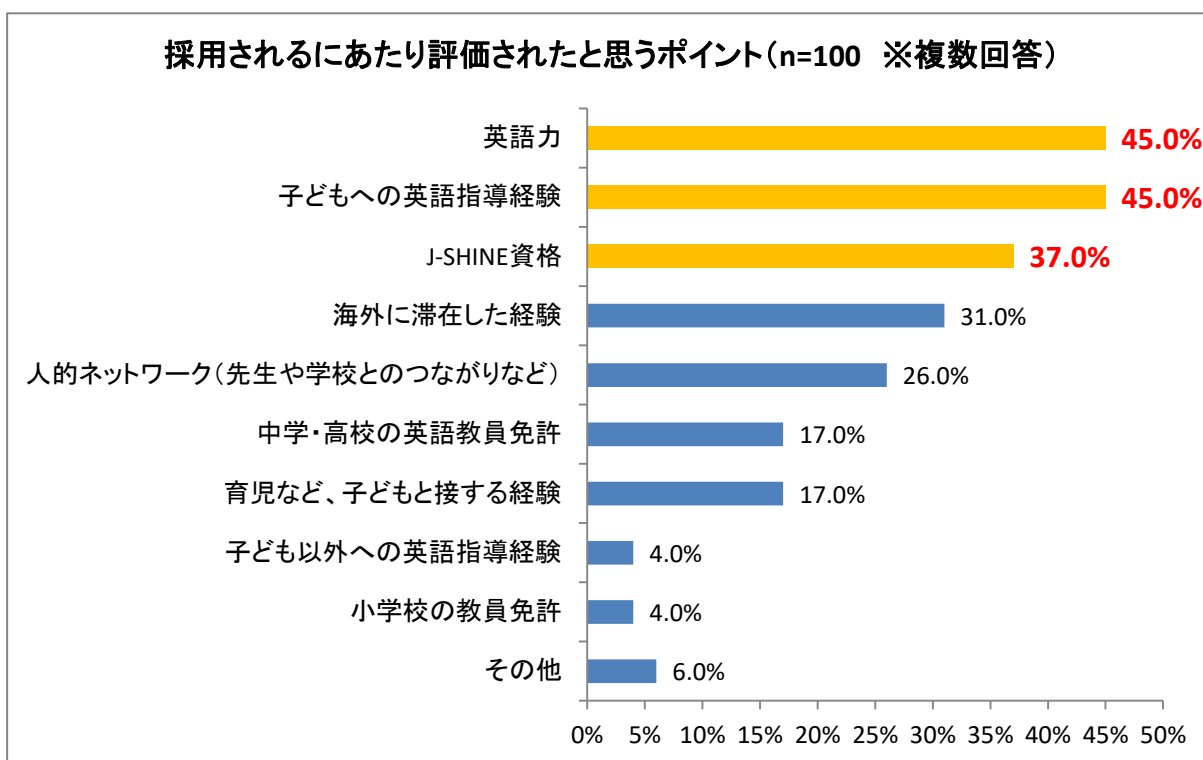
### <「その他」の記述>

NPOとしての活動から／職場の大学で非常勤勤務の際、留学生向けの求人として掲載依頼があり、日本人も応募可だったため、退職して志望した／知り合いから誘われた事から／友人がアフタースクールの職員で職を求めた



## ■採用されるにあたり評価されたと思うポイント

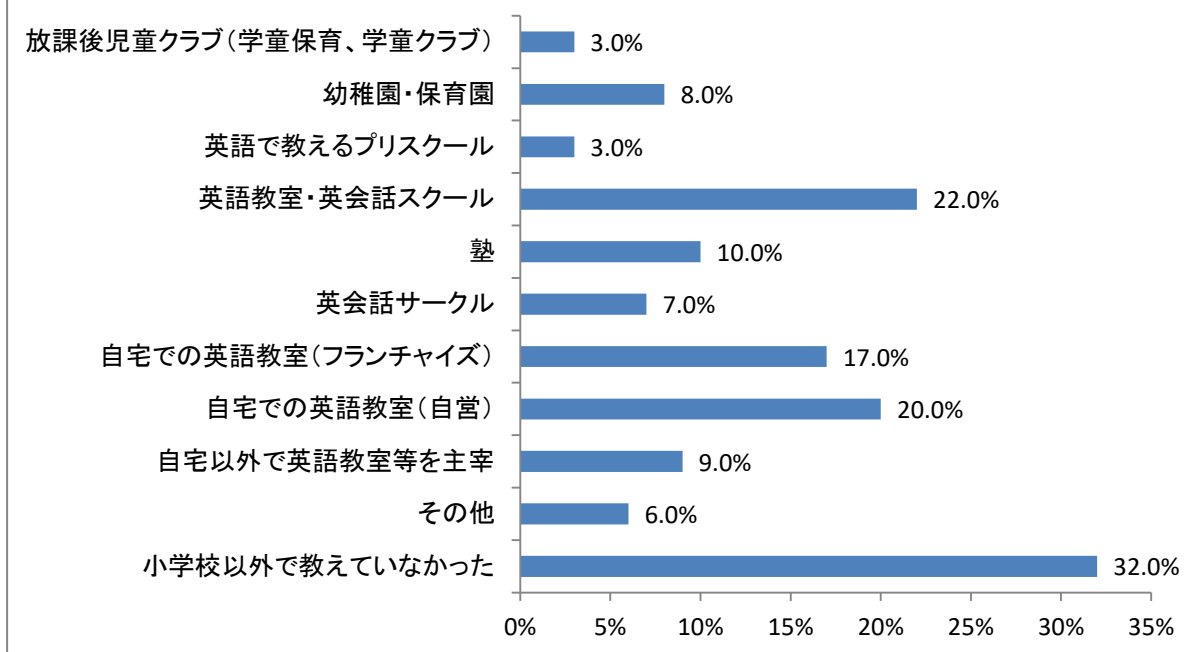
次に、「小学校で地域人材として採用されるにはどのような条件が必要になるか」を探るため、採用されるにあたり自身が評価されたと思うポイントを問うた。この設問に対する回答としては、「英語力」(45.0%)、「子どもへの英語指導経験」(45.0%)が最多であった。「J-SHINE 資格」と回答した人も37.0%いた。英語力や英語指導経験があり、さらに J-SHINE 資格を保持しているとプラスになる可能性がある。実際に、地域人材として小学校で指導している人の中で CEFR B2 以上の英語力を保持している人の割合は 40.0% (p.21) であり、次のページのグラフに示す「小学校で教え始める前に、子どもに英語を教えていた場所」を問う設問で「小学校で教えていなかった」を回答した人を除く 68.0%が、小学校で教え始める前に小学校以外の場所で英語を指導した経験があった。英語力、英語指導経験が地域人材として職を得る際に必須とは言えないまでも、これらが不足している場合、J-SHINE 資格を取得後も英語力の研鑽を続ける、まずはボランティアから指導実績を作るなどの努力が採用につながる可能性がある。



### <「その他」の記述>

NPO 所属／教諭からの推薦／前向きかどうか／大学講師の資格／地域の研修を受けて／面接での印象

小学校で教え始める前に、子どもに英語を教えていた場所  
(n=100 ※複数回答)

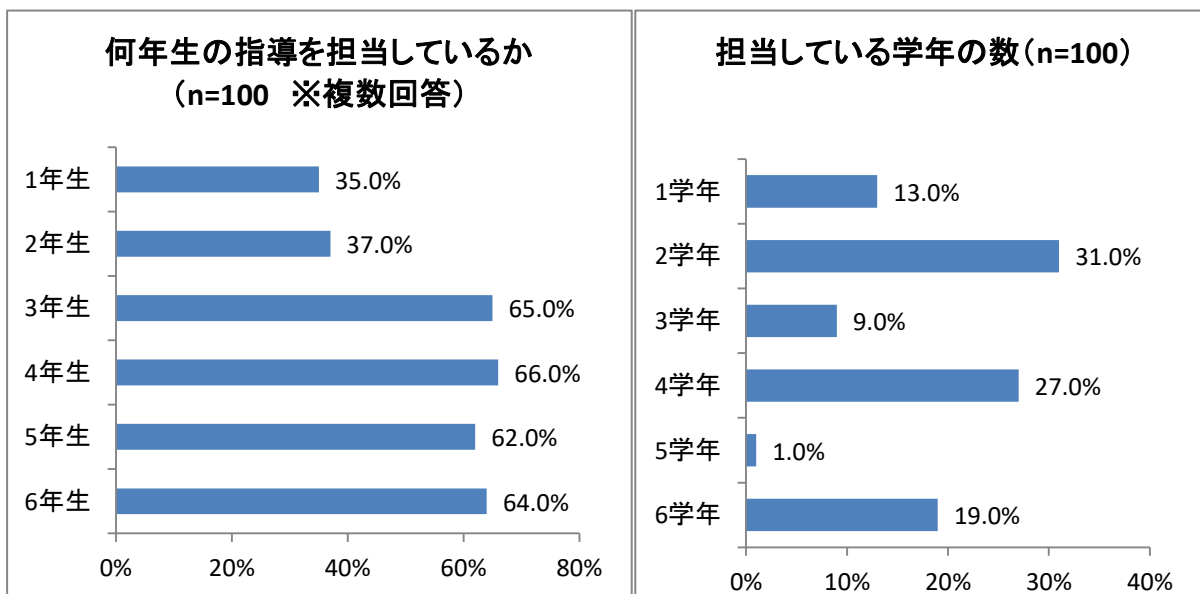


<「その他」の記述(類似の回答はまとめて( )内に件数を示した)>

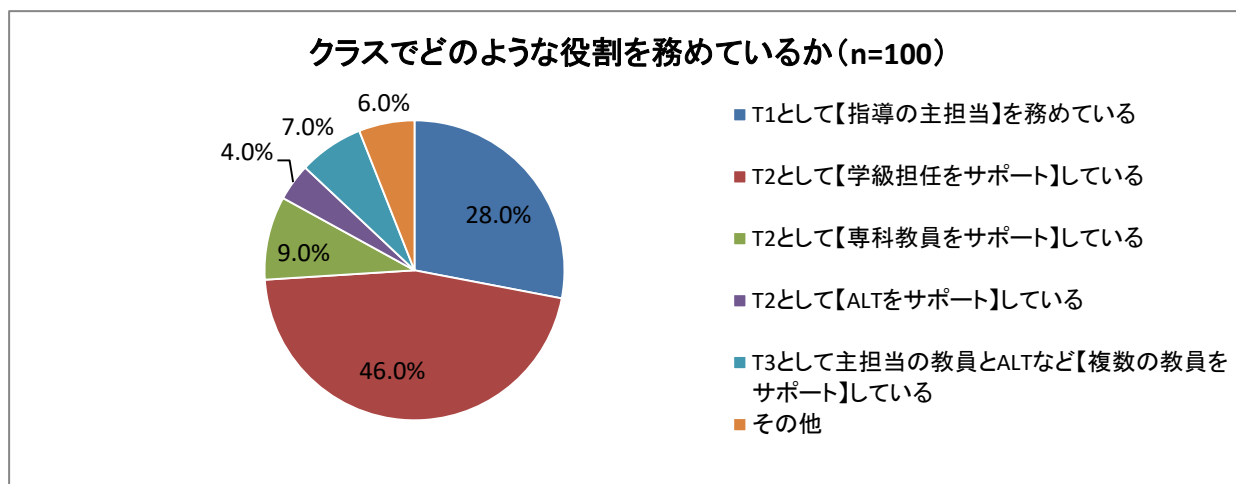
中学校 (3) /自治体の講座 (2) /司書として、英語絵本を読み聞かせすることがある

■小学校での活動内容

「何年生の指導を担当しているか」を問う設問では、左のグラフに示す通り、3～6年生がそれぞれ65%前後と多いが、1～2年生の英語活動を指導する場合もある(それぞれ35.0%、37.0%)。また、右のグラフに示す通り、「1学年」のみ指導している13.0%を除くと、87.0%が複数の学年の指導を担当している。1～6年生までの全学年を指導している人も19.0%いた。



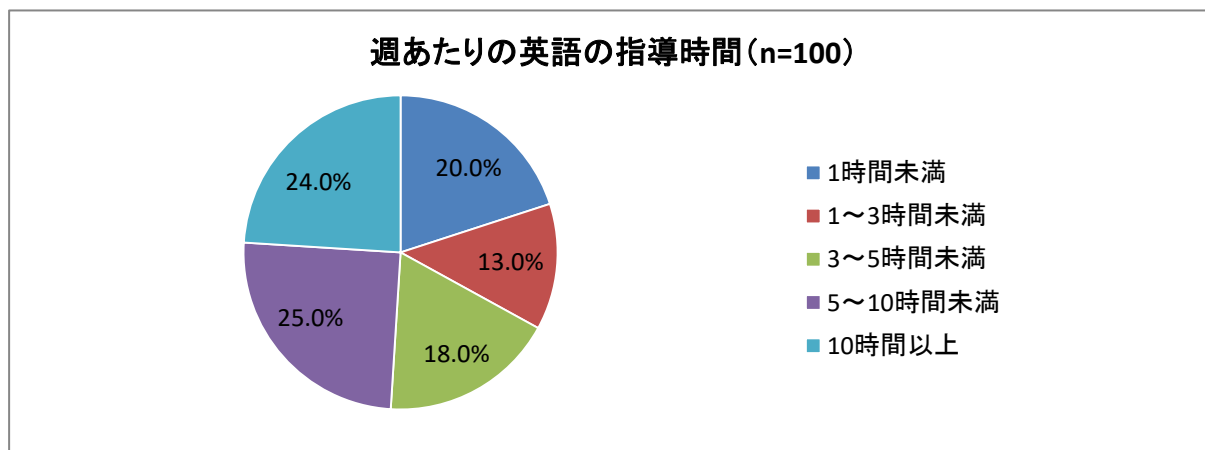
「クラスでの役割」を問う設問では、「T2として学級担任をサポートしている」が46.0%で最多。次いで「T1として指導の担当を務めている」が28.0%。地域人材はT2としての役割を求められる場合が多いが、T1としての役割を求められる場合もある。



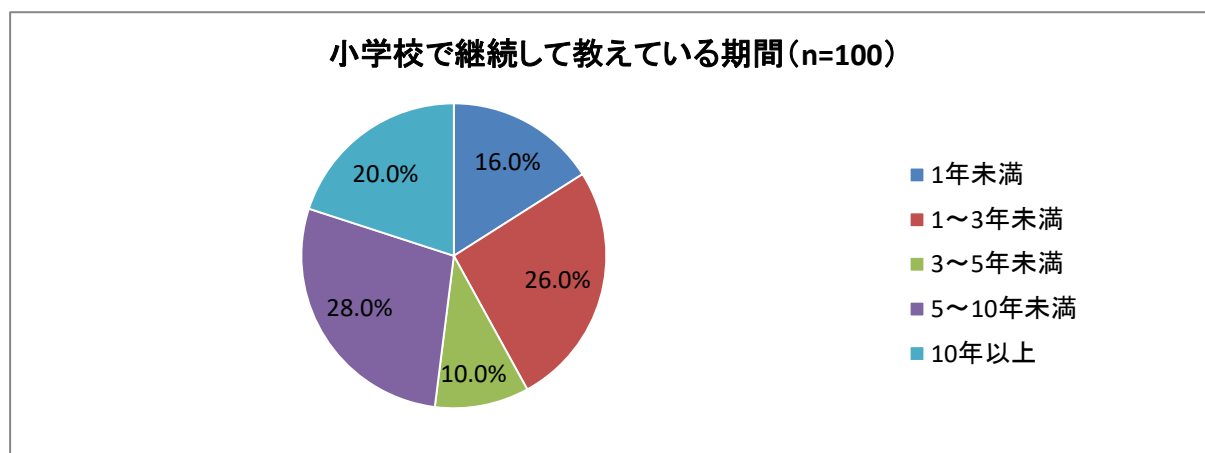
<「その他」の記述>

T1として1ヶ月に1回英語で遊んでいる／T2待遇だが、T1をさせられている／グループで、サポート役をしている／サタデイスクールでボランティア／学年による／授業以外でのサポート

「週あたりの英語の指導時間」は、「5～10時間未満」(25.0%)および「10時間以上」(24.0%)の、比較的指導時間が長い人が合計で49.0%と半数に近い。一方で「1時間未満」も20.0%いる。地域人材として一定の戦力となっている人も半数程度いるが、極めて短時間しか教えていない人もいる。

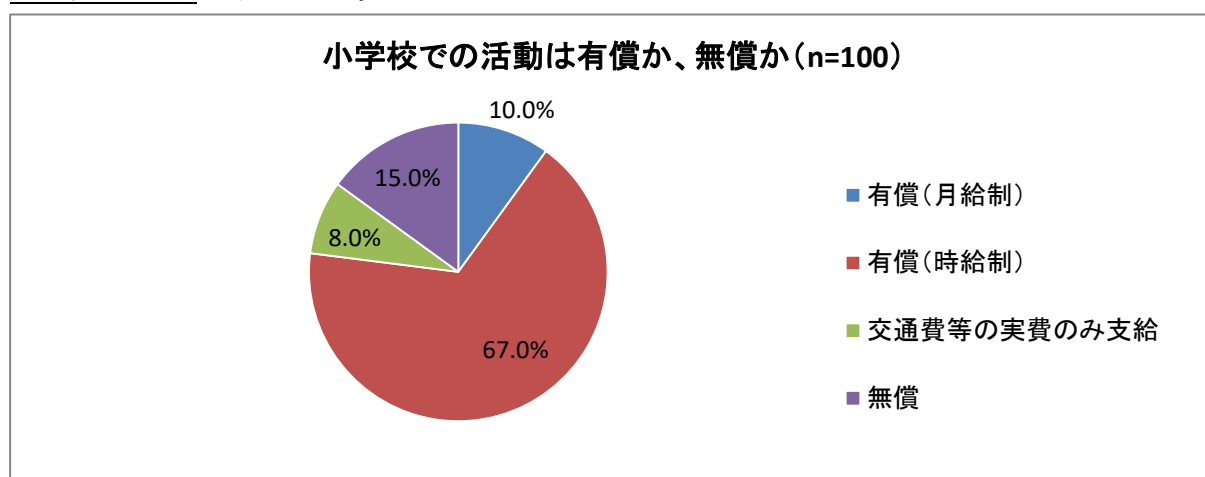


「小学校で継続して教えている期間」は、「5～10年未満」(28.0%) および「10年以上」(20.0%) の、高学年での外国語活動必修化の初期(2010～2011年頃)に指導を始めて今も継続していると思われる人と、「1年未満」(16.0%)、「1～3年未満」(26.0%) の、最近指導を始めた人が多い。近年、地域人材のニーズが再び高まっている可能性がある。「3～5年未満」(10.0%) が最も少ない理由としては、1つの自治体では最長3年までしか同一の非常勤の教師を雇用できない、という制限があるために離職しているケースが考えられる。また、「小学校での職をどのように得たか」の項目で、自分の子どもが通う小学校経由で職を得た人が19.0%いたことから、子どもの通う学校で指導を始め、卒業に伴い離職した人もいと推測できる。

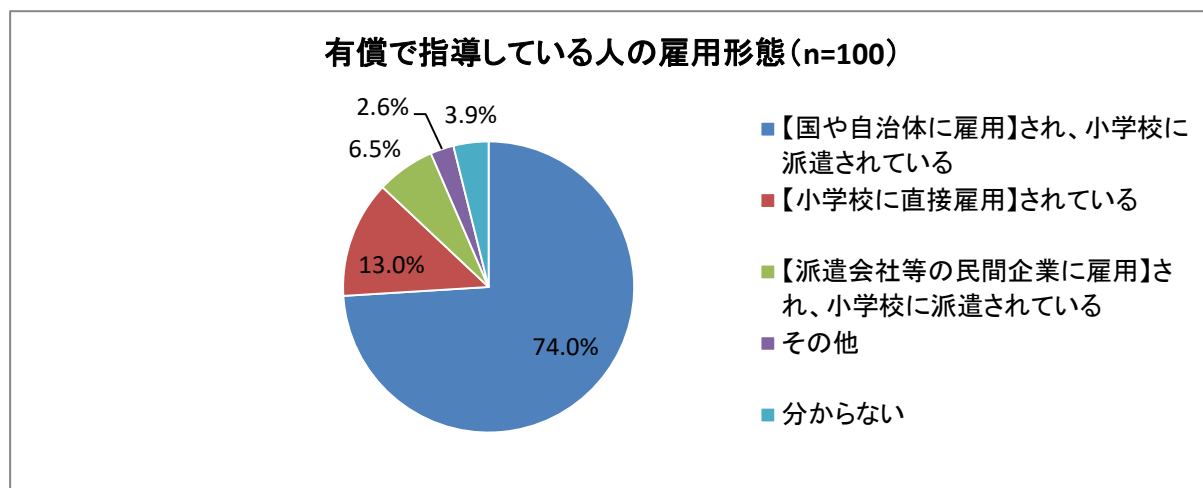


#### ■小学校での給与・雇用形態

小学校での活動は有償か、無償かを問う設問では、「有償(時給制)」が最多で67.0%。次いで「無償」が15.0%、「有償(月給制)」が10.0%、「交通費等の実費のみ支給」が8.0%。地域人材は時給制での雇用が主流と考えられる。



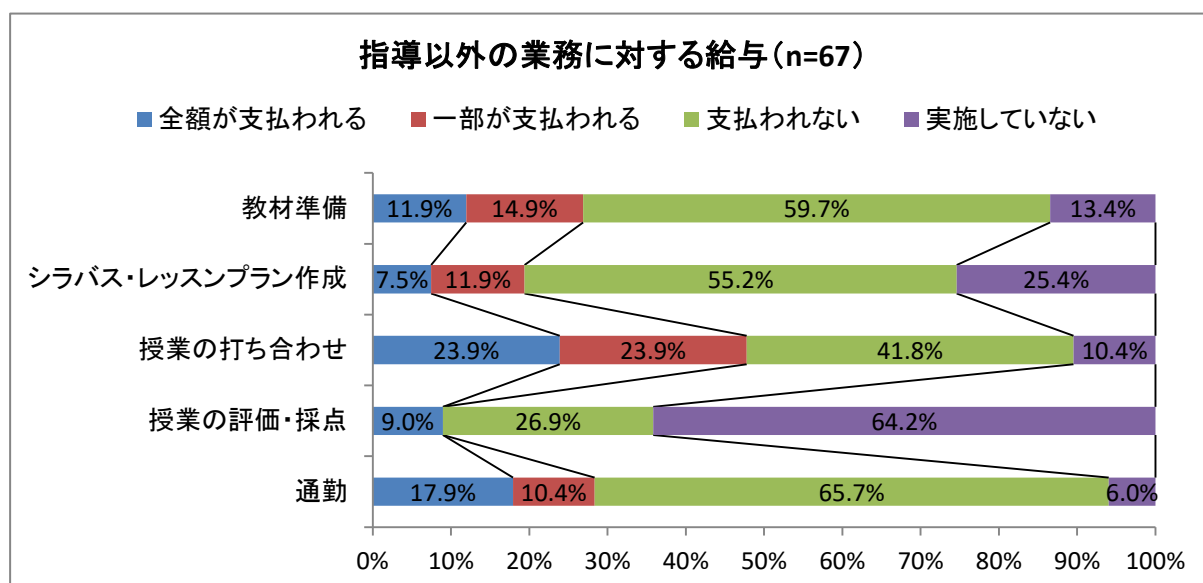
前の設問で、小学校で「有償（月給制）」（10.0%）もしくは「有償（時給制）」（67.0%）で指導していると回答した人に、小学校での雇用形態を問う設問では、「国や自治体に雇用され、小学校に派遣されている」が74.0%と多数を占め、「小学校に直接雇用されている」が13.0%、「派遣会社等の民間企業に雇用され、小学校に派遣されている」が6.5%と続く。小学校での職をどのように得たかという設問で「学校から頼まれて」職を得ていた人も、雇用形態は「国や自治体に雇用され、小学校に派遣されている」と回答している場合があった。



<「その他」の記述>

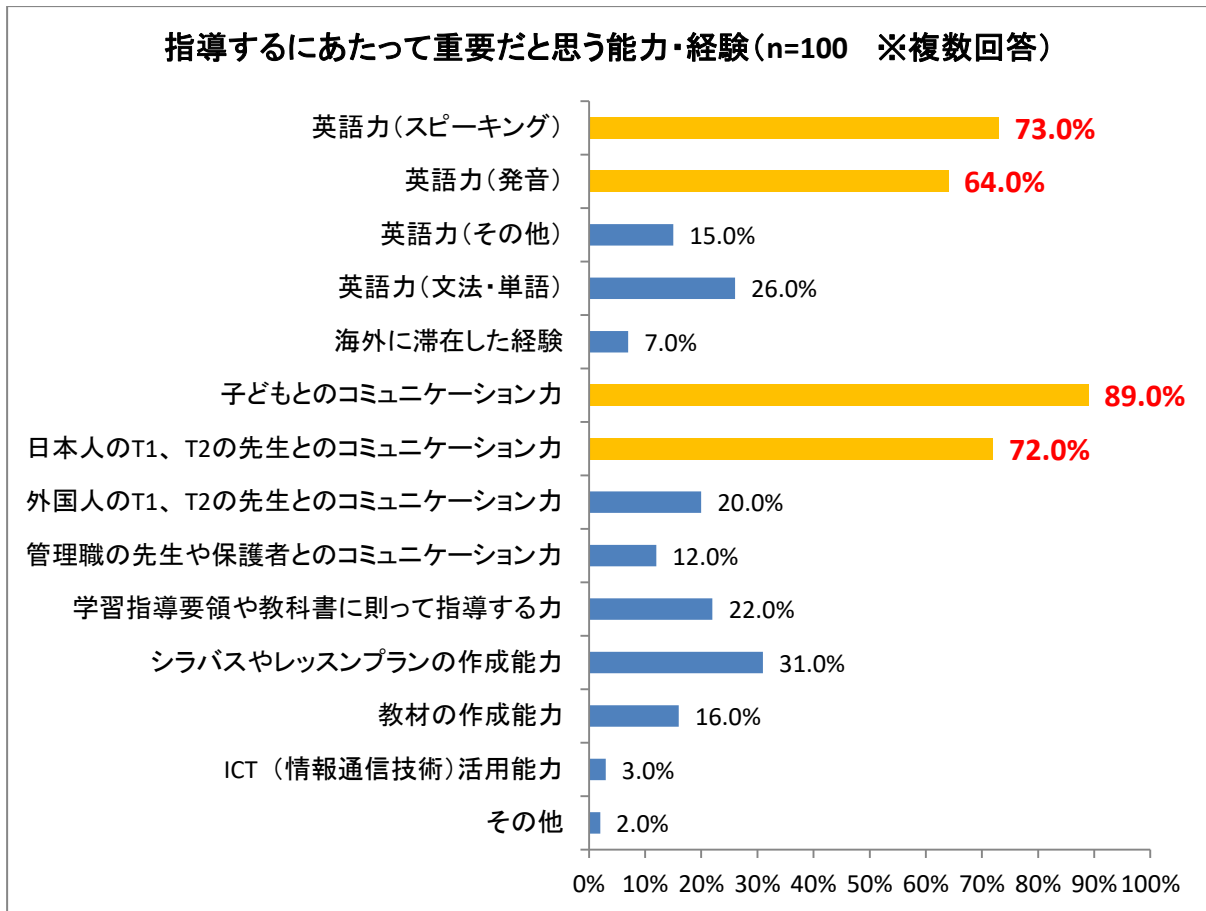
自治体から所属のNPOへ依頼/NPOから派遣

また、前の設問で「有償（時給制）」（67.0%）で指導していると回答した人に、指導以外の業務の実施状況及び給与の支払い状況について問うたところ、「授業の打ち合わせ」（89.6%）、「教材準備」（86.5%）、「シラバス・レッスンプラン作成」（74.6%）など、「授業の評価・採点」（35.9%）を除き、地域人材は指導以外の多くの業務に携わっていることが判明した。しかし、「授業の打ち合わせ」を除き、授業時間以外の業務には「給与が支払われない」と回答している人の割合が業務を実施している人の約7割を占める。地域人材の給与は、指導以外の業務への対価も含めて時給が設定されていると想定した方がよいかもしれない。



## ■指導にまつわる能力・経験についての考え

「指導するにあたって重要だと思う能力・経験」を問う設問への回答を以下のグラフに示す。

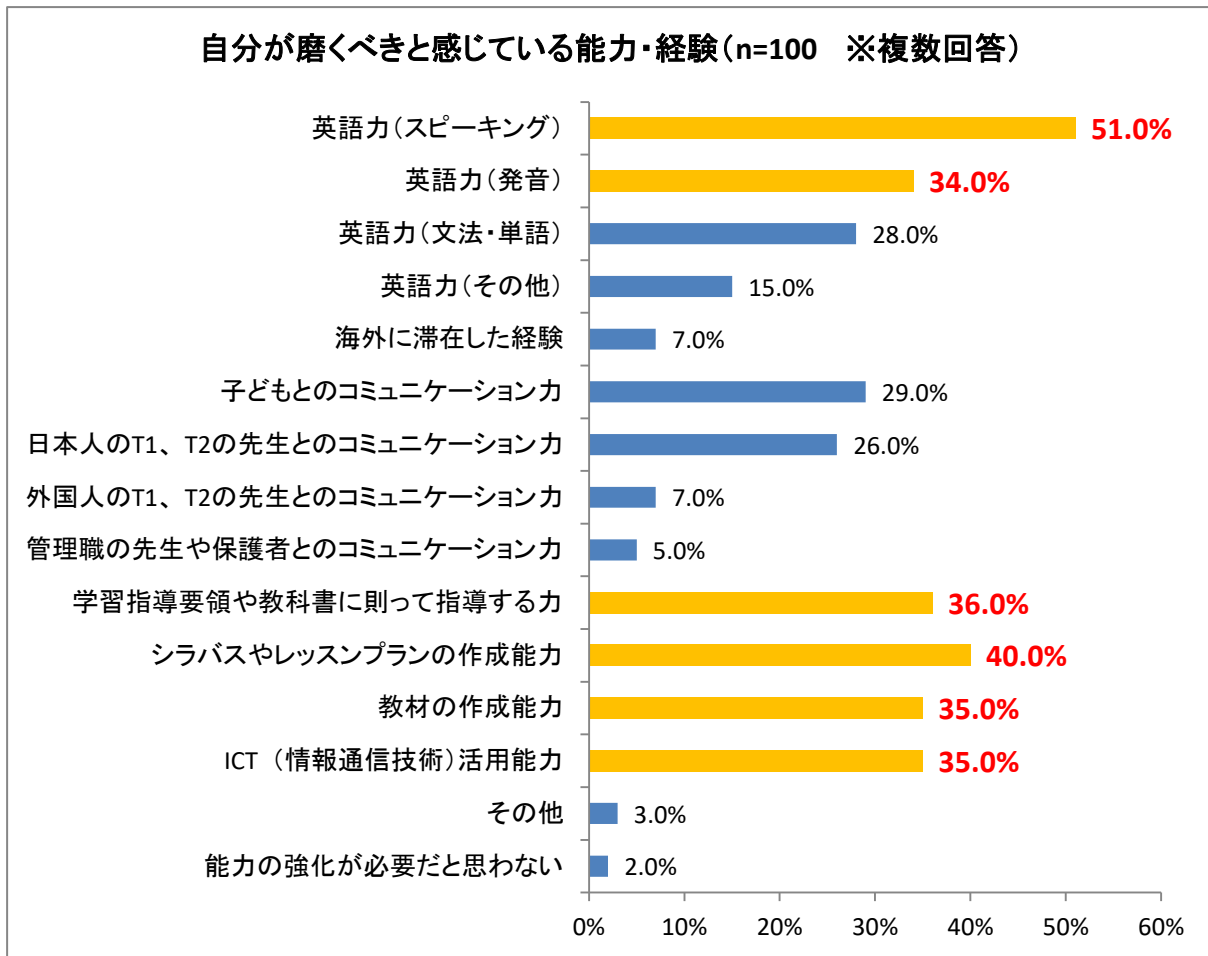


### <「その他」の記述>

国際理解教育／児童指導、ユーモア

「指導するにあたって重要だと思う能力・経験」は、「子どもとのコミュニケーション力」が最多で89.0%。「英語力（スピーキング）」が2番目に多く73.0%、次いで「日本人のT1、T2の先生とのコミュニケーション力」（72.0%）、「英語力（発音）」（64.0%）が多い。一方で、「学習指導要領や教科書に則って指導する力」（22.0%）、「シラバスやレッスンプランの作成能力」（31.0%）、「教材の作成能力」（16.0%）は、30%程度かそれ以下である。地域人材として教えている人は、「何を、どのように指導するか考え準備する力」よりも、英語力やコミュニケーション力が期待されていると感じている。

次に、「自分が磨くべきと感じている能力・経験」を問う設問への回答を以下のグラフに示す。



<「その他」の記述>

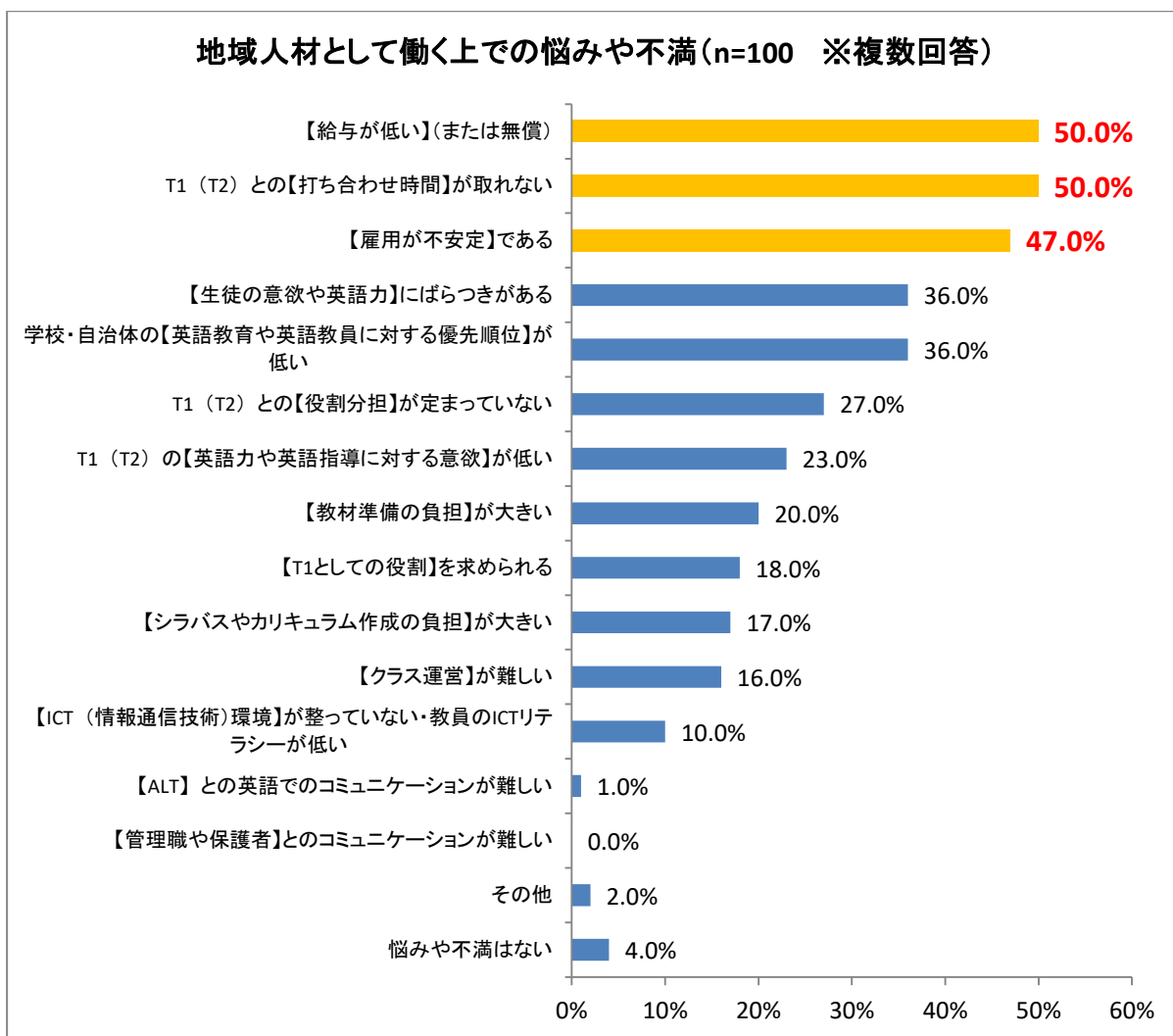
英語の教員免許／学校での日本人英語教員の必要性／小学校英語の目指すことの理解と実践

「自分が磨くべきと感じている能力・経験」は、「英語力（スピーキング）」（51.0%）が最多。英語力では他に「発音」（34.0%）の割合も高い。英語力以外では「シラバスやレッスンプランの作成能力」（40.0%）、「学習指導要領や教科書に則って指導する力」（36.0%）、「教材の作成能力」（35.0%）、「ICT（情報通信技術）活用能力」（35.0%）の割合が高い。これらの「何を、どのように指導するか考え準備する力」については、前の「指導するにあたって重要だと思う能力・経験」を問う設問での回答割合は高くなく、現在はそれほど求められていない力だと考えられるが、スキルアップをしておきたいと考える人が一定数いる。小学校で外国語が教科化される2020年度以降は、これらの役割もより求められる可能性がある」と予測していることかもしれない。J-SHINEや登録団体がこれらの能力を向上させる機会を定期的に提供することによって、継続的な資格更新につなげるとともに、地域人材の価値を高めていくことも重要だ。

## ■小学校での指導にまつわる課題

地域人材として働く上での悩みや不満に関する設問への回答は、「給与が低い（または無償）」（50.0%）、「T1（T2）との打ち合わせ時間が取れない」（50.0%）が最多。次いで「雇用が不安定である」（47.0%）も多い。

「2.3 指導者に転じる可能性がある人材はどのくらいいるのか」（p.14）の項目で、現在小学校で教えていないJ-SHINE資格取得者には、収入を含む雇用条件が希望に合うものであれば、小学校で教えるようになる可能性がある人材が一定数いると指摘した。一方で、実際に地域人材として小学校で教えている人も雇用条件（この場合は雇用が不安定であることや給与）に不満を感じている。



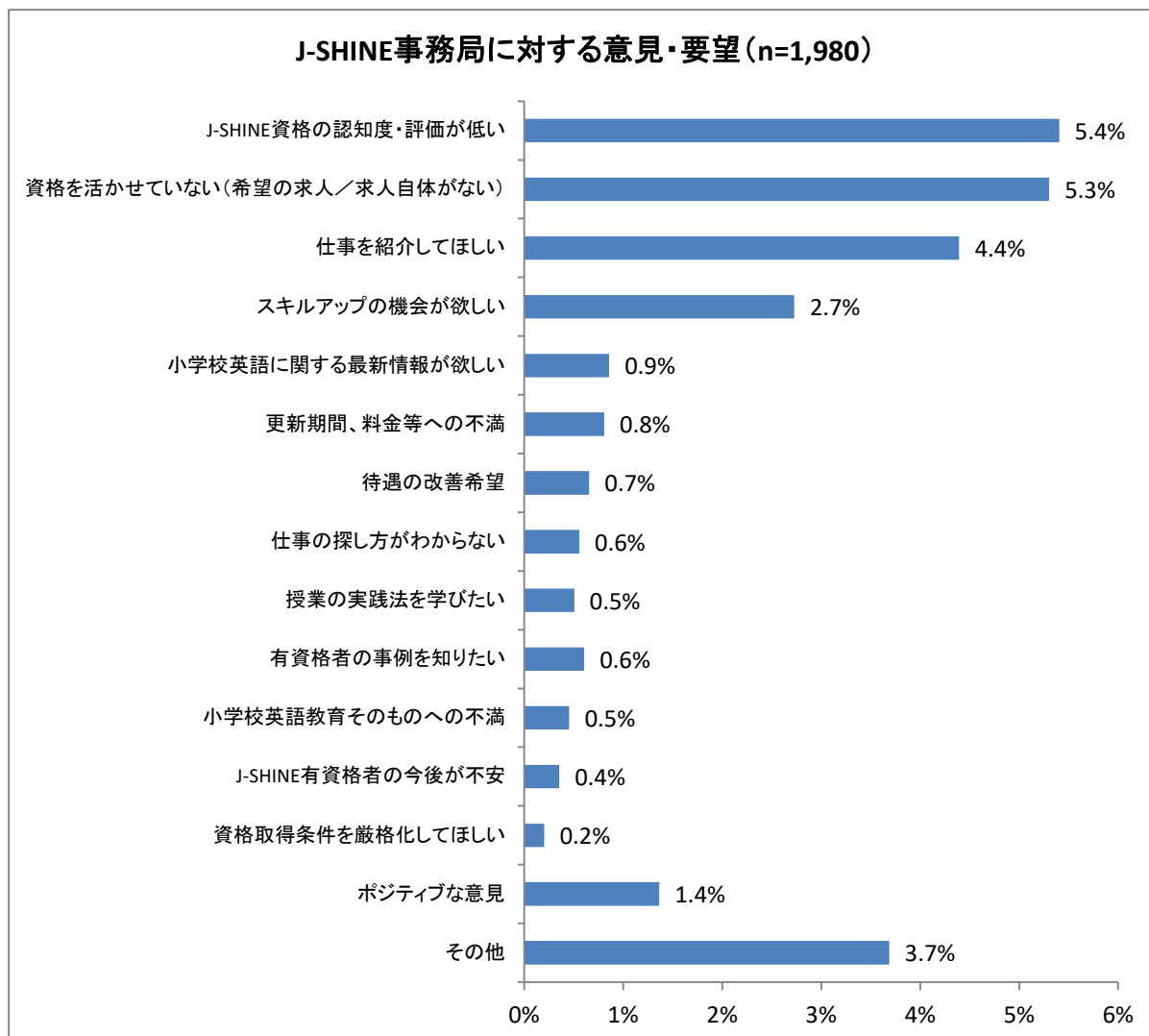
### <「その他」の記述>

教育委員会や管理職が日本の英語教育や現場を理解していないため能力に応じた報酬になっていない／初期の英語は外国人に頼らなくても日本人で十分対応できるという事実

今後、地域人材の需要が増加した場合に新規の指導者を雇用したり、継続的に優れた人材を雇用したりするためには、自治体や学校が地域人材の雇用条件を明確化する、雇用条件に見合った待遇を整備する、学級担任と地域人材が協力して英語授業を進めていける仕組みづくりをするなど、受け入れ体制をさらに拡充する必要があると見られる。



一方で、J-SHINE 資格取得者の事務局に対する意見・要望から、J-SHINE 事務局や登録団体としても改善すべき点があることが浮かび上がってきた。「J-SHINE への意見・要望」を記述式で問い、回答を共通の要素で分類したもの（複数回答あり）を以下のグラフに示す。なお、本設問への回答数は 459 件であった。個別のコメントについては本レポートの p.55～p.57 に掲載する。



最も多かった意見は「J-SHINE 資格の認知度・評価が低い」（5.4%）であった。「小学校の英語科主任の先生や校長先生すらご存じない」というコメントもあり、地域人材として働いている人は小学校で採用されるにあたり評価されたと思うポイントに「J-SHINE 資格」を挙げた人が 37.0%いた一方、J-SHINE 資格だけでは十分ではなく、教員免許がないと小学校で地域人材として教えられない、または十分な報酬が得られないケースもあると思われる。2 番目に多かったのは、「資格を活かせていない（希望の求人/求人自体がない）」（5.3%）という意見であった。「在住地域では授業は担任と ALT のみで行っている」、「地域人材はボランティアの募集しかない」というコメントが見られた。3 番目に「仕事を紹介してほしい」（4.4%）が多かった。J-SHINE 資格（のみ）を持つ人が、それを武器として希望の求人に出合ったり、応募したりできていないケースも多いと考えられる。J-SHINE 事務局や登録団体も、引き続き J-SHINE 資格の認知度を高め、小学校の英語授業で地域人材を活用することの効能や事例を発信するなど、資格の評価向上に努める必要がある。

## 2.5 まとめ

今回の調査を通じて、調査対象者である J-SHINE 資格者の中で、地域人材として小学校で教えている人は全体の 7.1%であり、地域人材と回答した人のうち 77.0%の人は有償で教えていることが判明した。J-SHINE 設立当初は地域人材の小学校での登用は極めて限定的であったと思われ、さらに、有償で教えているケースはほとんど聞かれなかったことを鑑みると、小学校英語指導者としての地域人材のニーズは少しずつ高まっており、戦力として認められてきていると考えられる。2020 年度からの小学校高学年での外国語の教科化、ならびに中学年での外国語活動の必修化を踏まえると、小学校で英語指導者が不足し、地域人材のニーズがさらに高まる可能性がある。

今後、地域人材のニーズが高まった場合に指導可能な人材ほどの程度いそうなのかという点に関して、小学校以外の場所で子どもに英語を教えている J-SHINE 資格取得者のうち 36.9%（回答者全体の 13.7%）は「勤務地・勤務時間・指導内容等の条件が希望に合う」または「十分な収入が得られる」のであれば、小学校で教えてみたいと考えている。子どもへの指導経験があり、小学校で地域人材として即戦力になり得る人たちは一定数おり、この人たちは、将来的に希望に見合う求人があれば小学校英語指導者に転じる可能性がある人材であると言える。同様に、以前は子どもに英語を教えていたが現在は教えていない人、まだ子どもに英語を教えた経験がない人の一部も指導可能な人材である可能性が高い。こうした人材が指導者に転じるかどうかは、求人における雇用条件が鍵になると考えられるが、一方で、ライフスタイル、ライフステージの変化や、教えることに対する自信がつくかどうかも指導者に転じるかどうかを左右する大きな要因である。そのため、J-SHINE 事務局や登録団体も、いったん指導現場を離れている人が現場に戻れるきっかけを用意したり、まだ教えることに自信がない資格者にスキルアップの機会を提供したりするなど、資格者に働きかける必要がある。

次に、実際に地域人材として教えている人の現状を見ると、英語力や指導経験がある人材が活躍する一方で、小学校での雇用条件は必ずしも満足いくものとなっていないようだ。背景として、授業時間以外でも担当すべき業務があることや、それに対する報酬、担任との業務分担など、詳しい雇用条件が明確化されていないことが不満につながっている可能性がある。継続的に優れた人材を雇用するためには、自治体や学校など地域人材を受け入れる側も、地域人材の雇用条件を明確化する、雇用条件に見合った待遇を用意する、学級担任と地域人材が協力して英語授業を進めていける仕組み作りをするなど、これまでに整備してきた受け入れ体制をさらに拡充する必要がある。

さらに、J-SHINE 資格の認知度には向上の余地があり、地域人材の活用事例も数多く共有されているとは言えない状況がある。J-SHINE 事務局や登録団体もまた、教育関係者の力も借り、J-SHINE 資格取得者がより活躍しやすい状況を作るために J-SHINE 資格の認知度向上や活用効果のアピールに努めたり、自治体や学校に地域人材の活用を促したりするなど支援を続けていく必要がある。一度に全ての問題を解決することは難しいが、できることから一つひとつ、取り組んでいきたいと考える。

なお、本調査では、現在小学校で地域人材として教えている人の指導状況についてもさらに詳しく分析したが、これらは本論から外れるため付録に示した。付録では、有償で教えている人と無償で教えている人に見られる特徴の比較、T1 として教えている人と T2 として教えている人に見られる特徴の比較、J-SHINE への意見・要望、今後の J-SHINE 資格取得者へのアドバイスとして寄せられたコメントを紹介する。J-SHINE 資格者および資格取得を検討されている方にはぜひご参照いただきたい。

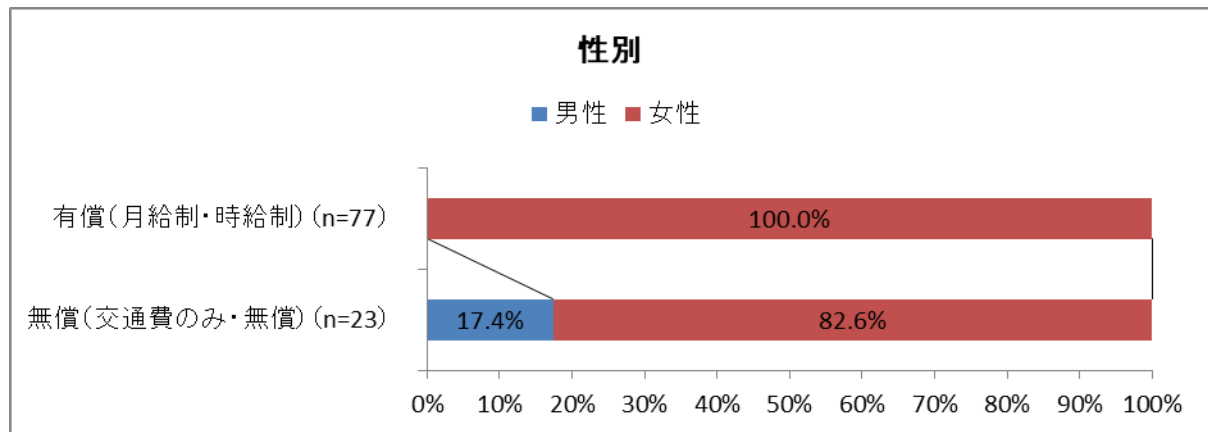
### 3 付録

#### 3.1 小学校で有償／無償で教えている人の比較

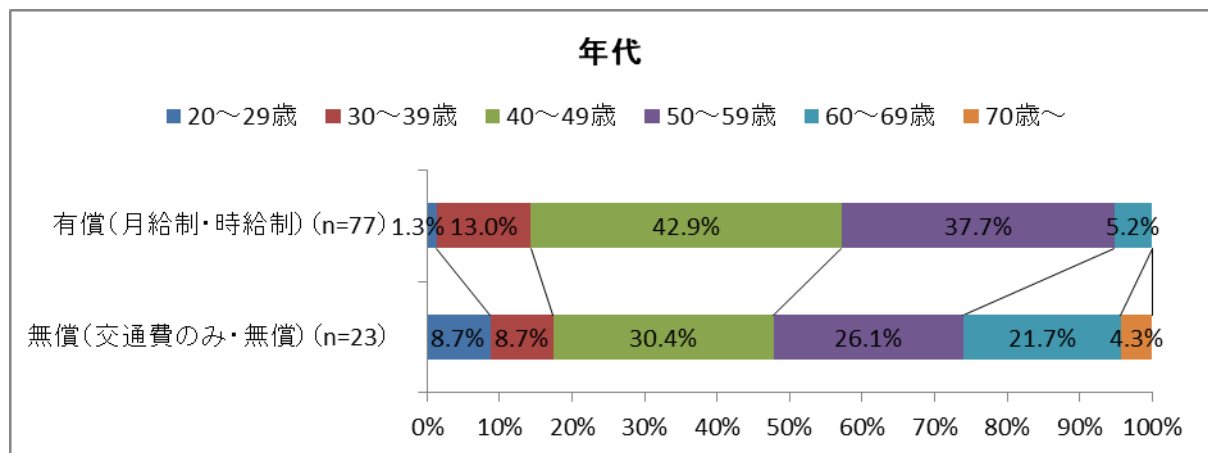
第3章では、第2章で紹介しきれなかったものの、J-SHINE 資格取得者の実態をより深く理解するための参考となる情報をいくつかの観点からお伝えする。今回の調査で「地域人材」と一口に言っても、有償／無償、T1／T2 など待遇や教え方によって属性・指導実態・悩みや不満に差があることがわかった。まず、「2.4 現在小学校で地域人材として教えている人の実態と課題」(p.19) で分析対象とした地域人材 100 人を、有償（月給制・時給制）で教えている 77 人と無償（交通費のみ・無償）で教えている 23 人に分けて比較する。

##### ■回答者属性

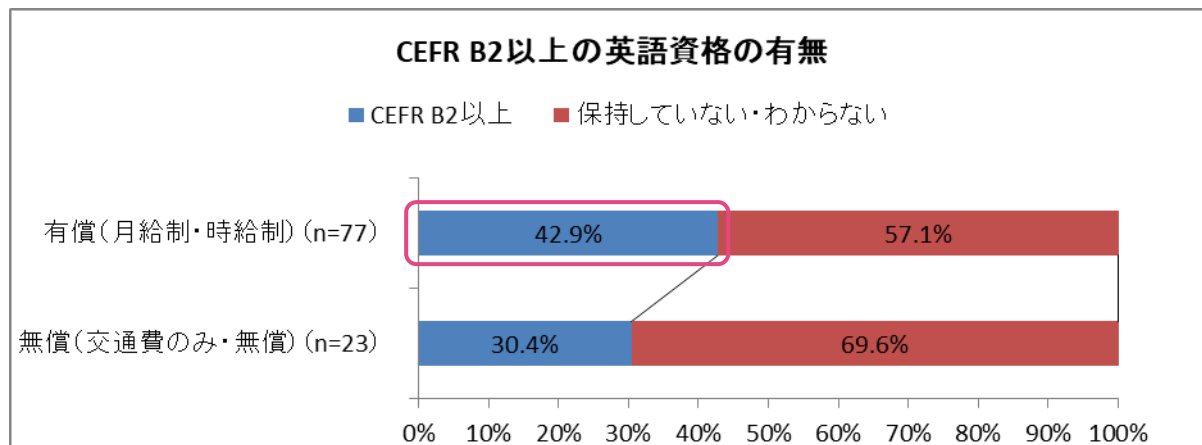
性別は、有償で教えている人は女性が 100.0%、無償で教えている人は女性が 82.6%、男性が 17.4% であった。



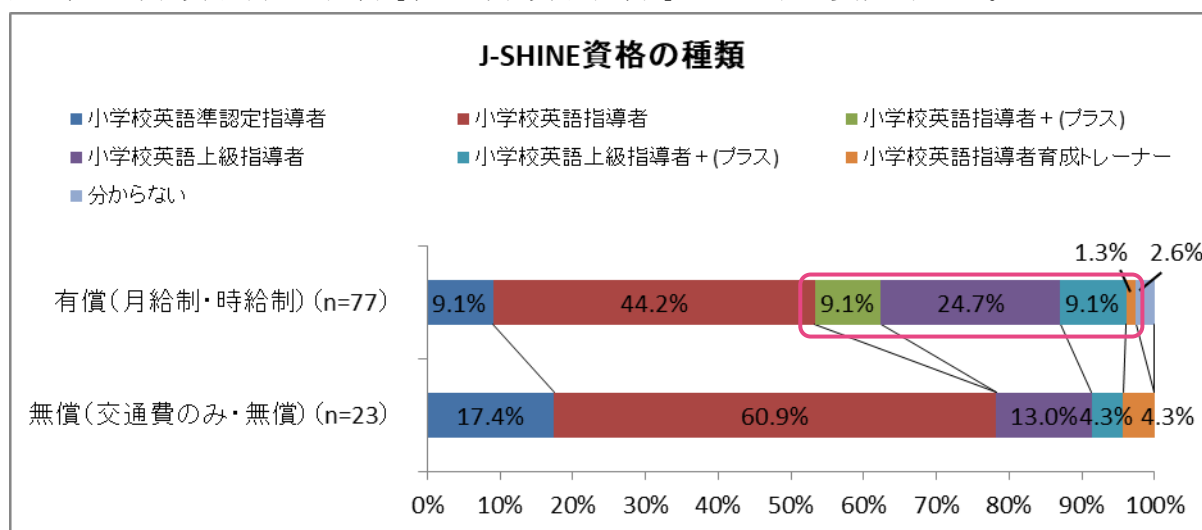
年代は、有償で教えている人は 40～50 代が中心（80.6%）であった。無償で教えている人は 60 代以上もやや多く（26.0%）、定年退職後にボランティアで教えている人もいる可能性がある。



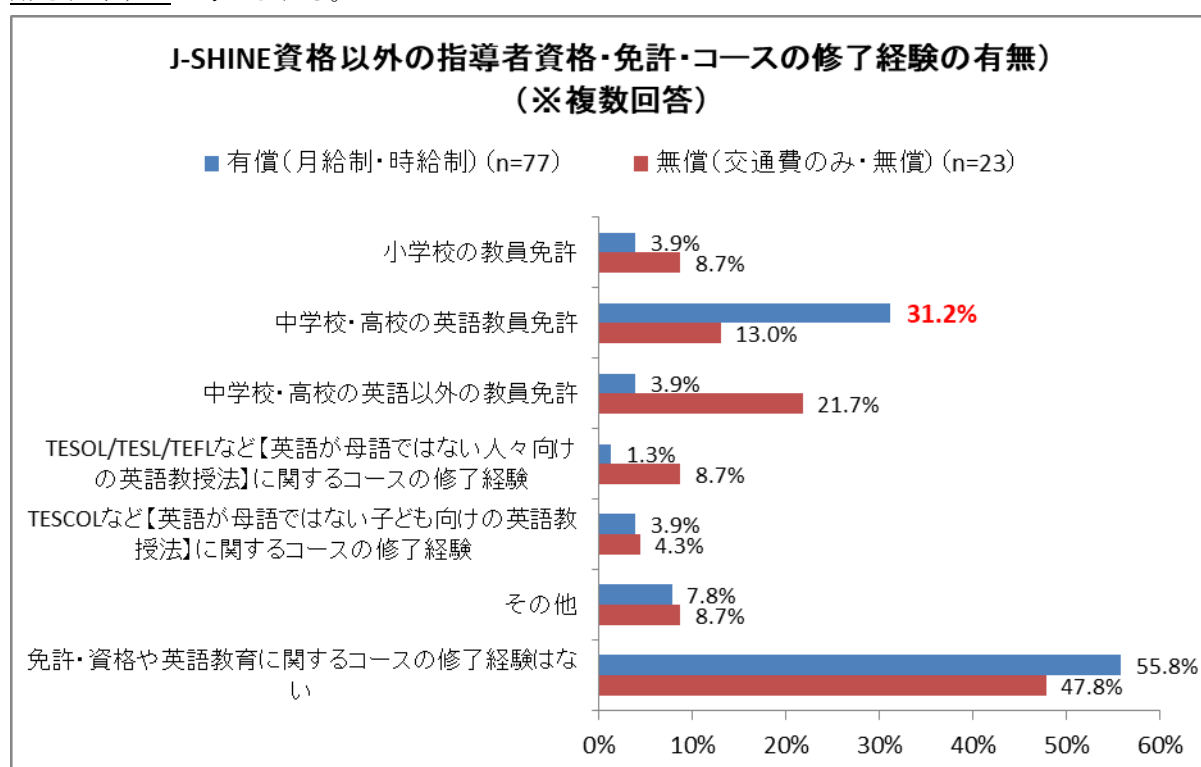
CEFR B2以上の英語力があるかを問う設問では、有償で教えている人の42.9%がCEFR B2以上の英語力があり、無償で教えている人の30.4%と比べて12.5ポイント割合が高い。さらに、グラフには示していないが、有償で教えている人を月給制で教えている人と時給制で教えている人に分けて見た場合、月給制で教えている人はCEFR B2以上の英語力がある人が70.0%を占めていた。このことから、一定程度の英語力を有している方が有償での職を得やすい可能性が高いと言える。



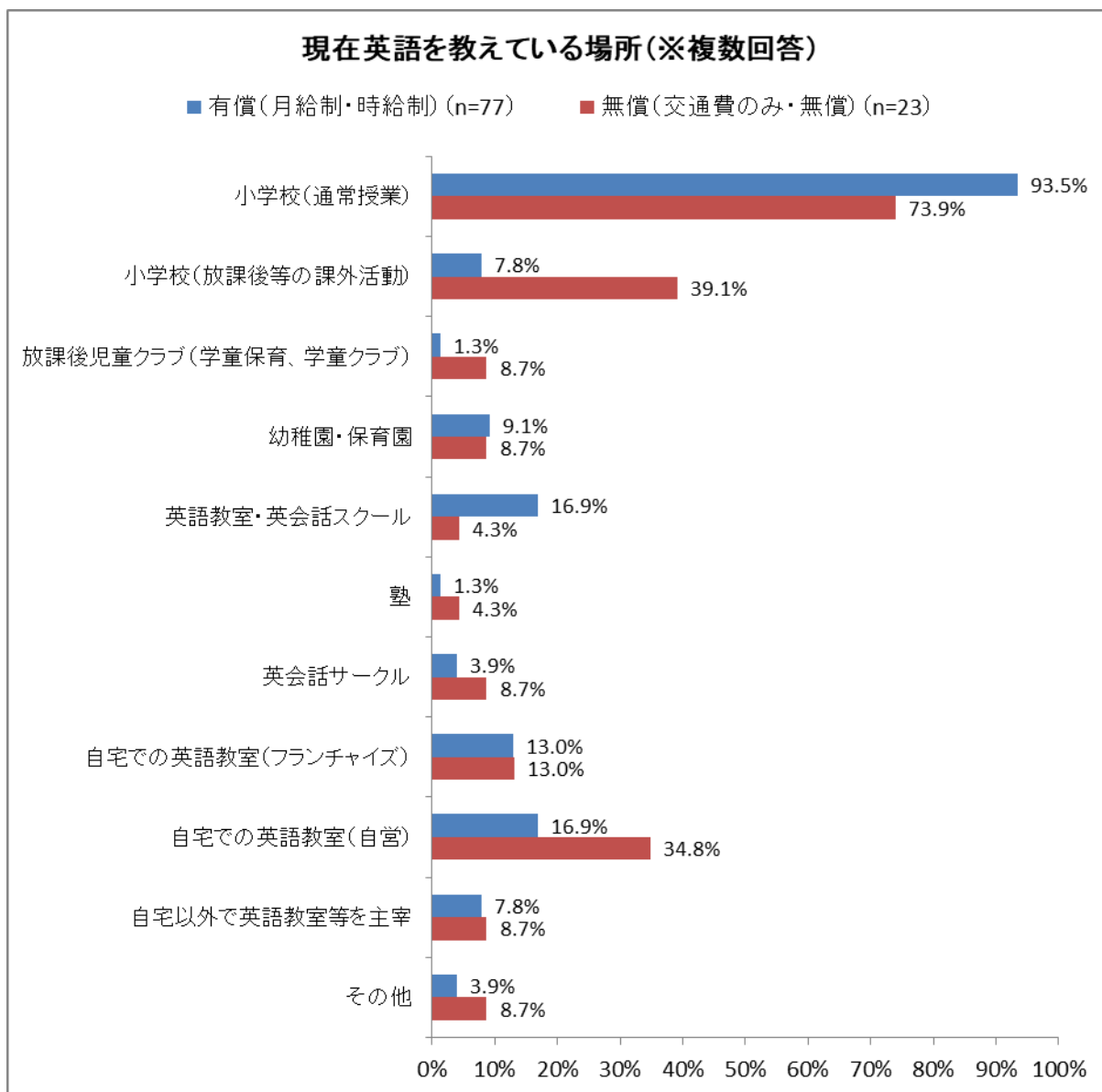
J-SHINE 資格の種類は、有償で教えている人は「小学校英語準認定指導者」、「小学校英語指導者」が過半数(53.3%)だが、「上級指導者」、「+資格者」も半数近く(44.2%)いる。無償で教えている人は、「小学校英語準認定指導者」、「小学校英語指導者」が78.3%と多数を占める。



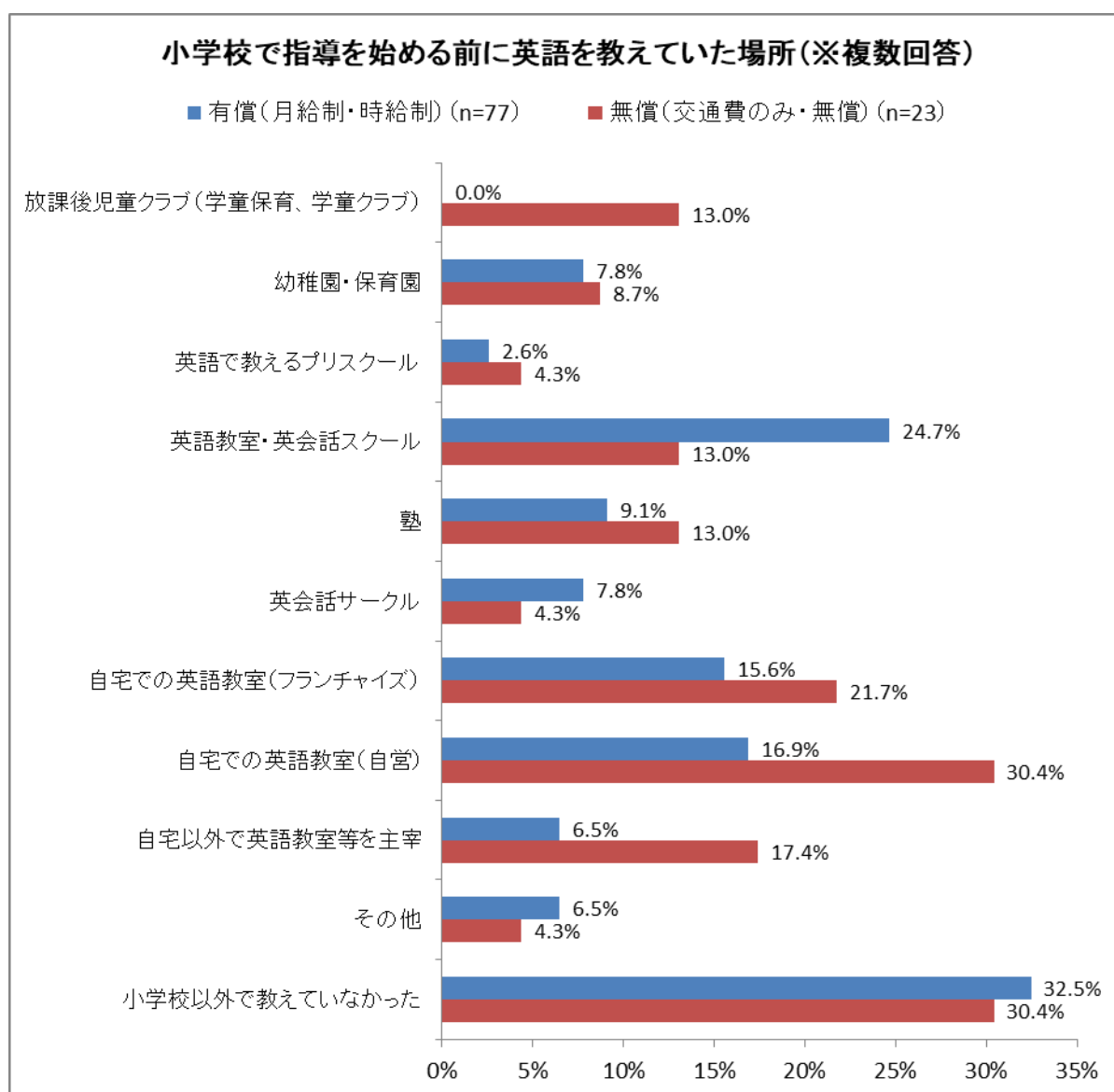
J-SHINE 資格以外の指導者資格・免許・コースの修了経験の有無を問う設問では、有償で教えている人の 44.2%、無償で教えている人の 52.2%が J-SHINE 資格以外の指導者資格・免許・コースの修了経験があると回答した。有償で教えている人は「中学校・高校の英語教員免許」を保持している人が 31.2%で、無償の 13.0%に比べて 18.2 ポイント割合が高い。グラフには示していないが、月給制で教えている人の 50.0%が「中学校・高校の英語教員免許」を保持しており、それも含めて 80.0%が英語資格や J-SHINE 資格以外の免許・資格を保持していた。「免許・資格や英語教育に関するコースの修了経験はない」人も有償、無償それぞれ半数近くいるため、J-SHINE 資格以外の指導者資格・免許・コースの修了経験は必須とは言えないものの、調査結果から判断する限り（サンプル数が限られているのでさらなる検証は必要だが）、有償の仕事（特に月給制の仕事）を得るためには「中学校・高校の英語教員免許」を取得していると有利になる可能性が高い。CEFR B2 以上の英語力、J-SHINE 資格の種類、資格・免許等、どの項目においても高い能力を証明できる人の割合が「有償で教えている人」で高いことを考えると、有償の仕事を得るには平均的な J-SHINE 資格取得者より高い能力があると採用されやすいと考えられる。



現在、小学生以下の子どもに英語を教えている場所に関する設問の回答は以下の通り。小学校で、有償で教えている人は、ほとんどが通常授業を担当している（93.5%）。無償で教えている人も、通常授業の割合が高い（73.9%）が、課外活動で教えている人も39.1%いる。



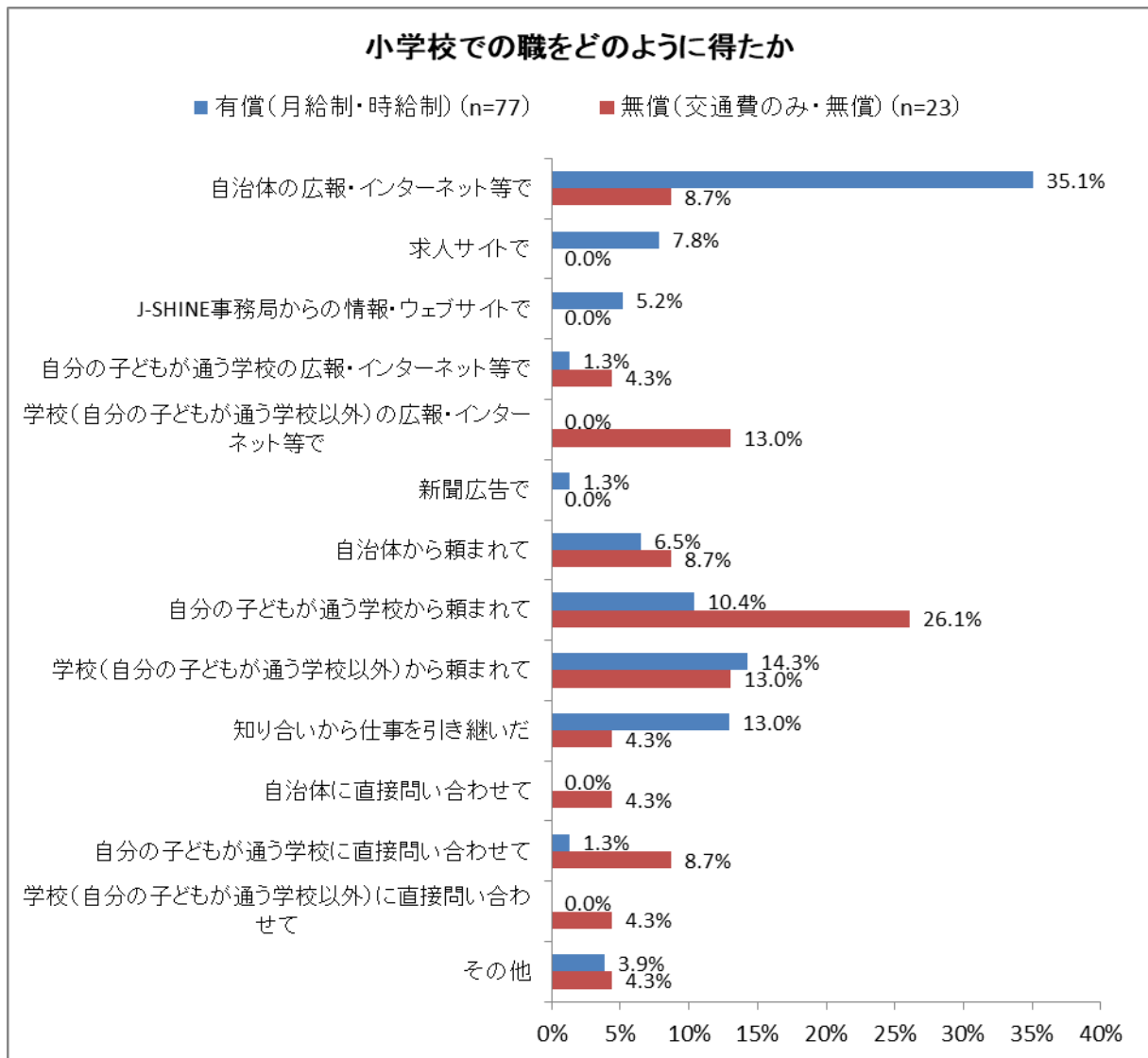
小学校で英語を教え始める以前に小学生以下の子どもに英語を教えていた場所に関する設問の回答は以下の通り。有償で教えている人は、「小学校以外で教えていなかった」(32.5%)人もいるが、教えていた場所は「英語教室・英会話スクール」が最多(24.7%)。前ページのグラフでは、現在「英語教室・英会話スクール」で教えている人が16.9%で差が7.8ポイントあることから、小学校に勤務先を移した人もいると考えられる。無償で教えている人は、「小学校で教えていなかった」(30.4%)人もいるが、教えていた場所は自宅での英語教室(自営)が最多(30.4%)。「自宅での英語教室(フランチャイズ)」(21.7%)や、「自宅以外で英語教室等を主宰」(17.4%)も多い。前ページのグラフでは、小学校で教える傍ら「自宅での英語教室(自営)」でも教え続けている人も多いことが読み取れるので、小学校で、無償で指導することによって英語教室のカリキュラムを小学校と連携させやすくなったり、小学校でのネットワークを広げることで生徒募集をしやすくなったりするといったメリットもあるのかもしれない。



### ■小学校での職をどのように得たか

有償で教えている人は「自治体の広報・インターネット等で」が最多（35.1%）。「知り合いから仕事を引き継いだ」も13.0%いる。無償で教えている人は、「自分の子どもが通う学校から頼まれて」（26.1%）と「学校（自分の子どもが通う学校以外）から頼まれて」（13.0%）を合わせて、学校から頼まれた人が39.1%と多く、その他にも、学校の広報・インターネット、学校への直接問い合わせ等、直接学校とコンタクトを取って職を得ている人が多い。

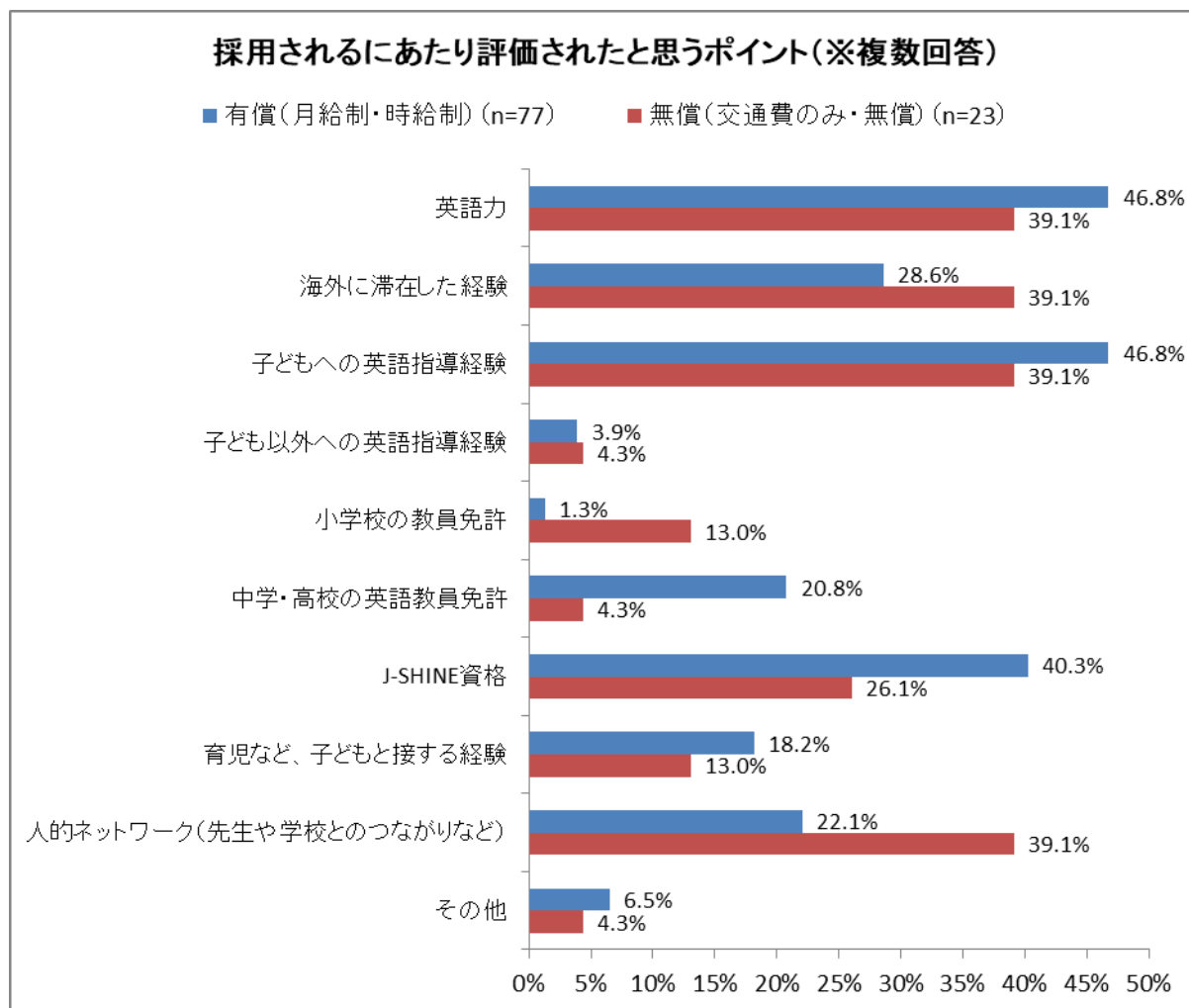
つまり、求人等で見つけた場合は有償、自身の子どもの通う学校等から頼まれた場合は無償のケースが多いと言えそうだ。後者の場合は、保護者ボランティアのような形での参加と考えられる。





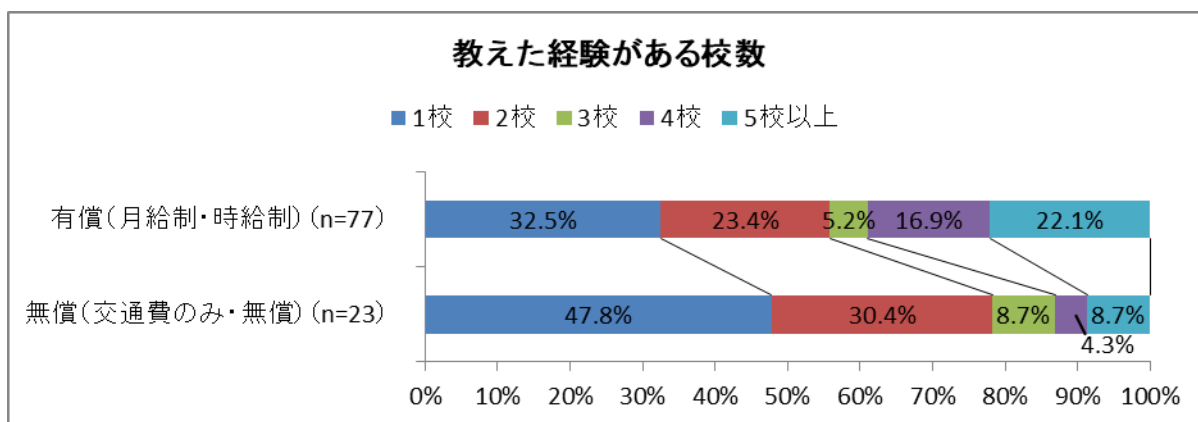
## ■採用されるにあたり評価されたと思うポイント

有償で教えている人、無償で教えている人ともに「英語力」（それぞれ 46.8%、39.1%）、「海外に滞在した経験」（それぞれ 28.6%、39.1%）、「子どもへの英語指導経験」（それぞれ 46.8%、39.1%）は評価されたと感じている。有償で教えている人は、「J-SHINE 資格」（40.3%）、「中学・高校の英語教員免許」（20.8%）が多い。無償で教えている人は「人的ネットワーク（先生や学校とのつながりなど）」（39.1%）が多い。

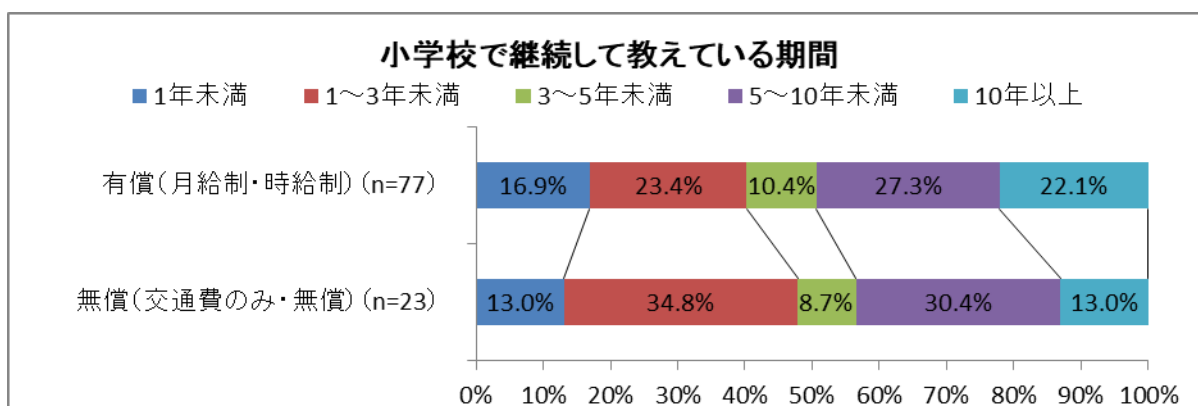


## ■小学校での活動内容

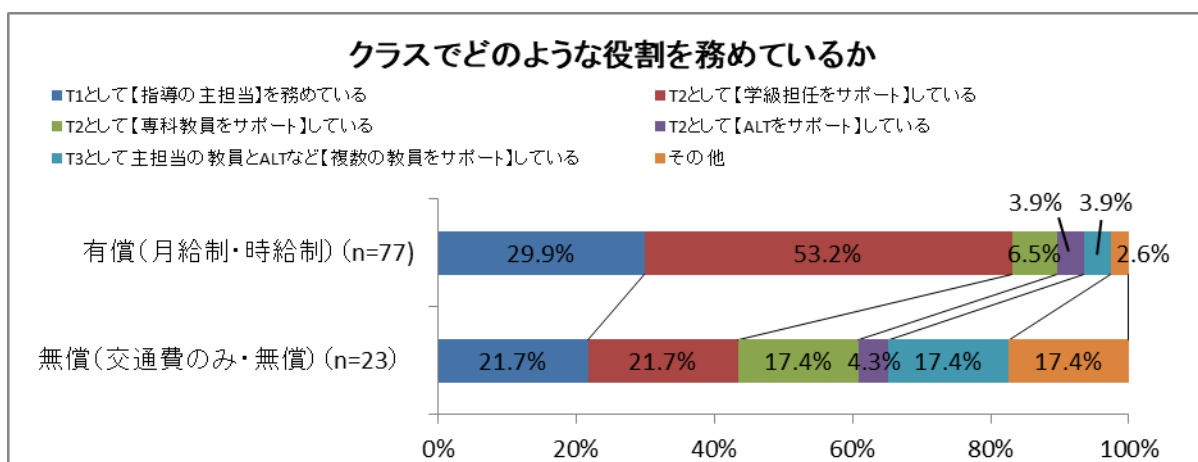
「教えた経験がある校数」を問う設問では、有償で教えている人は、3校以下が61.1%、4校以上の割合は39.0%であった。一方、無償で教えている人は、3校以下が86.9%と多数を占めた。



「小学校で継続して教えている期間」は、有償で教えている人は「10年以上」の割合が22.1%で無償の人の13.0%よりやや高く、無償で教えている人は「1～3年未満」の割合が34.8%で有償の人の23.4%よりやや高いが、全体として顕著な差はない。

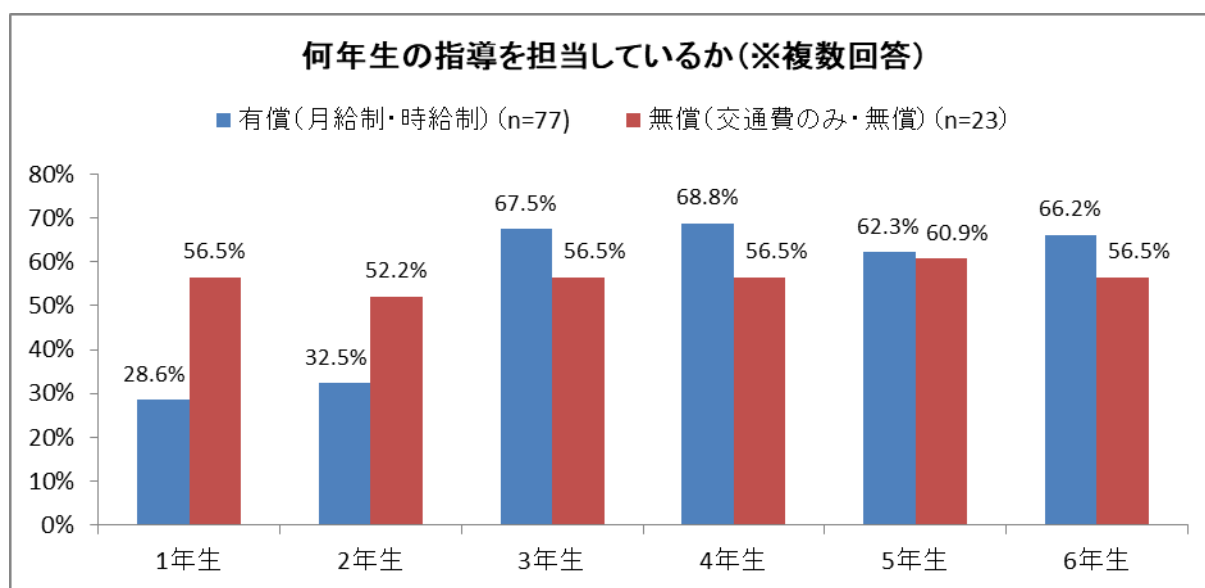


次に、「クラスでの役割」を問うた設問の回答を下記のグラフに示す。

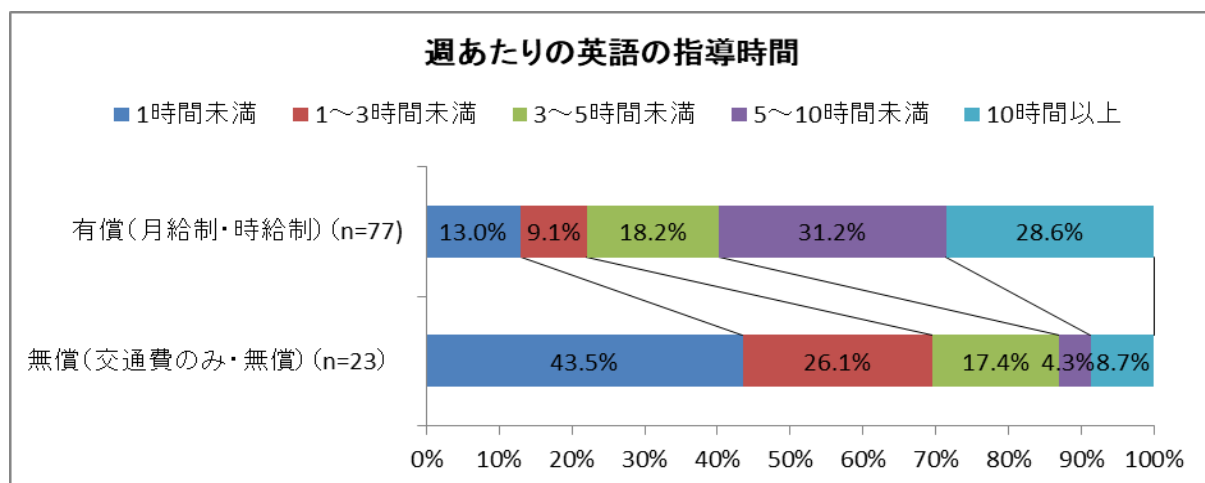


有償で教えている人は「T2として学級担任をサポートしている」が53.2%で最多。「T1として指導の主担当を務めている」が29.9%で2番目に多い。無償で教えている人は、有償で教えている人と比較すると「T1として指導の主担当を務めている」(21.7%)、「T2として学級担任をサポートしている」(21.7%)が少なく、「T2として専科教員をサポートしている」(17.4%)、「T3として主担当の教員とALTなど複数の教員をサポートしている」(17.4%)人など役割が多岐に渡る。

「何年生の指導を担当しているか」を問う設問では、有償で教えている人は3～6年生が多く(各60～70%)、1～2年生は少ない(各30%前後)。無償で教えている人は、1～6年生までまんべんなく教えている(各50～60%)。

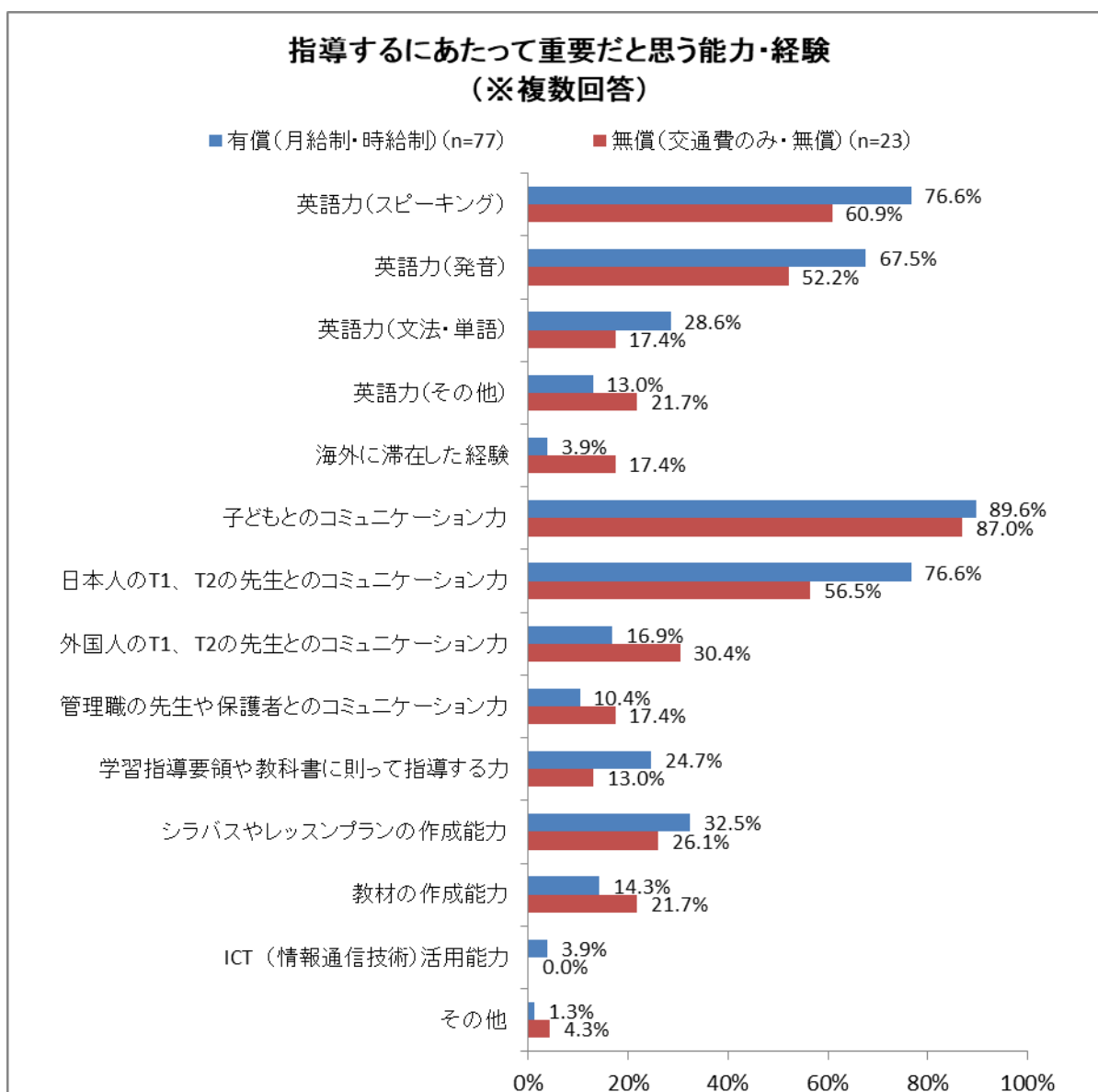


「週あたりの英語の指導時間」は、有償で教えている人は59.8%が「週に5時間以上」指導している。グラフには示していないが、月給制で教えている人は、80.0%が「週に10時間以上」指導している。一方で、無償で教えている人は「週に3時間未満」が69.6%を占め、指導時間が短い傾向にある。



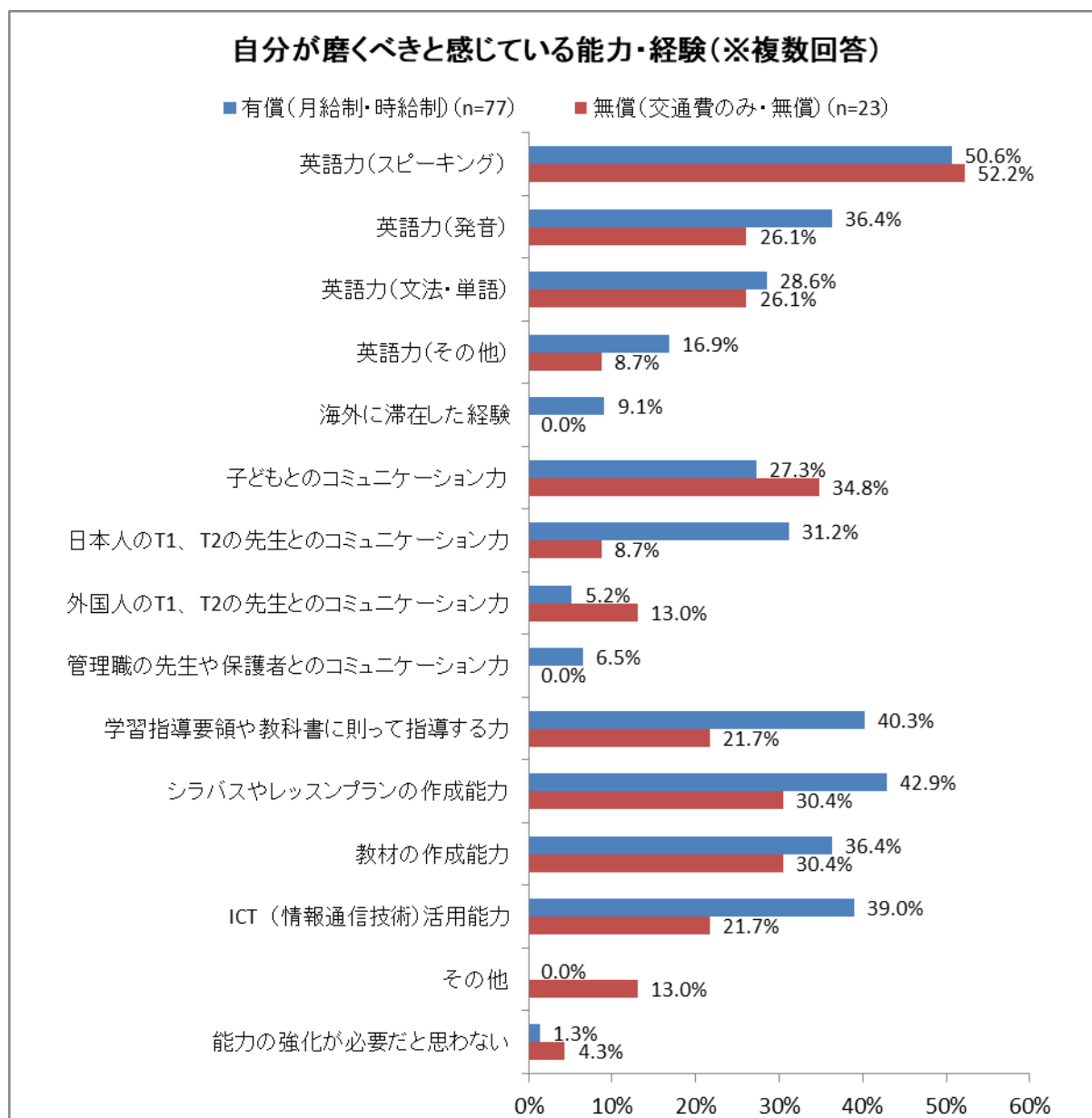
## ■指導にまつわる能力・経験についての考え

「指導するにあたって重要だと思う能力・経験」を問うた設問への回答を以下のグラフに示す。



「日本人の T1、T2 の先生とのコミュニケーション力」の項目で、特に有償で教えている人と無償で教えている人の差が大きかった（それぞれ 76.6%、56.5%で 20.1 ポイント差）。これは、有償・無償の差が影響しているというよりも、前の項目（p.41）で見た通り、有償で教えている人はクラスで T2 として学級担任をサポートする人が多い（53.2%）ことが影響していると考えられる。一方で、「外国人の T1、T2 の先生とのコミュニケーション力」が重要だと感じているのは無償で教えている人が 30.4%で、有償で教えている人（16.9%）よりも 13.5 ポイント高く、無償で教えている人は日本人の先生だけでなく ALT をサポートする役割を務めている人がいるという役割の違いを反映していると思われる。他に、「英語力（スピーキング）」、「英語力（発音）」、「学習指導要領や教科書に則って指導する力」も、有償で教えている人は無償で教えている人よりも重要だと感じている人の割合がそれぞれ約 15 ポイント多いことから、有償で教えている人はより高い能力と役割が求められている可能性がある。

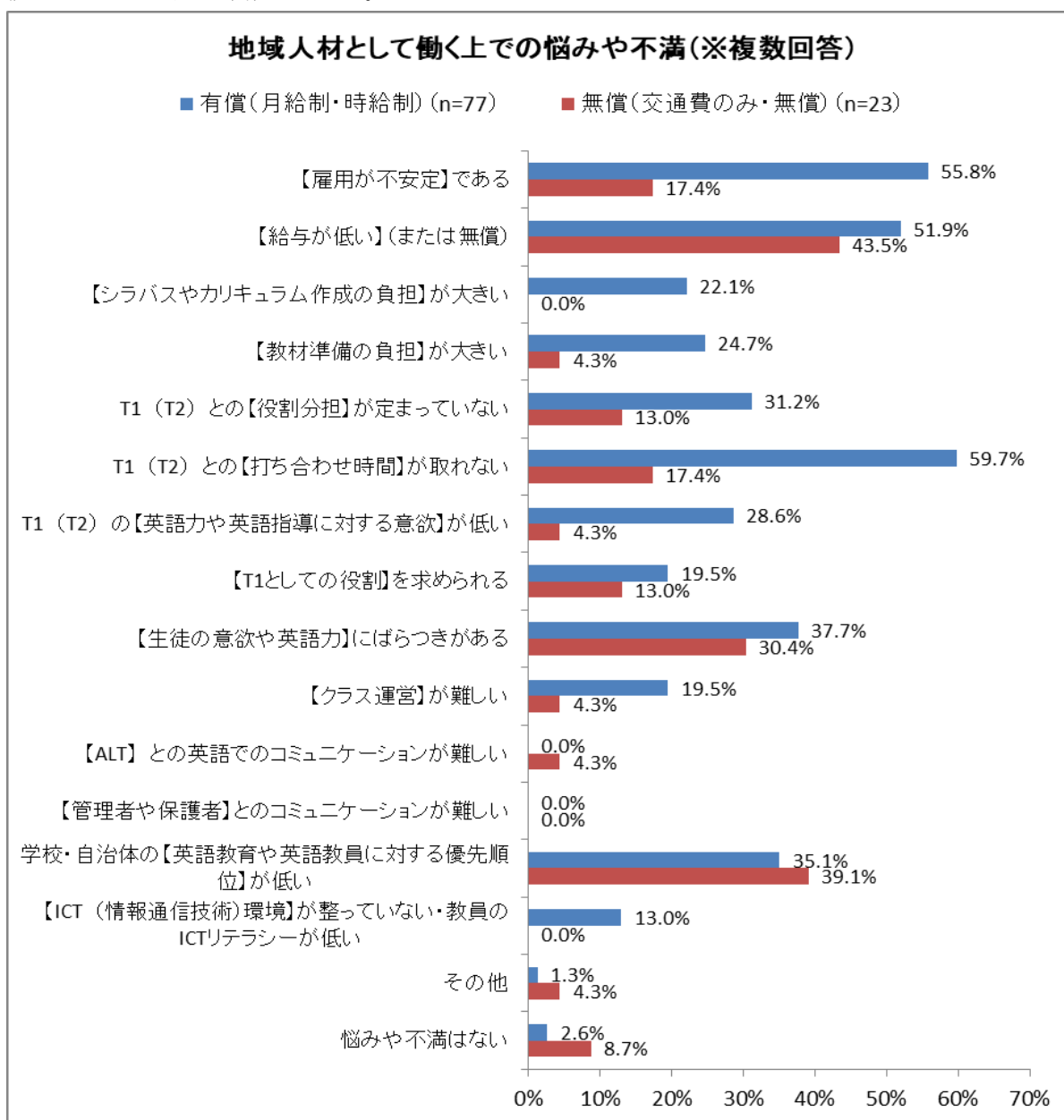
次に、自分が磨くべきと感じている能力・経験を問うた設問への回答を以下のグラフに示す。



「日本人の T1、T2 の先生とのコミュニケーション力」(それぞれ 31.2%、8.7%) で有償・無償のポイント差が 22.5 ポイントと最も大きい。有償で教えている人はクラスで T2 として学級担任をサポートする人が多いことに加えて、無償の人と比べて週あたりの指導時間が長いため、日本人の T1、T2 の先生との密な連携が必要とされていることを反映していると考えられる。「学習指導要領や教科書に則って指導する力」(それぞれ 40.3%、21.7%)、「シラバスやレッスンプランの作成能力」(それぞれ 42.9%、30.4%)、「ICT(情報通信技術)活用能力」(それぞれ 39.0%、21.7%) についても、有償で教えている人は無償で教えている人より能力を磨くべきと感じているが、これは求められる役割の違いからくるものだけでなく、有償の人の方が雇用され続けるためにより高い能力を身につける必要があると感じていることの表れかもしれない。

## ■小学校での指導にまつわる課題

「地域人材として働く上での悩みや不満」を複数回答で問うたところ、有償で教えている人は、無償で教えている人と比べると全体的に悩みが多い傾向があった。有償と無償で特に差が大きい項目は、「雇用が不安定である」（それぞれ 55.8%、17.4%）、「給与が低い」（または無償）（それぞれ 51.9%、43.5%）、「シラバスやカリキュラム作成の負担が大きい」（それぞれ 22.1%、0.0%）、「教材準備の負担が大きい」（それぞれ 24.7%、4.3%）、「T1（T2）との役割分担が定まっていない」（それぞれ 31.2%、13.0%）、「T1（T2）との打ち合わせ時間が取れない」（それぞれ 59.7%、17.4%）、「T1（T2）の英語力や英語指導に対する意欲が低い」（それぞれ 28.6%、4.3%）であった。有償で教えている人の方がクラスで主要な役割を務める人が多いことや、指導時間が長い人が多いことも影響してか、指導以外の業務の負担や先生との役割分担に課題を感じている。指導以外の業務を任されることが多いことの表れなのかもしれない。一方で、無償で教えている人の回答では「給与が低い（または無償）」が 43.5% で最多であった。無償で教えている人も、業務への対価を求めている人が半数近くいる。



ここまで見てきた項目から、小学校で地域人材として有償で教えている人と、無償で教えている人の特徴をまとめる。

### ■有償で教えている人の特徴

- ・ CEFR B2 以上の英語力、中学・高校英語教員免許を保持している人の割合が高い（特に、月給制の職を得ている人は、CEFR B2 以上の英語力、中学校・高校英語教員免許を保持している人の割合も、J-SHINE 上位資格を持っている人の割合も高い）。
- ・ 主に公募されている求人に応募して小学校での職を得ている。
- ・ もともと英会話学校などに勤務していた人も多いが、指導未経験者もいる。
- ・ 通常授業で教えることがほとんどで、複数校で教えたことがある割合が高い。
- ・ 週あたりの指導時間が長い。
- ・ クラスの中では、主に T2 として担任をサポートする他、T1 として指導する場合もある。
- ・ 3～6 年生を教えることが多い。

これらの要素を考え合わせると、有償で教えている人は小学校の「授業」を「本職」またはそれに近い形で支えており、そのため求められる要件（英語力、免許等）は高いと思われる（特に月給制の場合に顕著である）。戦力として活躍している分、教える上での悩みは無償で教えている人よりも全体的に多く、特に待遇面、T1（T2）との打ち合わせ時間が取れないことに不満を感じている。

### ■無償で教えている人の特徴

- ・ 主に学校から頼まれるなど、人的ネットワークにより職を得ている。保護者ボランティアのような形で関わっている人もいると思われる。
- ・ もともと自宅などで教えていた人が多いが、指導未経験者もいる。
- ・ 通常授業に加えて、課外授業で教えることもある。
- ・ 教える校数は少なく、週あたりの指導時間は短い。
- ・ 60 代以上の人もいることから、定年退職後にボランティアで教えている人もいると思われる。
- ・ クラスの中では、T1 として指導の主担当を務めたり、T2 として担任や専科教員をサポートしたりすることは有償で教えている人に比べると少ない。ALT をサポートしたり、T3 の役割を担ったりする人もいる。
- ・ 1 年生から 6 年生まで、まんべんなく教えることが多い。

これらの要素から、無償の人は「副業」もしくは「趣味・社会貢献」に近い位置づけではあるが、学校の要請に応じてフレキシブルに対応する形で、小学校の英語活動全般を支えている。全体的に有償で教えている人よりも悩みは少ないが、無償であることに不満を持っている人も半数近くいるので、無償の割に求められるものが大きいのかもしれない。

J-SHINE 資格取得者など求職者側は、「本業」として小学校英語に有償で関わるのか、「副業」「趣味・社会貢献」などで無償で関わるのか、立場を見定めて職を探すと、求められるものとのギャップを感じる事が少なくなるのかもしれない。自治体や学校といった求人側は、地域人材にどこまで何

をやってほしいのか、そのためには有償での雇用が必要か、ボランティアでもよいのかを考えて適切な求人を出すことが必要になるだろう。



### 3.2 小学校で T1/T2 として教えている人の比較

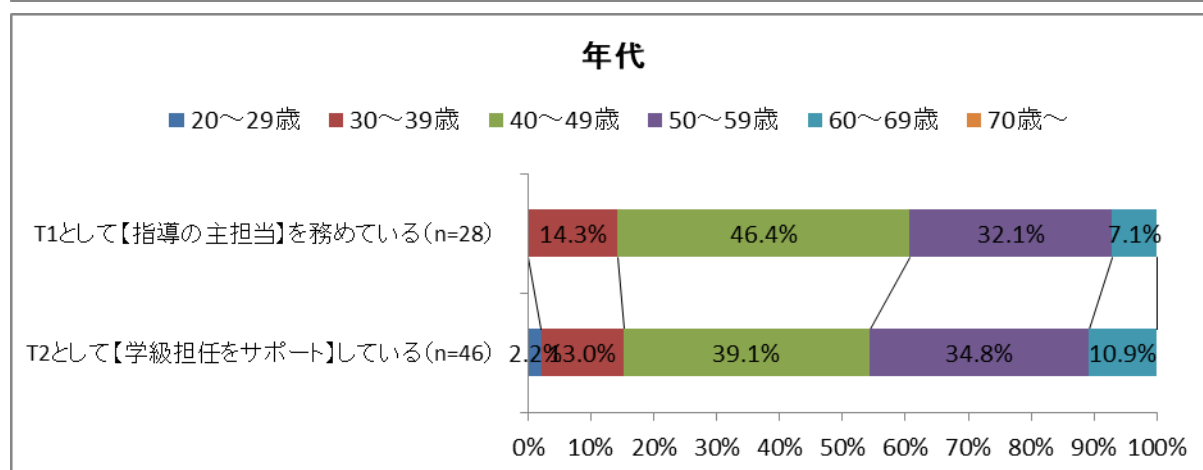
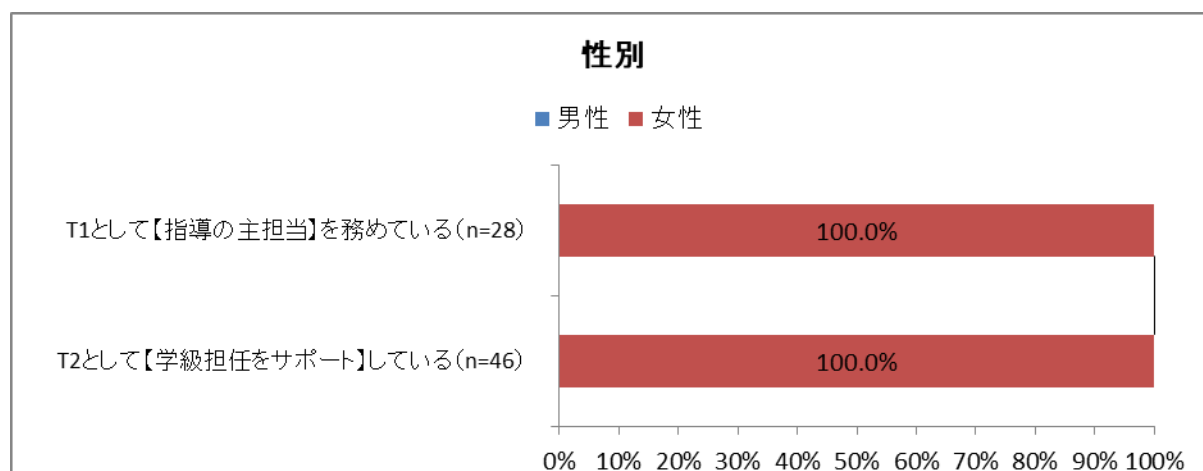
ここからは、「2.4 現在小学校で地域人材として教えている人の実態と課題」(p.19)で分析対象とした地域人材 100 人について、「クラスでの役割」を問う設問で「T1 として指導の担当を務めている」と回答した 28 人と、「T2 として学級担任をサポートしている」と回答した 46 人に絞って指導状況や課題について比較する。指導状況や課題などいくつかの点で異なる特徴が見られた。

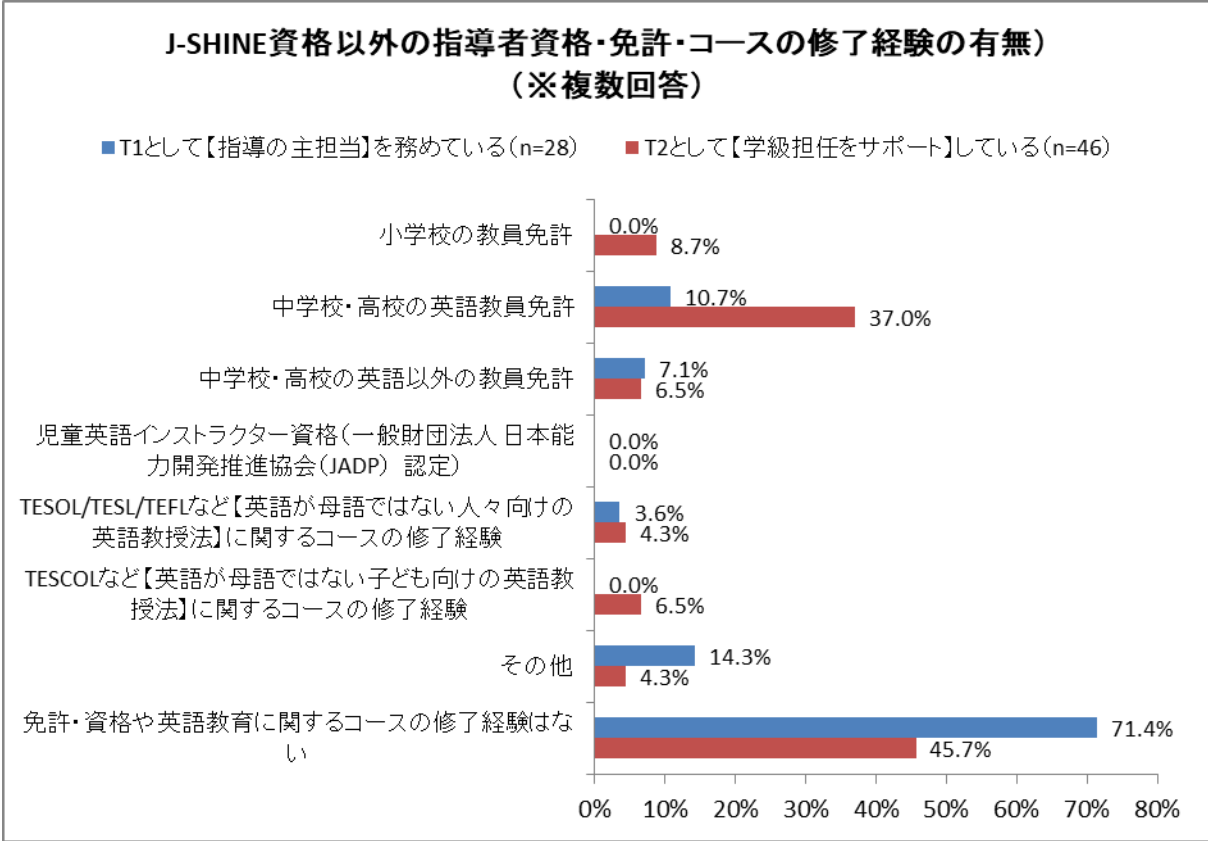
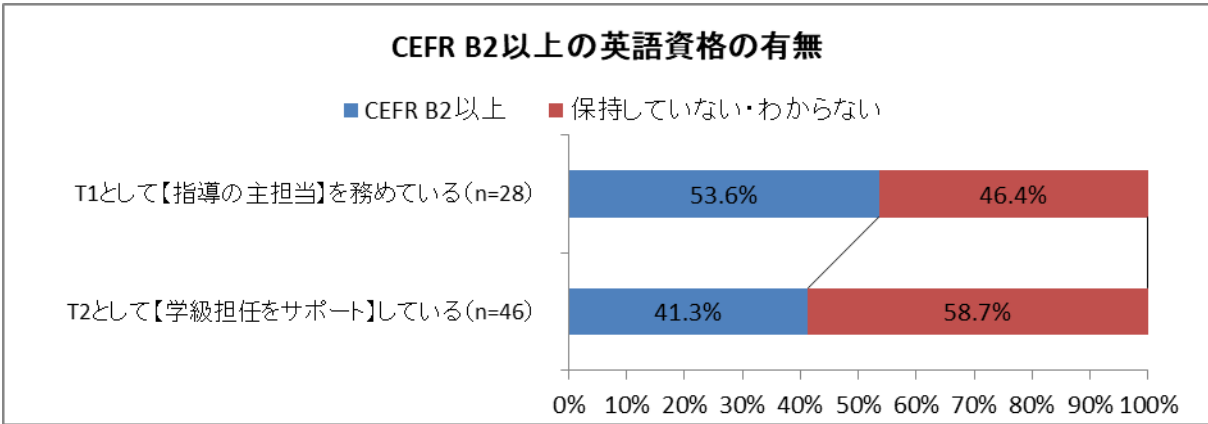
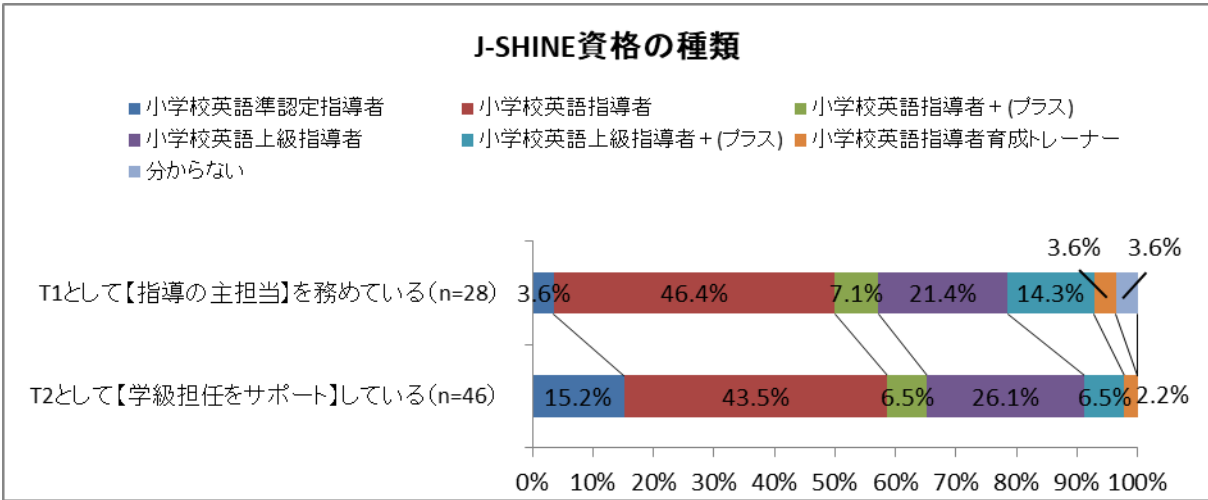
なお、「T2 として専科教員をサポートしている」(9.0%)、「T2 として ALT をサポートしている」(4.0%)、「T3 として担当の教員と ALT など複数の教員をサポートしている」(7.0%)、「その他」(6.0%)と回答した人は十分なサンプル数が得られなかったため、分析対象外とした。

#### ■回答者属性

性別、年代、CEFR B2 以上の英語力の有無、J-SHINE 資格の種類、J-SHINE 資格以外の指導者資格・免許・コースの修了経験、海外に滞在した経験といった属性に関して、役割別に以下に示す。差は見られたものの、T1、T2 のどちらかに一貫した特徴は見られなかった。

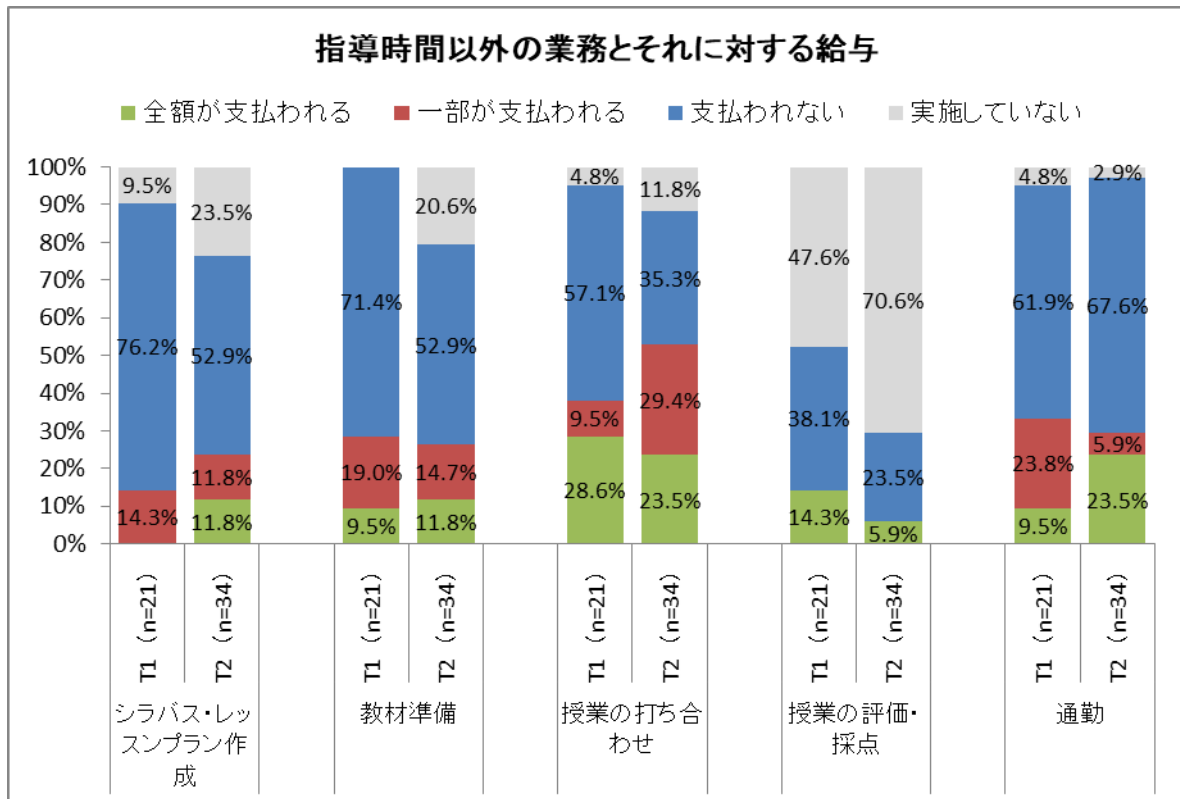
前節で取り上げた有償で教えている人、無償で教えている人の比較では、有償で働くためには CEFR B2 以上の英語力、J-SHINE 資格以外の指導者資格・免許・コースの修了経験があると有利になる可能性があるとして分析した。しかし、クラスでの役割が T1 になるか、T2 になるかにおいては、求人内容によってたまたまそのポジションになる、というケースが多いのではないかと考えられる。





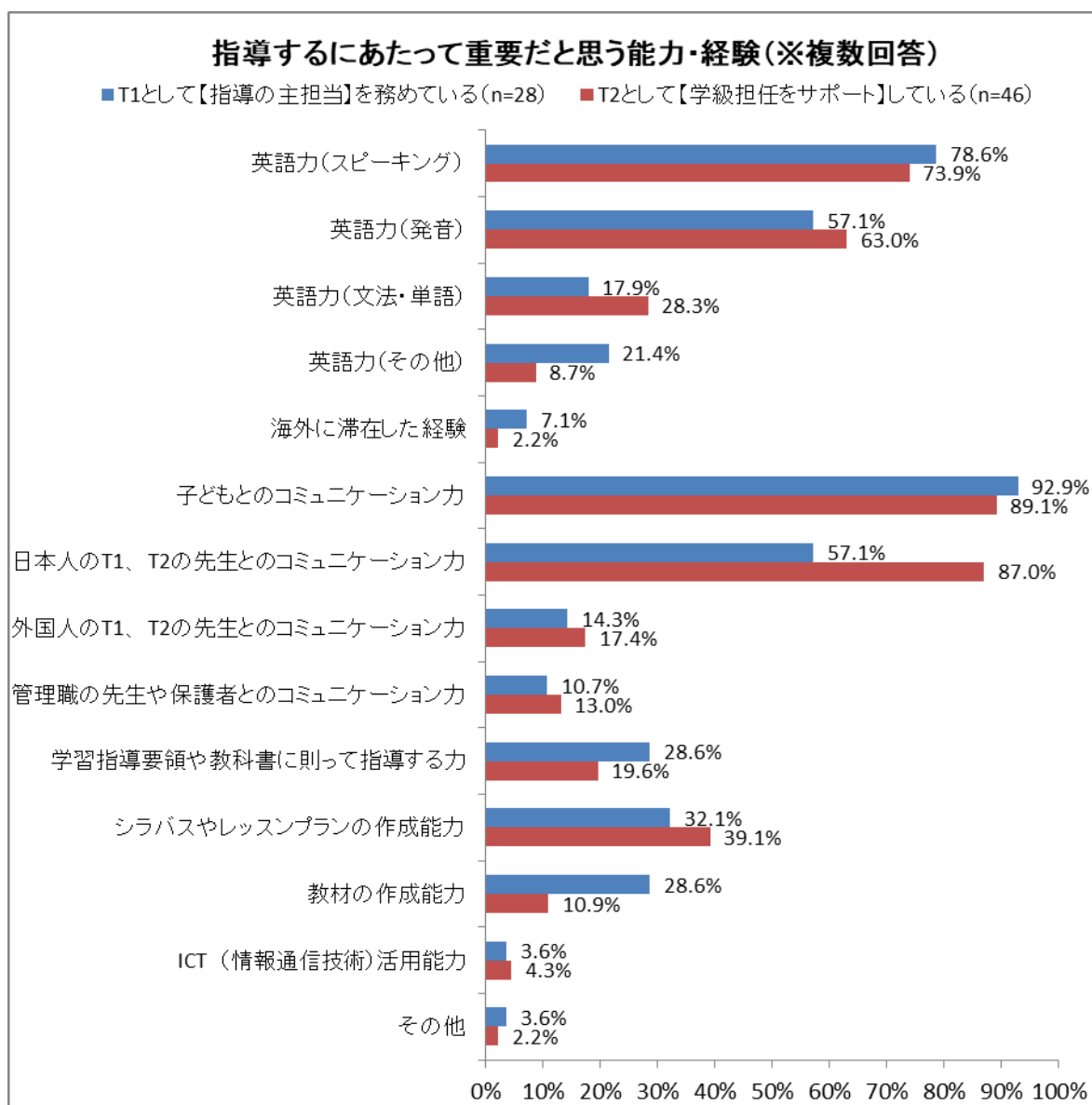
## ■指導時間以外の業務とそれに対する給与

T1 もしくは T2 として時給制で指導をしている人 (T1 : 21 名、T2 : 34 名) に、「指導時間以外の業務の実施状況」及び、「指導時間以外の業務に給与が支払われているか」を問うた設問の回答を以下のグラフに示す。T1 の方が T2 に比べて指導時間以外の業務に携わる割合がやや高かった(「シラバス・レッスンプラン作成」が 90.5%、「教材準備」が 100.0%、「授業の打ち合わせ」が 95.2%、「授業の評価・採点」が 52.4%)。しかし、それに対する給与に対しては T1 の方が「支払われない」の割合がむしろやや高い。地域人材の給与は T1、T2 に関わらず、直接指導以外の業務への対価も含めて時給が設定されているケースが多いと考えられる。



## ■指導にまつわる能力・経験についての考え

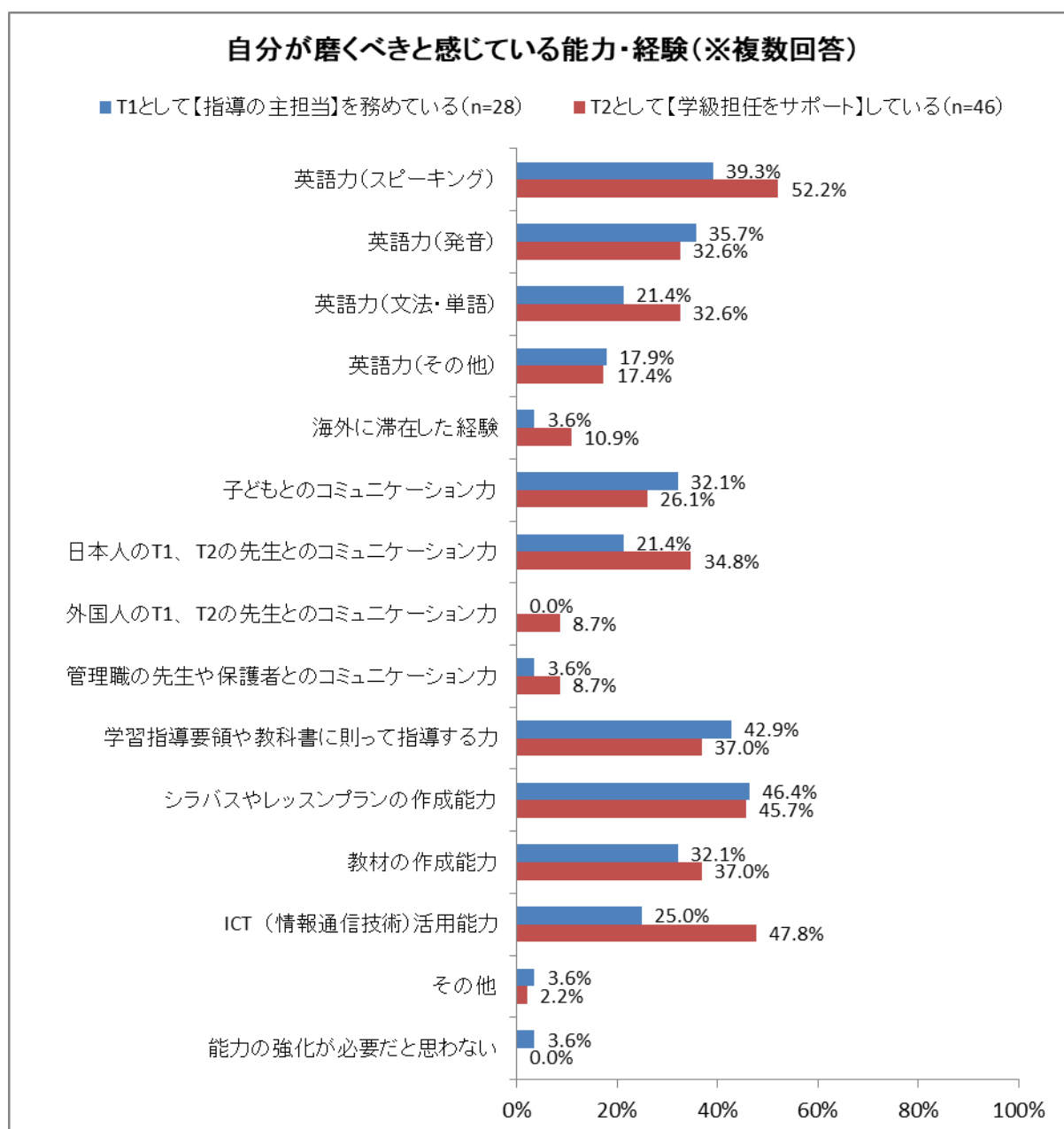
「指導するにあたって重要だと思う能力・経験」を問うた設問への回答を以下のグラフに示す。



T1、T2ともに、「英語力(スピーキング)」(それぞれ78.6%、73.9%)、「英語力(発音)」(それぞれ57.1%、63.0%)、「子どもとのコミュニケーション力」(それぞれ92.9%、89.1%)、「日本人のT1、T2の先生とのコミュニケーション力」(それぞれ57.1%、87.0%)の割合が高かった。

T1とT2を比較すると、T1は「学習指導要領や教科書に則って指導する力」が28.6%でT2(19.6%)より9.0ポイント高く、「教材の作成能力」が28.6%でT2(10.9%)より17.7ポイント高かった。T1は授業で主担当として指導をするためか、T2よりも「何を、どのように指導するか考える力」が求められると感じているとみられる。また、前の設問で見たように、「教材準備」に携わる割合が高いためか、教材作成能力も重要だと感じている。T2は「日本人のT1、T2の先生とのコミュニケーション力」が87.0%でT1(57.1%)とは29.9ポイントと大きな差があった。T1は授業においてある程度裁量を持っているが、T2と一緒に授業を行う学級担任と「何をどこまでやればいいのか」を細かく調整していく必要があるためか、学級担任とのコミュニケーション力が重要だと感じている。

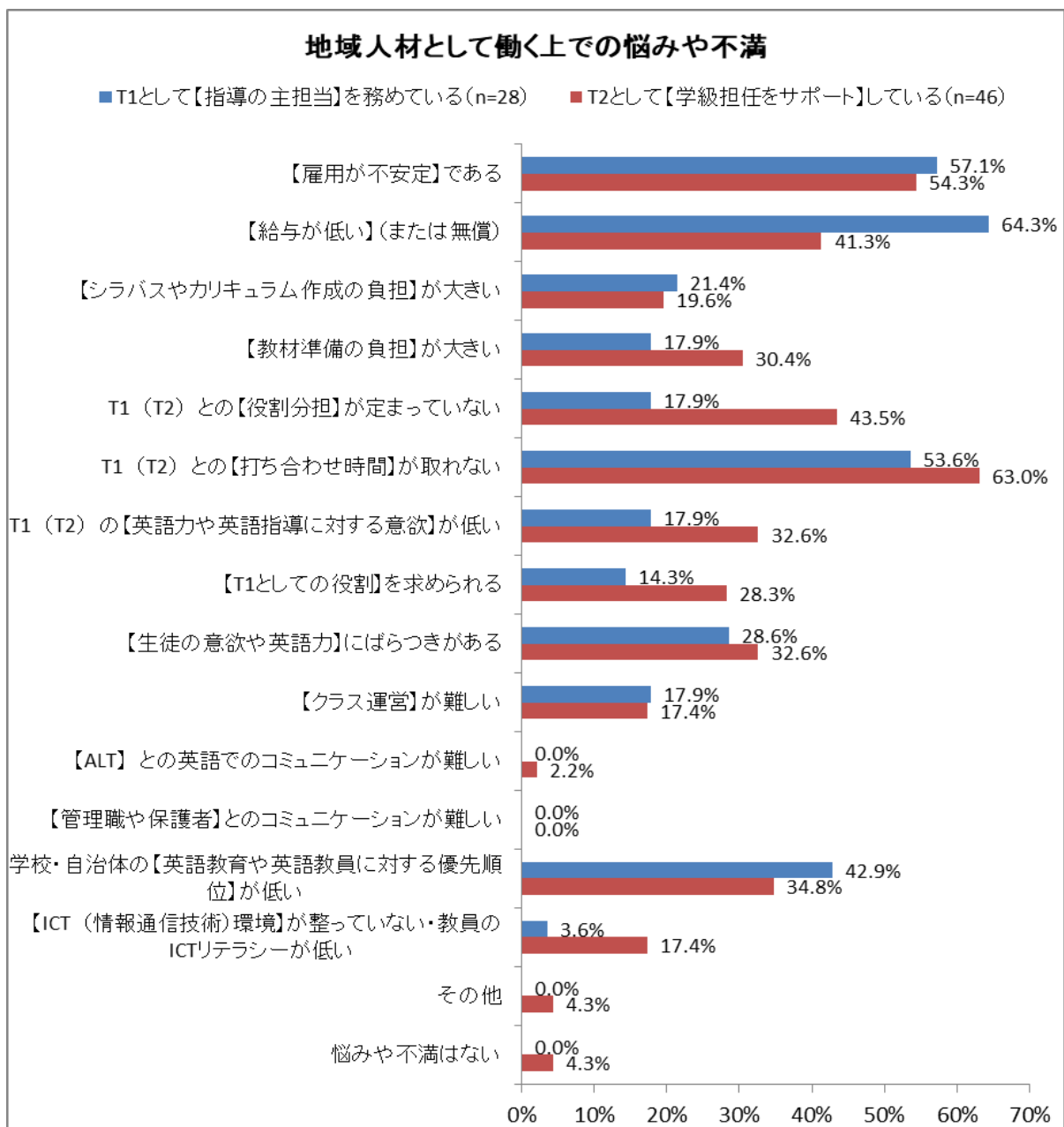
次に、自分が磨くべきと感じている能力・経験を問うた設問への回答を以下のグラフに示す。



前の「指導するにあたって重要だと思う能力・経験」を問う設問では T1、T2 ともに「英語力(スピーキング)」(それぞれ 78.6%、73.9%)、「英語力(発音)」(それぞれ 57.1%、63.0%)が多く挙げられていたが、それらの能力を強化する必要性は T1、T2 ともそれほど感じていないことがわかる(「英語力(スピーキング)」はそれぞれ 39.3%、52.2%、「英語力(発音)」はそれぞれ 35.7%、32.6%)。一方で、「学習指導要領や教科書に則って指導する力」(それぞれ 42.9%、37.0%)、「シラバスやレッスンプランの作成能力」(それぞれ 46.4%、45.7%)、「教材の作成能力」(それぞれ 32.1%、37.0%)、「ICT(情報通信技術)活用能力」(それぞれ 25.0%、47.8%)については、「指導するにあたって重要だと思う能力・経験」での回答割合以上に、「自分が磨くべきと感じている能力・経験」として挙げた人が多い。2020年の教科化に向けて必要になるのではないかと考えている人が多いと推察される。

## ■地域人材として働く上での悩みや不満

T1は「給与が低い」ことに対する不満がある人が64.3%で、T2の41.3%と比べて23.0ポイント高い。T1として教えている人は、シラバスやカリキュラム作成、教材準備を実施すること自体にそれほど不満はないが、それらに対して十分な給与が支払われていないことに不満を持っていると考えられる。一方でT2は、「教材準備の負担が大きい」(30.4%)、「T1との役割分担が決まっていない」(43.5%)、「T1との打ち合わせ時間が取れない」(63.0%)、「T1の英語力や英語指導に対する意欲が低い」(32.6%)、「T1としての役割を求められる」(28.3%)といった点でT1とのポイント差が大きい。T2は、あくまで学級担任が授業の主担当であるため、業務の分担や打ち合わせ時間の確保に苦戦している様子が窺える。学級担任の英語力や指導力、意欲が低い場合に、T2待遇であってもT1としての役割を求められている、というケースもあるとみられ、指導を始める前に予想していた内容と実際の業務に隔たりがあることが不満につながっているのかもしれない。



ここまで見てきた項目から、小学校で地域人材として指導をしている人のうち、T1として指導の担当を務めている人と、T2として学級担任をサポートしている人の特徴をまとめる。

T1として指導の担当を務めている人は、指導以外の業務（「シラバス・レessonプラン作成」、「教材準備」、「授業の打ち合わせ」、「授業の評価・採点」）を実施する割合がT2と比べて高い。それらを実施すること自体への不満はそれほど感じていないが、半数以上の人々が「給与が低い」ことに不満を持っている。雇用側には、指導以外の業務も含めて労力に見合った待遇を整えることが求められる。

T2として学級担任をサポートしている人は、指導以外の業務を実施する割合はT1よりも低いが、指導時間に加えてこれらの業務を学級担任の方針の下で行う、もしくは学級担任にお願いして協力してもらうので、日本人の先生とのコミュニケーション力が重要だと感じている。また、日本人の先生との役割分担や打ち合わせ時間の確保に不満を感じている。雇用側が学級担任と地域人材の打ち合わせ時間を確保し、学級担任と地域人材の担当業務を明確にした上で、「何をどこまでやればいいのか」に対する不安を解消することが、地域人材のさらなる登用につながるだろう。

### 3.3 J-SHINE 事務局に対する意見・要望

記述式・任意で回答を求めた「J-SHINE 事務局に対する意見・要望」について、459 件ものコメントを得た。J-SHINE 資格取得者の状況が窺い知れるものも多いため、代表的なものを抜粋して紹介する。

#### ■J-SHINE 資格の認知度・評価が低い（107 件）

- ・ 小学校で英語科の主任の先生や校長先生ですらご存知ないので残念です。
- ・ 特に地方ではこの資格がほとんど認知されていないのが現状です。また資格があっても満足な収入が得られるには程遠いというのも現状であると思います。
- ・ 現場のニーズと J-SHINE の周知のバランスが悪い。現場は英語を指導できる日本人が欲しいにも関わらず、教員免許を持った人を探す傾向がある。
- ・ 取得した時は、J-SHINE の資格を持っているので小学校で働きやすいのかと思ったら、文科省も外国人に重きをおいて、J-SHINE の立場が薄いように感じる。

#### ■資格を活かせていない（希望の求人／求人自体がない）（105 件）

- ・ せっかく資格を持っていても、小学校からの募集を見たことがない。私が住んでいる自治体は、ALT しか採用していない。
- ・ 小学校での英語教育に携わる機会自体が少ないので知識やスキルが低下してしまうことが不安。取得後に活かせる機会が欲しい。
- ・ 英語を教える仕事自体がほとんどありません。例えあったとしても十分な収入がない上、授業の準備にも時間がかかるし、またその準備にも費用がかかります。
- ・ 今すぐ仕事に直結しなくても構わないので、ボランティアや TT 補助などで活動できる場が欲しいと感じます。

#### ■仕事を紹介してほしい（87 件）

- ・ 勤務地ごとの求人一覧がわかると探しやすい。
- ・ 各自治体や学校によって、指導者の採用基準、待遇などがまちまちです。そのような情報の共有を簡単にできるとよいと思います。

#### ■スキルアップの機会が欲しい（54 件）

- ・ 英語（特に小学校）教育に関する状況が日々変化しています。地域間、学校間でも取り組みが異なる感じがします。そうした変化に応じたフォローアップ研修をお願いできたらと思います。
- ・ 教科化にあたり、教科書を用いた研修を行ってほしい。所見など、基本的な教務知識も事前にあるとよい。
- ・ 資格取得者対象にオンラインでのフォローアップや、今後資格を取りたい方向けにもオンライン学習による資格取得の機会があるとよいのではないのでしょうか。



- ・ ブランクが長くなり、再開に自信がありません。ブランクが長い資格者向けの講習があるといいなと思います。

#### ■小学校英語に関する最新情報が欲しい（17件）

- ・ 生徒さんの現在の英語力や英語に対する意欲などを知りたいです。
- ・ 細かい現在の英語教育の情報及び今後の方向性など教えていただきたい。

#### ■更新期間、料金等への不満（16件）

- ・ 更新期間をもっと長くしてほしい。
- ・ 更新費用が高過ぎるので、値下げしてほしい。

#### ■待遇の改善希望（13件）

- ・ 自治体にもよりますが、J-SHINE 資格者の報酬がとても低いと聞いています。ボランティアではないので、英語講師の相場の報酬が得られなければ、従事するモチベーションは上がりません。また、ALT やクラス担任の先生との調整や、今後成績をつけることなどを考えると、英語だけを教えに行くわけではないと思いますので、その辺りがクリアにならないとなかなか踏み出せません。
- ・ 資格を取ることに、そもそもの英語力をつけるためにも、私を含め多くの方がかなりの投資をしていると思います。今の小学校の待遇では、それらが正当に評価されているとは思えません。
- ・ 仕事にするには収入が見合わないと感じます。特に年齢の若い優秀な人達には、各種条件面をしっかりと整えて、活動の場所を増やしてあげて欲しいと思います。これは子ども達の将来に有益な事と思います。

#### ■J-SHINE 資格取得者の指導事例を知りたい（12件）

- ・ 他の小学校ではこんな風に担任の先生と英語の授業をしているという例があれば嬉しいです。

#### ■仕事の探し方がわからない（11件）

- ・ 小学校で働くにはどうすればいいのか、どこで求人が出ているのか、どの程度働かないといけないのか（週何回とか、どのくらいの距離の学校と何校掛け持ちする可能性があるのか）などの情報を得られる場が分からず、資格を活かせないままです。市での募集だったりするのだと思いますが、情報が少なく、わからないことが多いと思います。

#### ■授業の実践法を学びたい（10件）

- ・ 教科化にあたって、模範授業を見たい。
- ・ 資格を取得した後インターンやアシスタントのような形で仕事について学べる機会があるといいと思う。

#### ■小学校英語教育そのものへの不満（9件）

- ・ 学校の予算の関係で年間上限 80 時間しか授業に入れず、あとはクラス担任が頑張っている状況ですが、間違った発音や指導をしている場面を見ると、もう少し予算を増やしてこちらにおまかせいただきたい、と思うことがあります。英語嫌いが生まれないように、ALT の英語 **only** の授業についていけない子への配慮もしています。
- ・ 発音がきれいというだけで、外国の方の ALT を講師にするよりも、日本の英語教育の実情をよく知っている日本人の英語講師が授業をする方がいいことを、実際に小学校で授業をして実感しました。このことを世の中に広めてもらいたいです。
- ・ 前倒して英語を始めている学校が多いが、毎年変わる ALT まかせの学校が少なくないと感じる。担任の先生にも英語の指導力を求められないので、日本人英語指導担当を置くよう文科省や教育委員会に積極的に働きかけてほしい。

#### ■J-SHINE 資格取得者の今後が不安（7件）

- ・ 教員免許を持っておりませんが、今後は小学校の教員免許を持った若い教員が増えれば、小学校英語指導者資格があっても、小学校では働けなくなりませんか？
- ・ 当初は、小学校側も私たちに特殊技能者として期待してくれていたが、担任が教える事に決まっからは、ただのつなぎのような存在になったのが残念。

#### ■資格取得条件を厳格化してほしい（4件）

- ・ 模擬授業などのレッスンも資格取得条件にしたほうが、実践に活かせる資格になるはずです。
- ・ 資格者のレベルを一定以上に保つために、資格を取得するにあたって **speaking** テストの導入が望ましいと思います。ばらつきが激しいですし、あまりに英語力が低い方が指導者と名乗っている事に違和感があります。J-SHINE が信頼のできる資格という地位を確立していただくためにもテストにより底上げをするべきだと思います。

#### ■ポジティブな意見（27件）

- ・ 子どもが独立して自分の時間ができ、現在自宅にて小学生を教えています。今後も大切に子どもたちをお預かりすることで、社会貢献をしたいと思っています。

その他の意見・要望（73件）には、J-SHINE 資格の区分や認定基準についての質問、子どもに英語を教える以外の仕事（中高生への指導や採点業務）の紹介の要望などが見られた。

### 3.4 今後の J-SHINE 資格取得者へのアドバイス

本調査では、最後の設問（属性情報などを除く）として、これから資格を取得される方へのアドバイスを記述してもらった。214 件のコメントから代表的なものを抜粋して紹介する。

#### ■英語力向上や自己研鑽が大切（25 件）

- ・ 資格取得はゴールではなくスタートなので、ここから沢山の経験を経てスキルアップする意欲が大切だと思います。
- ・ 英語力と発音は、親から期待度が高いので重要だと思います。
- ・ 来年から小学生の英語教育が大幅に変わるので、指導要領や教科書を研究してほしい。特に 5、6 年生は中学生に準ずるように習得しなくてはいけない単語などがかなり多い。小学生から英語嫌いにならない指導法も研究してほしい。
- ・ 英語教育だけでなくさまざまな事柄に興味を持って、豊かな発想力を養うよう努力すると楽しく教えられると思います。

#### ■J-SHINE 資格を取っておくとよい（25 件）

- ・ 生徒の保護者の皆様へ資格取得を伝えることで、高い意識をもって語学教育にあたっているというアピールができると思います。
- ・ 国際化の中、英語は今後もっと必要になるので英語や子どもが好きな方は取得していて損はないと思います。
- ・ 現時点で見通しはなくとも、資格を持つことで活躍できる幅が広がっていくことは間違いありません。自分の知識や経験を活かして、子どもたちが楽しんで英語を学べる環境作りに貢献することは非常にやりがいがあります。

#### ■J-SHINE 資格・待遇に期待し過ぎない方がよい（23 件）

- ・ 資格保持者を小学校が求めていると考えない方がよい。小学校は教員免許保持者、ネイティブを必要としているところが多い。それを踏まえた上で、自分自身の為に勉強する機会と捉えた方がよいと思う。
- ・ 小学校での指導にはつながらないと思っておいの方がいいかもしれません。ただ子ども向け教室で指導する際などに、資格があることで信頼感は増すと思います。

#### ■自己啓発になる・楽しい（21 件）

- ・ 英語がより一層好きになり、楽しみながら勉強して取得できる資格です。
- ・ 持っていて自信になる資格ですので積極的に取得していただきたいです。また、資格取得のための勉強はお子さまの理解にもつながります。

■まずは資格を取得してみることから（14件）

- ・ 資格取得だけに意味があるのではなく、資格取得をする過程で得た経験や知識が、いつかどこかで何かにつながり、還元されていくのだと思うので、まずは資格取得を目指す中で楽しみながらさまざまなことに挑戦していけばきっと自分にとって意味のある大切な時間になると思います。

■応援コメント（14件）

- ・ 英語に対する愛を失わず、経験を積んで、子ども達に愛され信じられる先生になってください。大きな喜びが待っています。
- ・ どんどん英語の教科化の年齢が下がってきて、教えられる人数も限られてきていると思います。現場の学校の先生方もそこまで手が回らずに苦勞していると聞きます。J-SHINE 資格を取ってくれる人がたくさん増えてほしいと思います。

■資格取得が自信につながる（12件）

- ・ 資格があることで英語指導者として自信を持つことができますと思います。

■在住地域の求人情報を調べてから取得するとよい（12件）

- ・ 資格を取るのにお金も時間もかかるので、事前にお住まいの地域で仕事がありそうか調べられるほうが賢明です。

■小学校以外にも活躍の場がある（11件）

- ・ 教える場所はいろいろあるので、小学校にこだわらずとも資格を活かせる方法を柔軟に考えたらよいかと思います。
- ・ 英会話をメインとしたプリスクールも増えてきているので、活用の方は広がっています。子どもの成長過程を見守りながら自分の好きな英語を使った仕事をできることは大変有意義です。

■就職先は自ら積極的に探すこと（10件）

- ・ 資格を生かせる場所を探すためには自分から地域の小学校などへ積極的に働きかけることが必要だと思います。

■授業見学・実践等、現場で学ぶとよい（9件）

- ・ 小学校はもちろん、中学校の授業などさまざまな区市町村の授業を見学して勉強されるとよいと思います。

■教え方のレパートリーを増やすとよい（8件）

- ・ 生徒を教える環境、人数、指導の範囲によって授業をアレンジできる能力が資格取得後の大きな課題であると思います。
- ・ 研修などに積極的に参加して新しい指導法を習得することが望ましいと思います。

■児童英語指導の仕事は楽しい・やりがいがある（5件）

- ・ 英語が大好きで、子育て経験のある自分には、英語の先生だけでなく先生方や、子ども達の悩みの相談にも乗れ、やりがいを感じています。
- ・ 小学校での英語の授業はとても楽しいです。そして責任のある仕事だと思います。J-SHINEの資格を取って英語大好きキッズをたくさん育ててください。

■どの組織で取得するかが重要（4件）

- ・ 資格を取るなら、しっかりしたカリキュラムのあるところで、現場教育に結びつくスクールを選ぶ事を勧めます。
- ・ どの組織で取得したかというのが指摘されやすかったです。

■資格取得後の目標を持って受講するとよい（3件）

- ・ なぜ小学生への指導がしたいか、目的意識や目標を定めてからの資格取得がおすすめです。

■その他のアドバイス（62件）

- ・ 現在、文部科学省は担任主導の英語教育を第一にうたっております。英語力がなくても、発音が悪くても、T1は学級担任です。英語が堪能でも、J-SHINEの資格を持っていても、担任を立てなければなりません。どんなにもどかしくても自分はメインではなくサポートであることを忘れてはなりません。
- ・ 自分が習う立場だったら、といつも考えられるとよいと思う。
- ・ 児童のための英語指導についてだけではなく、今まさに変わりつつある現場の状況把握が役に立つ。
- ・ 官民および科目を問わず、教える立場というのは、ほんの小さなきっかけが子どもの人生に良くも悪くも大きな影響を及ぼす可能性があるということを念頭において取り組んでください。資格取得後からがスタートです！
- ・ 英語が上手、というよりも子どもが好き、子どもとのコミュニケーションが好き、というスキルのほうが大事です。
- ・ ただ子どもが好き、というだけではなく家庭環境等にも目を向け配慮をする姿勢が求められると思います。
- ・ 子どもには笑顔で、楽しく。

### 3.5 調査票

Q1 小学校英語指導者資格（J-SHINE 資格）を取得された年をお知らせください。（1つ選択）

- 1. 2003 年
- 2. 2004 年
- 3. 2005 年
- 4. 2006 年
- 5. 2007 年
- 6. 2008 年
- 7. 2009 年
- 8. 2010 年
- 9. 2011 年
- 10. 2012 年
- 11. 2013 年
- 12. 2014 年
- 13. 2015 年
- 14. 2016 年
- 15. 2017 年
- 16. 2018 年
- 17. 2019 年
- 18. 分からない

Q2 現在保持されている J-SHINE 資格の種類はどちらになりますか。（1つ選択）

- 1. 小学校英語準認定指導者
- 2. 小学校英語指導者
- 3. 小学校英語指導者+(プラス)
- 4. 小学校英語上級指導者
- 5. 小学校英語上級指導者+(プラス)
- 6. 小学校英語指導者育成トレーナー
- 7. 分からない

Q3 現在、どのような場所で、小学生以下の子どもに英語を教えていますか。当てはまるものをすべてお選びください。※ご自分のお子さんにのみ教えている場合は除いてお答えください。

- 1. 小学校（通常授業）
- 2. 小学校（放課後等の課外活動）

- 3. 放課後児童クラブ（学童保育、学童クラブ）
- 4. 幼稚園・保育園
- 5. 英語で教えるプリスクール
- 6. 英語教室・英会話スクール
- 7. 塾
- 8. 英会話サークル
- 9. 自宅での英語教室（フランチャイズ）
- 10. 自宅での英語教室（自営）
- 11. 自宅以外で英語教室等を主宰
- 12. その他[ ]
- 13. 以前は教えていたが、現在は教えていない
- 14. これまで教えたことがない

Q4 「以前は子どもに英語を教えていたが、現在は教えていない」と回答された方にお聞きします。これまでどのような場所で教えたことがありますか。当てはまるものをすべてお選びください。

- 1. 小学校（通常授業）
- 2. 小学校（放課後等の課外活動）
- 3. 放課後児童クラブ（学童保育、学童クラブ）
- 4. 幼稚園・保育園
- 5. 英語で教えるプリスクール
- 6. 英語教室・英会話スクール
- 7. 塾
- 8. 英会話サークル
- 9. 自宅での英語教室（フランチャイズ）
- 10. 自宅での英語教室（自営）
- 11. 自宅以外で英語教室等を主宰
- 12. その他[ ]

Q5 「現在子どもに英語を教えていない」理由は何ですか。当てはまるものをすべてお選びください。

- 1. 【勤務地が希望に沿った】仕事を得られなかったから
- 2. 【勤務時間が希望に沿った】仕事を得られなかったから
- 3. 【指導対象や指導内容が希望に沿った】仕事を得られなかったから
- 4. 子どもに英語を教えることで【十分な収入を得るのが難しかった】から
- 5. 【子どもに英語を教える以外の仕事】をやりたくなかったから
- 6. 他のことが忙しいなどで【仕事そのものをするのが難しくなった】から
- 7. 子どもに英語を教えることに【自信がなくなった】から

- 8. 子どもに英語を教えることを【いったん休みたくなった】から
- 9. 新しい仕事を探しているが【まだ見つかっていない】から
- 10. その他[ ]

**Q6** 「これまで子どもに英語を教えたことがない」と回答された方にお聞きします。これから、どのような場所で教えてみたいと思われますか。当てはまるものをすべてお選びください。

- 1. 小学校（通常授業）
- 2. 小学校（放課後等の課外活動）
- 3. 放課後児童クラブ（学童保育、学童クラブ）
- 4. 幼稚園・保育園
- 5. 英語で教えるプリスクール
- 6. 英語教室・英会話スクール
- 7. 塾
- 8. 英会話サークル
- 9. 自宅での英語教室（フランチャイズ）
- 10. 自宅での英語教室（自営）
- 11. 自宅以外で英語教室等を主宰
- 12. その他[ ]
- 13. 子どもに英語を教えたいとは思わない

**Q7** 「これまで教えたことがない」理由は何ですか。当てはまるものをすべてお選びください。

- 1. 【勤務地が希望に沿った】仕事を得るのが難しいから
- 2. 【勤務時間が希望に沿った】仕事を得るのが難しいから
- 3. 【指導対象や指導内容が希望に沿った】仕事を得るのが難しいから
- 4. 子どもに英語を教えることで【十分な収入を得るのが難しい】から
- 5. 【子どもに英語を教える以外の仕事】をやりたいから
- 6. 他のことが忙しいなどで【仕事そのものをするのが難しい】から
- 7. 子どもに英語を教えることに【自信がまだない】から
- 8. いつかは教えてみたいと思うが【今でないと思う】から
- 9. 【教えてみたいと思わなかった】から
- 10. 【どのように仕事を探せばよいか分からなかった】から
- 11. その他[ ]

**Q8** 「現在小学校以外で子どもに英語を教えている」方にお聞きします。今後、どのような条件が揃えば、小学校で教えてみたいと思いますか。当てはまるものをすべてお選びください。



- 1. 【勤務地が希望に沿った】 小学校で教えられる
- 2. 【勤務時間が希望に沿った】 小学校で教えられる
- 3. 【指導内容や指導対象が希望に沿った】 小学校で教えられる
- 4. 小学校での指導だけで【十分な収入が得られる】
- 5. 小学校での指導と、現在行っている【他の指導が両立できる】
- 6. 自分に時間ができるなど、【自分を取り巻く環境が変わる】
- 7. 小学生に対する【自分の指導に自信がつく】
- 8. その他[ ]
- 9. 小学校で教えてみたいと思わない

**Q9** 「現在、小学校で英語を教えている」と回答された方にお聞きします。小学校で教え始める前に、小学校以外の場所で、子どもに英語を教えていましたか。当てはまるものをすべてお選びください。※ご自身のお子さんにのみ教えていた場合は除いてお答えください。

- 1. 放課後児童クラブ（学童保育、学童クラブ）
- 2. 幼稚園・保育園
- 3. 英語で教えるプリスクール
- 4. 英語教室・英会話スクール
- 5. 塾
- 6. 英会話サークル
- 7. 自宅での英語教室（フランチャイズ）
- 8. 自宅での英語教室（自営）
- 9. 自宅以外で英語教室等を主宰
- 10. その他[ ]
- 11. 小学校以外で教えていなかった

**Q10** 「小学校で教えている」と回答された方にお聞きします。これまでにいくつの小学校で教えたことがありますか。(1つ選択)

- 1. 1校
- 2. 2校
- 3. 3校
- 4. 4校
- 5. 5校以上

**Q11** これまでに何年くらい小学校で教えていますか。教えた期間を通算してお答えください。(1つ選択)

- 1. 1年未満

- 2. 1～3 年未満
- 3. 3～5 年未満
- 4. 5～10 年未満
- 5. 10 年以上

Q12 ここからは、現在教えている小学校での状況についてお伺いします。どのような立場で教えていますか。  
(1 つ選択)

- 1. 小学校教員 (学級担任)
- 2. 小学校教員 (英語専科教員)
- 3. 地域人材
- 4. その他[ ]

Q13 「地域人材として教えている」と回答された方にお聞きます。現在の職に関する求人情報をどのように得ましたか。(1 つ選択)

- 1. 自治体の広報・インターネット等で
- 2. 自治体に直接問い合わせ
- 3. 自治体から頼まれて
- 4. 学校 (自分の子どもが通う学校以外) の広報・インターネット等で
- 5. 学校 (自分の子どもが通う学校以外) に直接問い合わせ
- 6. 学校 (自分の子どもが通う学校以外) から頼まれて
- 7. 自分の子どもが通う学校の広報・インターネット等で
- 8. 自分の子どもが通う学校に直接問い合わせ
- 9. 自分の子どもが通う学校から頼まれて
- 10. J-SHINE 事務局からの情報・ウェブサイトで
- 11. 新聞広告で
- 12. 求人サイトで
- 13. 知り合いから仕事を引き継いだ
- 14. その他[ ]

Q14 採用されるにあたり、ご自身が評価されたと思うポイントは何ですか。最も当てはまるものを 3 つまでお選びください。

- 1. 英語力
- 2. 海外滞在経験
- 3. 子どもへの英語指導経験
- 4. 子ども以外への英語指導経験

- 5. 小学校の教員免許
- 6. 中学・高校の英語教員免許
- 7. J-SHINE 資格
- 8. 育児など、子どもと接する経験
- 9. 人的ネットワーク（先生や学校とのつながりなど）
- 10. その他[ ]

Q15 小学校の英語クラスにおいて、どのような役割を務めていますか。（1つ選択）

- 1. T1 として【指導の主担当】を務めている
- 2. T2 として【学級担任をサポート】している
- 3. T2 として【専科教員をサポート】している
- 4. T2 として【ALT をサポート】している
- 5. T3 として主担当の教員と ALT など【複数の教員をサポート】している
- 6. その他[ ]

Q16 現在、小学校で、何年生の指導を担当していますか。複数の学年を担当している場合は、当てはまるものをすべてお選びください。

- 1. 1 年生
- 2. 2 年生
- 3. 3 年生
- 4. 4 年生
- 5. 5 年生
- 6. 6 年生

Q17 小学校での週あたりの英語の指導時間を教えてください。（1つ選択）

- 1. 1 時間未満
- 2. 1～3 時間未満
- 3. 3～5 時間未満
- 4. 5～10 時間未満
- 5. 10 時間以上

Q18 現在の小学校での指導は有償ですか、無償ですか。（1つ選択）

- 1. 有償（月給制）
- 2. 有償（時給制）

- 3. 交通費等の実費のみ支給
- 4. 無償

**Q19** 「指導が有償」と回答された方にお聞きします。小学校での雇用形態は以下のうちどちらになりますか。  
(1つ選択)

- 1. 【国や自治体に雇用】され、小学校に派遣されている
- 2. 【派遣会社等の民間企業に雇用】され、小学校に派遣されている
- 3. 【小学校に直接雇用】されている
- 4. その他[ ]
- 5. 分からない

**Q20** 「指導が時給制」と回答された方にお聞きします。教材準備や打ち合わせ、通勤時間など、指導以外の業務に対してどの程度給与（またはかかった費用）が支払われますか。それぞれの項目の状況について、最も近いものをお選びください。※業務自体を実施していない場合は「実施していない」をお選びください。

全額が支払われる／一部が支払われる／支払われない／実施していない

- 1. シラバス・レッスンプラン作成
- 2. 教材準備
- 3. 授業の打ち合わせ
- 4. 授業の評価・採点
- 5. 通勤

**Q21** 小学校で地域人材として英語を教えるにあたって、重要だと思うのはどのような能力・経験ですか。5つまでお選びください。

- 1. 英語力（スピーキング）
- 2. 英語力（発音）
- 3. 英語力（文法・単語）
- 4. 英語力（その他）
- 5. 海外滞在経験
- 6. 子どもとのコミュニケーション力
- 7. 日本人の T1、T2 の先生とのコミュニケーション力
- 8. 外国人の T1、T2 の先生とのコミュニケーション力
- 9. 管理職の先生や保護者とのコミュニケーション力
- 10. 学習指導要領や教科書に則って指導する力
- 11. シラバスやレッスンプランの作成能力

- 12. 教材の作成能力
- 13. ICT（情報通信技術）活用能力
- 14. その他[ ]

**Q22** 今後、小学校での指導を続けていく上で、ご自身が強化する必要があると思うのはどのような能力・経験ですか。当てはまるものをすべてお選びください。

- 1. 英語力（スピーキング）
- 2. 英語力（発音）
- 3. 英語力（文法・単語）
- 4. 英語力（その他）
- 5. 海外滞在経験
- 6. 子どもとのコミュニケーション力
- 7. 日本人の T1、T2 の先生とのコミュニケーション力
- 8. 外国人の T1、T2 の先生とのコミュニケーション力
- 9. 管理職の先生や保護者とのコミュニケーション力
- 10. 学習指導要領や教科書に則って指導する力
- 11. シラバスやレッスンプランの作成能力
- 12. 教材の作成能力
- 13. ICT（情報通信技術）活用能力
- 14. その他[ ]
- 15. 能力の強化が必要だと思わない

**Q23** 地域人材として小学校で教えている中で、悩みや不満はありますか。当てはまるものをすべてお選びください。

- 1. 【雇用が不安定】である
- 2. 【給与が低い】（または無償）
- 3. 【シラバスやカリキュラム作成の負担】が大きい
- 4. 【教材準備の負担】が大きい
- 5. T1（T2）との【役割分担】が定まっていない
- 6. T1（T2）との【打ち合わせ時間】が取れない
- 7. T1（T2）の【英語力や英語指導に対する意欲】が低い
- 8. 【T1としての役割】を求められる
- 9. 【生徒の意欲や英語力】にばらつきがある
- 10. 【クラス運営】が難しい
- 11. 【ALT】との英語でのコミュニケーションが難しい
- 12. 【管理職や保護者】とのコミュニケーションが難しい

- 13. 学校・自治体の【英語教育や英語教員に対する優先順位】が低い
- 14. 【ICT（情報通信技術）環境】が整っていない・教員の ICT リテラシーが低い
- 15. その他[ ]
- 16. 悩みや不満はない

**Q24** J-SHINE 事務局や登録団体へのご意見・ご要望や、今後、J-SHINE 資格を取得しようと考えている方へのアドバイスなどがありましたらお願いします。※本アンケートで、J-SHINE 事務局や登録団体にいただいたご意見・ご要望への個別回答はいたしておりませんので、あらかじめご了承ください。

1. ご意見・ご要望【 】
2. アドバイス【 】

**Q25** 最後に、あなたご自身についてお伺いします。 あなたの年代について教えてください。(1つ選択)

- 1. ~19 歳
- 2. 20~24 歳
- 3. 25~29 歳
- 4. 30~34 歳
- 5. 35~39 歳
- 6. 40~44 歳
- 7. 45~49 歳
- 8. 50~54 歳
- 9. 55~59 歳
- 10. 60~64 歳
- 11. 65~69 歳
- 12. 70 歳~

**Q26** あなたのお住まいの都道府県を教えてください。(1つ選択)

- 1. 北海道
- 2. 青森県
- 3. 岩手県
- 4. 宮城県
- 5. 秋田県
- 6. 山形県
- 7. 福島県
- 8. 茨城県
- 9. 栃木県

- 10. 群馬県
- 11. 埼玉県
- 12. 千葉県
- 13. 東京都
- 14. 神奈川県
- 15. 新潟県
- 16. 富山県
- 17. 石川県
- 18. 福井県
- 19. 山梨県
- 20. 長野県
- 21. 岐阜県
- 22. 静岡県
- 23. 愛知県
- 24. 三重県
- 25. 滋賀県
- 26. 京都府
- 27. 大阪府
- 28. 兵庫県
- 29. 奈良県
- 30. 和歌山県
- 31. 鳥取県
- 32. 島根県
- 33. 岡山県
- 34. 広島県
- 35. 山口県
- 36. 徳島県
- 37. 香川県
- 38. 愛媛県
- 39. 高知県
- 40. 福岡県
- 41. 佐賀県
- 42. 長崎県
- 43. 熊本県
- 44. 大分県
- 45. 宮崎県
- 46. 鹿児島県
- 47. 沖縄県

48. 海外

**Q27** あなたの性別をお知らせください。(1つ選択)

1. 男性  
 2. 女性

**Q28** これまで、旅行以外で、海外に滞在された経験はありますか。ある場合、その滞在期間はどのくらいでしたか。(1つ選択)

1. 旅行以外での海外滞在経験はない  
 2. 1カ月未満  
 3. 1～3カ月未満  
 4. 3～6カ月未満  
 5. 6カ月～1年未満  
 6. 1～3年未満  
 7. 3～5年未満  
 8. 5年以上

**Q29** あなたの最新の TOEIC® L&R Test のスコアを教えてください。(1つ選択)

1. 395点未満  
 2. 400点～445点  
 3. 450点～495点  
 4. 500点～545点  
 5. 550点～595点  
 6. 600点～645点  
 7. 650点～695点  
 8. 700点～745点  
 9. 750点～795点  
 10. 800点～845点  
 11. 850点～895点  
 12. 900点～945点  
 13. 950点～990点  
 14. 受験したが、スコアが分からない  
 15. 受験したことがない



Q30 以下のいずれかの英語資格をお持ちですか。当てはまるものがありましたらすべてお選びください。

- 1. 英検【準1級以上】
- 2. TOEIC L&R スコア+S&W スコア×2.5 の【合計が 1560 以上】
- 3. TOEFL iBT 【72 以上】
- 4. ケンブリッジ英検【160 以上】
- 5. IELTS【5.5 以上】
- 6. TEAP【309 以上】
- 7. TEAP CBT【600 以上】
- 8. 保持していない・わからない

Q31 J-SHINE 資格以外で保持されている（英語）指導に関する免許・資格や、英語教育に関するコースの修了経験等がありますか。当てはまるものがありましたらすべてお選びください。※当てはまるものがない場合は、「免許・資格や英語教育に関するコースの修了経験はない」をお選びください。

- 1. 小学校の教員免許
- 2. 中学校・高校の英語教員免許
- 3. 中学校・高校の英語以外の教員免許
- 4. 児童英語インストラクター資格（一般財団法人 日本能力開発推進協会（JADP）認定）
- 5. TESOL/TESL/TEFL など【英語が母語ではない人々向けの英語教授法】に関するコースの修了経験
- 6. TESCOL など【英語が母語ではない子ども向けの英語教授法】に関するコースの修了経験
- 7. その他[ ]
- 8. 免許・資格や英語教育に関するコースの修了経験はない

## おわりに

---

2020年度以降、小学校5、6年生で外国語が教科となり、3、4年生から外国語活動が始まります。小学校英語授業の目的とされる、「生徒の音声面のスキル向上」や、「生徒に英語を好きになり、国際理解への関心を持ってもらう」ためには、ロールモデルとなる先生自身が、英語で十分にコミュニケーションができ、生徒のやる気を引き出す楽しい授業をプランニングできることは重要な要素であると言えるでしょう。2020年度以降、これまでの全教科指導に加えて英語授業の時間数が増えること、プログラミング教育が導入されることなどの影響で、小学校の先生の負担が増えることが見込まれるため、小学校の先生方は英語授業への対応に今以上の時間を割くことがなかなか難しいという状況が予想されます。今回、J-SHINE 資格取得者の能力・経験やその後の就業状況について大規模な調査を初めて行い、J-SHINE 資格取得者の中には、高い英語力や長期の海外経験、英語指導経験を持つ人材が多いことが判明しました。このような人材を小学校現場で適切に活用していくことができれば、先生方の負担が軽減されるとともに、上に述べた小学校英語授業の目的に沿った授業を実現する一助となるでしょう。文部科学省の方針でも、必要に応じて担任の先生と英語が堪能な地域人材が協力して授業を進めていくことを推奨していますが、本調査で判明した通り、J-SHINE 資格取得者のうち、実際に地域人材として小学校で指導している人の数は少なく、「教えたい」という気持ちを持って J-SHINE 資格を取得しても、資格を活用できていない資格者も多いという現状があります。教育現場に新しい仕組みを導入するのは簡単なことではありませんが、その結果として2020年度からの英語教育改革がより充実したものになれば、長年「英語ができない」と言われ続けている日本人にとって、大きな転換点となるかもしれません。J-SHINE 資格者および受け入れ側の自治体や学校の皆さまには、このレポートを参考にいただき、それぞれにできることを一つでも見つけていただければ幸いです。

今回の調査では、1,980名もの J-SHINE 資格取得者の方にご回答の協力を賜りましたこと、深く御礼申し上げます。J-SHINE 事務局といたしましても、地域人材の数、有償で教えている方の数ともに増加しており、小学校英語指導における地域人材の就業機会が拡大し、地位も向上してきているという認識であります。現職で働いている方の中には5年以上指導されている方も半数近くおり、小学校英語授業の開始初期から長年にわたり教えている方のご活躍があつてこそ、後進の方たちの道に繋がっていると考えます。一方で、小学校での地域人材の活用が発展途上である現状を踏まえ、事務局としてもまだ努力が必要な点が多々あることについても、皆さまのお声から痛感いたしております。小学校の先生方と J-SHINE 資格者が手を取り合つて、子どもたちの英語能力を伸ばす上で必要なサポートをするために、J-SHINE 事務局および登録団体は、引き続きたゆまぬ努力を続けていく所存でございます。





◆連絡・問い合わせ先◆

---

特定非営利活動法人 小学校英語指導者認定協議会  
東京都港区西新橋 1-20-10 西新橋エクセルビル 4F

E-mail: [support@j-shine.org](mailto:support@j-shine.org)

株式会社アルク  
アルク教育総合研究所  
東京都千代田区九段北 4-2-6 市ヶ谷ビル

Email: [souken@alc.co.jp](mailto:souken@alc.co.jp)